

千葉県八千代市

# 境堀遺跡

(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅳ



2005

大成建設株式会社

八千代市遺跡調査会

# 序 文

八千代市は下総台地の北西部に位置し、東京への通勤圏内として昭和32年の八千代台団地の入居以来、おもに住宅都市として発展してまいりました。特に、昭和40年代中ばからは次々と団地の建設が行われ、それに伴う人口の増加は目ざましいものがあり、八千代市の姿は近郊農業地帯から住宅都市へとその趣を換えております。しかし八千代市はかつての印旛沼と新川等の豊かな水を背景とした豊かな自然も残され、新川を中心とする水辺は市民の憩いの場ともなっており、今後も自然を多く残した住宅都市として発展していくことと思われまます。

一方、この住宅都市としての発展にともなう宅地造成等によって失われる遺跡を保護するために、発掘調査等を行いその保護に努めてまいりました。そしてこの緑豊かな大地には、およそ三万年前の昔である旧石器時代から多くの人々が暮らしを営んできていたことが、近年の調査によって分かてまいりました。また、新川流域の奈良・平安時代のムラの跡からは、数多くの墨書土器が出土し、八千代市は全国でも墨書土器の出土では有数の地となっております。

このようななかで、八千代市域の北東部の保品、神野、米本にわたる地区に「(仮称)八千代カルチャータウン」の開発が計画されたのは昭和40年代とのことでした。この開発予定区域内には多くの遺跡の所在が知られており、ここに所在する埋蔵文化財の保護について関係諸機関による慎重な協議が重ねられてまいりました。その結果、遺跡の一部を現状保存し、保存のできない地区についてはやむをえず発掘調査を行い記録保存の措置を講ずることとなりました。

発掘調査は八千代市遺跡調査会の手により昭和63年3月から開始され、平成11年3月に終了致しましたが、この期間に調査を行った遺跡は9遺跡34地点に及び、旧石器時代から近代に至る貴重な調査成果をえることができました。そして平成12年4月より順次、整理作業を進めておるところです。本報告書はこの9遺跡のうち、向境遺跡の調査の成果をまとめたものです。向境遺跡では縄文～奈良・平安時代のムラの跡が検出されており、それに伴う遺物も数多く出土しております。

本書が学術資料としてはもとより、広く教育機関や地域の歴史に関心をもたれる方々、また、文化財の保護のために広く活用されることを願ってやみません。

最後に、発掘調査から本書の刊行に至るまでの長期間にわたってご協力いただきました大成建設株式会社をはじめといたしまして、ご指導・ご助言をいただいた千葉県教育委員会等の諸機関、関係諸氏に厚くお礼申し上げますとともに、発掘調査および整理作業に従事された方々にも深く感謝いたします。

平成17年3月

八千代市遺跡調査会  
会 長 三浦 幸子

# 例 言

1. 本書は、『千葉県八千代市境堀遺跡（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書4』である。中世以降の記載内容については隣接する神野群集塚、向境遺跡も含むものとする。
2. 境堀遺跡は、千葉県八千代市神野字谷津台1105外に所在する。
3. 境堀遺跡の発掘調査及び整理作業は、大成建設株式会社の委託により、千葉県教育委員会・八千代市教育委員会の指導のもと、八千代市遺跡調査会が実施した。
4. 発掘調査の実施期間、調査面積等については、第1章に記載した。
5. 整理作業及び報告書刊行作業は、宮澤久史・朝比奈竹男が担当し、平成15年6月1日～平成16年3月31日までの期間実施した。
6. 本書の執筆・編集は宮澤久史が行った。縄文時代については一部を除き、中野修秀氏の全面的な協力を得た。
7. 本書の図版作成及び編集・レイアウト作業は、一部を除き、DTP(Desktop Publishing=コンピュータによる版下作成)システムによるデジタル化を図り、伊勢田めぐみ・八島大介(株式会社東京航業研究所)が担当した。
8. 発掘調査における航空写真及び遺構図・全測図・地形図の作成は、要航業株式会社・株式会社東京航業研究所が行った。
9. 整理作業及び報告書刊行作業におけるDTPシステムによるデジタル化作業全般において、株式会社東京航業研究所の協力を得た。
10. 遺物の実測図及びトレース図の作成については、一部を株式会社東京航業研究所に委託した。
11. 発掘調査に伴う出土品及び図面・写真等の記録類は、八千代市教育委員会が保管している。
12. 出土文字資料の判読・解説については、国立歴史民俗博物館平川南教授にご教授いただいた。
13. 発掘調査から本書の刊行に至るまで下記の機関及び諸氏をはじめとする多くの方々からご指導、ご協力を賜りました。記して感謝の意を表します。(五十音順・敬称略)  
さいたま市立博物館・(財) 印旛郡文化財センター・(財) 埼玉県埋蔵文化財調査事業団・  
(財) 千葉県文化財センター・(財) 千葉市教育振興財団埋蔵文化財センター・千葉県教育庁文化財課・  
富里市教育委員会・宮代町教育委員会・八千代市教育委員会・八千代市郷土博物館  
宇井義典・大沢孝・小川和博・小倉均・金子直行・上守秀明・川端弘士・篠原正・高橋一夫・  
田形孝一・高花宏行・田中啓之・原田昌幸・平川南・藤岡孝司・中野修秀・野口行雄・松井朗・  
峰村篤・宮崎朝雄・村松篤

# 凡 例

1. 遺構番号は発掘調査時には、遺構種別ではなく調査地区ごとの通番号を付与した。遺物の注記、図面・写真への記録はこれによった。しかし、本書では一部遺構別に通番号を新たに付与し直した。この遺構番号については、第1章に新旧番号の対照表を掲載したので参照していただきたい。

2. 本書の挿図において使用した地図は以下の通りである。いずれも一部改変・合成して使用している。

図1 国土地理院発行 1/25,000地形図 「小林」「佐倉」「白井」「習志野」(平成12年発行)

図2 大成建設株式会社発行 1/4,000 Y. K. プロジェクト 空中写真測量図(昭和63年発行)

3. 本書の挿図において、方位の表示のないものについては、公共座標に基づく座標北を上としている。

4. 本書の遺構実測図における用例は以下のとおりである。

(1) 図中及び本文中における方位は、公共座標に基づく座標北を示している。

(2) 縮尺率は原則として以下のとおりとするが、これ以外のものについては、図中に示したスケールを参照されたい。

住居跡 1/80 掘立柱建物 1/80 土坑 1/50 溝 1/50 炉穴 1/50 その他の遺構 1/80

(3) 住居跡平面図に使用した一点鎖線は、床の硬化範囲を示している。

(4) 遺構実測図で使用した破線は、推定復元線を示している。

(5) 遺構実測中のスクリーントーンの表示は原則として以下のとおりであるが、個々については実測図脇に表示した凡例を参照されたい。



(6) 竈のある住居跡にあっては、長軸と短軸の距離及び方位は、各コーナーから対角線に線を引いた上で住居の中心を出し、その中心の壁間での計測値を出した。また、主軸は煙道にて計測した。

5. 本書の遺物実測図における用例は以下のとおりである。

(1) 縮尺率は原則として以下のとおりであるが、個々については図脇に示したスケールを参照されたい。

土器実測図 1/4 土器拓影図 1/3 土製品 1/3 石器・石製品 2/3 1/2 1/3 1/4  
鉄器・鉄製品 1/4 銅製品 1/2 支脚 1/4



(2) 遺物実測図中のスクリーントーンの表示は以下のとおりである。

(3) 墨書・朱書は以下のスクリーントーンで表現した。墨書・朱書は不明瞭な部分が多いため、明瞭な部分はベタ塗り、不明瞭な部分は20%のトーンをかけて処理した。さらに文字の輪郭がはっきりしている部分は縁取りを行った。なお、推定復元部分は破線で示した。



6. 本書の遺物写真における用例は以下のとおりである。
- (1) 写真図版中における遺物番号は、本文中における遺物番号と一致している。
  - (2) 写真図版中の遺物写真縮尺は、墨書土器等を除き、概ね遺物実測図と同じとした。
  7. 墨書土器の判別にあたっては、赤外線投射カメラによってモニター観察を行った。また、報告書の写真作成については、一部コンピュータによって画像処理を行い、読みやすくしたものがある。
  8. 本書では土器に刻まれた文字のうち、土器の焼成前に刻まれたものを「匏（へら）書」、土器の焼成後に刻まれたものを「線刻」として区分している。
  9. 鉄製品及び銅製品については、株式会社東京航業研究所が、X線による撮影後、写真から実測を行った。

# 目 次

## 序 文 例 言 凡 例 目 次

第1章 序説	1
第1節 調査に至る経緯と経過	1
第2節 調査の方法	2
第3節 遺跡の立地と歴史的環境	6
第4節 遺跡の概要及び基本層序	9
第2章 遺構と遺物	14
第1節 縄文時代	14
(1) 竪穴住居跡	14
(2) 炉穴	25
(3) 土坑	30
(4) 遺構外出土遺物	45
1 土器	45
早期	45
前期	60
中期	63
後期～晩期	74
2 石器・石製品・土製品	78
第2節 弥生・古墳時代	87
第1項 弥生時代後期～古墳時代前期	87
(1) 竪穴住居跡	87
(2) 土坑	141
(3) 遺構外出土遺物	145
第2項 古墳時代後期	151
(1) 竪穴住居跡	151
(2) 遺構外出土遺物	152
第3節 奈良・平安時代	153
第1項 第1群の遺構と遺物	153
(1) 竪穴住居跡	153
(2) 掘立柱建物跡その他	167
(3) 土坑	177
第2項 第2群の遺構と遺物	178

(1) 竪穴住居跡	178
(2) 掘立柱建物跡	182
第3項 第3群の遺構と遺物	184
(1) 竪穴住居跡	184
(2) 掘立柱建物跡	222
(3) 土坑	237
第4項 遺構外出土遺物	241
1 土器・土製品	241
2 鉄製品	249
第4節 第4群中世以降及び時期不明	
(1) 神野群集塚	254
(2) 土塁・溝	262
(3) 土坑その他	294
(4) 遺構外出土遺物	295
第3章 考察	296
第1節 縄文時代	296
第1項 早期	296
第2項 前期	302
第4項 中期	302
第5項 後期	308
第2節 弥生・古墳時代	309
第1項 弥生時代	309
第2項 古墳時代	317
第3節 奈良・平安時代	320
第4章 向境遺跡補遺	326

# 第1章 序 説

例言にも記したとおり、本書は「(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書」のシリーズ4にあたる。従って事業全体に係わる「経緯と経過」、「調査組織」及び「立地と歴史的環境」等については、既刊の『千葉県八千代市(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業埋蔵文化財調査報告書1 栗谷遺跡-第1分冊-』(以下、「栗谷遺跡」と略)を参照されたい。ここでは、境堀遺跡を中心神野群集塚に係わる調査経過、立地、概要等について触れておきたい。

## 第1節 調査に至る経緯と経過

(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業は、大成建設株式会社により八千代市保品・神野・米本にわたる地区に計画された大学と住宅地のセット開発事業である。本事業地内には、本書の境堀遺跡をはじめ、向境遺跡、栗谷遺跡、上谷遺跡等の多くの遺跡が所在し、その取り扱いについて昭和62年12月から大成建設株式会社、八千代市教育委員会、千葉県教育委員会の3者間での協議が進められた。協議の結果、事業地内の一部を除き現状保存は困難の判断に達し、記録保存を前提とした発掘調査を実施する事が決定した。これにより、八千代市教育委員会、千葉県教育委員会の指導を受け、八千代市遺跡調査会が大成建設株式会社の委託を受け、昭和63年3月から当該開発事業地区内の埋蔵文化財発掘調査に着手した。

境堀遺跡の発掘調査も(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査の一環として、平成4年10月から確認調査が開始された。以後、開発事業計画の進捗と調整を計りながら断続的に確認調査及び本調査を実施していった。最終的に平成10年1月に、第4次本調査を終了し事業地区内の向境遺跡の発掘調査を終えた。

神野群集塚に関しては、境堀遺跡及び隣接する向境遺跡の両遺跡に複合して所在する、中近世の塚群で、両遺跡の本調査期間中に平行して調査を実施した。

調査期間、面積、地区等の詳細は表1-1-1及び図1-1-1～1-2-3のとおりである。

表1-1-1 境堀遺跡調査一覧表

	調査名	調査期間	調査面積	調査区域	担当調査員
1	第1次確認本調査	平成4年10月22日～ 平成5年8月20日	2,260m <sup>2</sup>	1地区	藤 茂美
2	第2次確認調査	平成6年8月9日～ 平成6年10月28日	1,016m <sup>2</sup> / 16,000m <sup>2</sup>	—	武藤健一
3	第2次本調査	平成6年11月14日～ 平成7年12月5日	5,100m <sup>2</sup>	3地区・4地区 5地区・6地区 7地区	市村義和
4	第3次確認調査	平成8年1月5日～ 平成8年2月20日	174m <sup>2</sup> / 1,570m <sup>2</sup>	—	藤 茂美
5	第3次本調査	平成8年1月20日～ 平成8年3月21日	1,286m <sup>2</sup>	8地区	藤 茂美
6	第4次本調査	平成9年12月19日～ 平成10年1月27日	230m <sup>2</sup>	9地区	常松成人

## 第2節 調査の方法

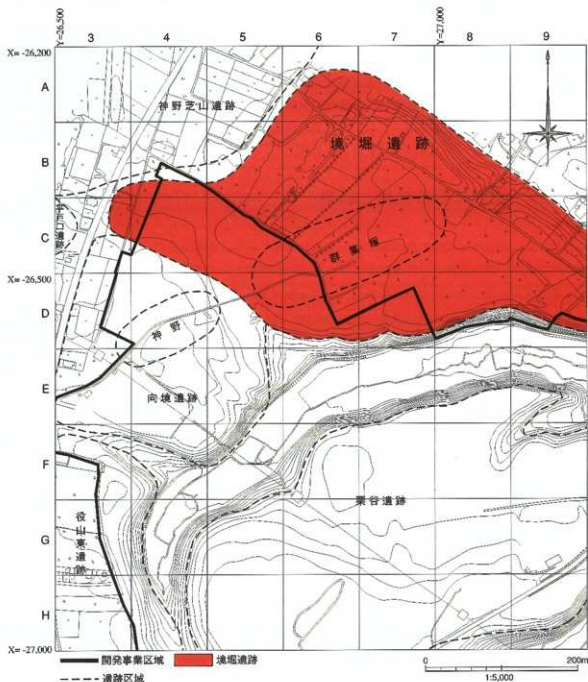


図1-2-1 境堀遺跡周辺地形図

調査方法については、基本的な部分は栗谷遺跡に準拠しているので詳細は『栗谷遺跡』を参照されたい。以下、概略を記すが、表1-2-1及び図1-2-1～1-2-3を同時に参照されたい。

**グリッド設定** 公共座標に沿ってグリッドを設定した。設定にあたっては、 $x=-26,200$   $y=26,300$ を起点とし100m単位で大グリッドとし、大グリッドを10m単位で100分割し中グリッドとし、中グリッドを5m単位で4分割し小グリッドとした。大グリッドの表記は、X軸については北から南へABC・・・とアルファベット順に、Y軸については西から東へ1 2 3・・・と数字で表記し表した。同様に、中グリッドは大グリッド北西から順次1～100の番号を付し、小グリッドも同様に中グリッド北西から順次1～4の番号を付した。



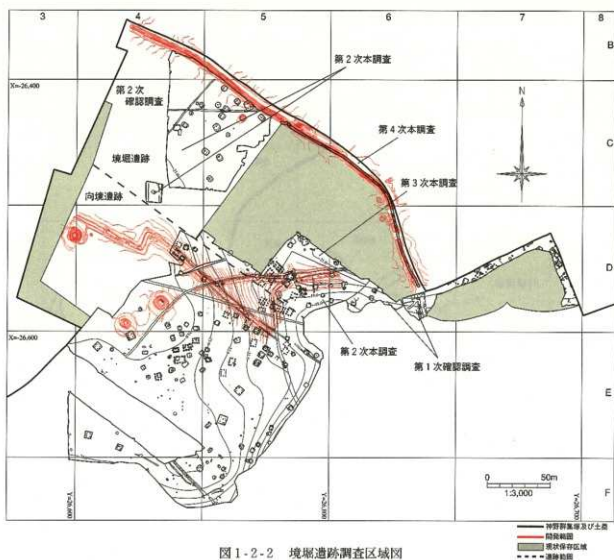


図1-2-2 境堀遺跡調査区域図

**遺構名称** 調査においては便宜的にいくつかの地区区割りを行いその地区ごとに遺構番号を付し、調査を行った。そのため、野外調査時と報告段階で遺構名称の変更が伴っている。報告書段階の遺構名称の命名は基本的に野外調査時のものを使用した。掘立柱建物跡、その他の遺構については、「栗谷遺跡」に準拠し、B=掘立柱建物跡、I=遺構

とした。また、掘立柱建物跡、その他の遺構については、隣接する向境遺跡との混乱を防ぐ為、各遺構の番号を100番台から始めることにした。対応の便宜を図るため表1-2-1に遺構番号の一覧表を掲載しておく。

**表土除去及び遺構確認** 確認調査においては、調査対象面積の10%を目安に表土除去を行い、包含層検出及び遺構検出に努めた。本調査においては、遺構検出上面までを重機によって表土除去を実施し、その後、人力による遺構検出作業を実施した。

**遺構調査及び記録方法** 検出された遺構については、土層観察用のペルトを残し覆土除去を行った。調査の進捗に合わせ適宜、写真撮影、図面作成等の記録作業を実施した。撮影には確認調査時においては35mmモノクロフィルム、35mmカラーリバーサルフィルムを使用し、本調査においてはプロローニー判モノクロフィルム、カラーリバーサルフィルムを基本としながら35mmモノクロフィルム、35mmカラーリバーサルフィルムを使用した。測量については、通常の遣り方実測に加え、光波測距機による測量、航空写真による測量を適宜用いて行った。

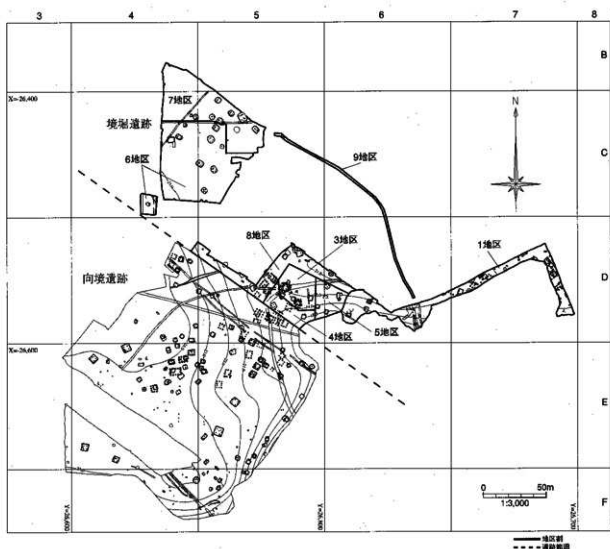


图 1-2-2 境堀遺跡地区划分

新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号	新番号	旧番号
縄文時代						弥生・古墳時代	
竪穴住居跡		土坑				竪穴住居跡	
8-001	—	1-008	—	1-045	—	6-001	—
9-015	—	1-017	—	1-046	—	7-009	—
炉穴		1-019	—	1-047	—	6-005	—
1-015	—	1-020	—	9-010	—	6-002	—
1-016	—	1-029b	—	9-011	—	6-003	—
1-029a	—	1-030	—	9-012	—	6-004	—
1-037	—	1-040	—	9-013	—	6-008	—
1-051	—	1-042	—	9-014	—	6-009	—
				9-016	—		



### 第3節 遺跡の立地と周辺遺跡及び歴史的環境

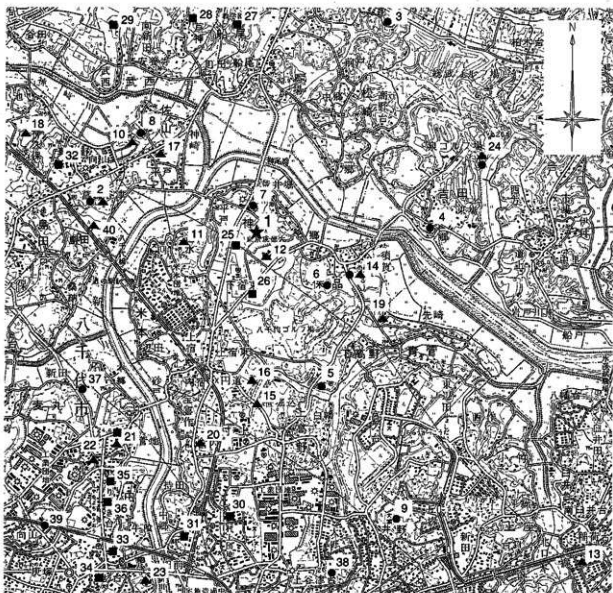


図1-3-1 境堀遺跡位置図 (1/50,000) 明治15年迅速測図

境堀遺跡は千葉県北西、八千代市神野字谷津台1105外に所在する。標高は約18m～21mで、旧水田面との比高は約10mである。地形的には下総台地の北西部に立地し印旛沼南岸の台地に位置する。八千代市を含めた印旛沼周辺の台地は、印旛沼の度重なる浸食の為、樹枝状に開析され、複雑な様相を呈している。八千代市の場合、台地構造は大きく3つの台地に分かれ、更に、それぞれが、複雑に開析されている。台地構造等の詳細は本シリーズ3の『向境遺跡』等を参照されたい(註1)。

周辺遺跡を概観すると(註2)、境堀遺跡(1)の西方の小支谷を隔て向境遺跡が、南の谷津の対岸の台地に縄文時代～奈良・平安時代の複合遺跡である栗谷遺跡、上谷遺跡(註3)が展開している。更に南側には雷遺跡、雷南遺跡、下宿東遺跡等が展開し、何れも縄文時代～奈良・平安時代の遺構・遺物を検出している。事業範囲を超えた西方には、役山東遺跡、役山遺跡、平戸口遺跡、神野芝山遺跡が連なって展開し、更には、本遺跡の所在する台地の西方の谷津を隔てた逆水地区に弥生時代を中心とした逆水遺跡が展開している。北方には縄文時代中期～後期にかけての汽水性の貝塚である神野貝塚が所在している。神野貝塚、境堀遺跡の北方は一段低い下位段丘となり、奈良・平安時代の南台遺跡が所在する。

向境～境堀遺跡にかけての一带には、中近世の神野群集塚が点在し、更にそれらに重なるように土塁・溝が存在している。このように、境堀遺跡は、縄文時代～中近世に至る複合遺跡で、奈良・平安時代に注目すれば、出土遺物、遺構配置から向境遺跡と綿密な関係が窺え、該期においては、本来同一の遺跡と考えることができる。これらの遺跡は今回の開発事業範囲を超え、隣接しながら大きく広がり、印旛沼南岸西端部における遺跡群を形成し、時代も旧石器時代～中近世に及んでいる。境堀遺跡はこうした遺跡群の中の1遺跡であり、縄文、弥生・古墳、奈良・平安時代を主たる時代とした遺跡である。



1. 境堀遺跡 2. 間見穴遺跡 3. 新井堀遺跡 4. 吉田馬ヶ台遺跡 5. 下高野新山遺跡 6. 郷遺跡 7. 神野貝塚  
 8. 佐山貝塚 9. 井野長割遺跡 10. 田原窪遺跡 11. 逆水遺跡 12. 栗谷遺跡 13. 臼井南遺跡群 14. おおびた遺跡  
 15. 平沢遺跡 16. 阿蘇中学校東側遺跡 17. 平戸遺地遺跡 18. 妙正神遺跡 19. 南谷遺跡 20. 宮内遺跡 21. 権後遺跡  
 22. ツサル山遺跡 23. 川崎山遺跡 24. トヶ前遺跡 25. 向境遺跡 26. 上谷遺跡 27. 船尾白幡遺跡 28. 鳴神山遺跡  
 29. 北の台遺跡 30. 村上遺跡群 31. 浅間内遺跡 32. 松原遺跡 33. 白幡前遺跡 34. 池ノ台遺跡 35. 北海道遺跡  
 36. 井戸向遺跡 37. 麦丸遺跡 38. 上谷津台南遺跡 39. 向山遺跡 40. 島田込ノ内遺跡

●縄文時代 ▲弥生時代 □古墳時代 ■奈良・平安時代

図1-3-2 境堀遺跡と周辺分布図 (1/50,000)

以下、境堀遺跡と関連する時期の主だった周辺遺跡について順に見ていきたい。

境堀遺跡の縄文時代では、早期、熱糸文期後半（稲荷台～花輪台）の遺物が少数と条痕文期の遺物が比較的まとまって出土した。遺構としては、竈穴、土坑が検出されている。これは隣接する向境遺跡（25）においても同様（花輪台～平板・天矢場）で、早期についても向境遺跡との関連は注目される。熱糸文期後半の遺物を出土する周辺遺跡としては、八千代市内で間見穴遺跡（2）、印西市で新井堀遺跡（3）等が挙げられ、何れも境堀遺跡に対して、市域中央から市境を流れる新川の対岸の台地に位置している。条痕文期については、これまでのカルチャータウン関連の調査でも条痕文期の遺物は多く出土していたが、栗谷、向境遺跡では比較的野島期の遺物が多く出土していたことに対し、境堀遺跡では、鵜

が烏台期の遺物が多く出土し、新たな傾向にあると言える。条痕文期の遺物を出土する周辺の遺跡としては八千代市内では、下野新山遺跡(5)等が挙げられ、他に印旛村の吉田馬々台遺跡(4)、トヶ前遺跡(24)等が挙げられる。その他、八千代市内で早期の遺構、遺物を検出する遺跡として、麦丸遺跡(37)、上谷津南遺跡(38)等があげられる。前期については、黒浜期の遺物の出土している。隣接する向境遺跡においても同様の遺物が出土している。八千代市内で前期の遺物を出土する遺跡として向山遺跡(39)、挿園の範囲外になるが、新林遺跡、ヲイノ作南遺跡等を挙げる事が出来る。中期については、少数ながら五領ヶ台期の遺物が出土している。同一事業内の上谷遺跡(26)との関連が目される。阿玉台期には、遺物の出土量が増大し、少数ながら遺構も検出される。このことは、近隣の向境遺跡、栗谷遺跡との違いを際立たせる事象である。続く加曾利E期も遺物出土量が比較的多く住居跡も検出されている。注目されるのは、土器片鏝が多く出土していることで、当該期の生業の一端を窺わせる。近隣の加曾利E期の遺跡としては、八千代市内で郷遺跡(6)が確認調査で検出されている。神野貝塚(7)、佐山貝塚(8)の様相は未だ明らかではないが、印旛沼を取り巻く中期の貝塚との関連を考えると興味深い。後期、晩期になると遺物の出土量が減る。近隣の後晩期の遺跡としては、佐倉市の井野長割遺跡が挙げられるだろう。

弥生・古墳時代については、弥生後期～古墳前期が主体となる。境堀遺跡で弥生中期の遺構・遺物の検出はなかったが、市内の中期の遺跡としては、田原窪遺跡(10)、逆水遺跡(11)、栗谷遺跡(12)が挙げられる。境堀遺跡の主体の後期に至ると、印旛沼南岸の弥生遺跡が増大する。八千代市内の遺跡で注目されるのが、前述した栗谷遺跡(12)が挙げられ、約90軒の堅穴住居跡を検出した。遺物は、南関東系の土器、北関東系の土器が混合された状況で出土している。弥生後期～古墳時代前期にかけての他の市内の調査例としては、新川東岸地区で、おおびた遺跡(13)、平沢遺跡(15)、阿蘇中学校東側遺跡(16)、南谷遺跡(19)、村上宮内遺跡(20)等があり、新川西岸地区では、権現後遺跡(21)、ヲサル山遺跡(22)、川崎山遺跡(23)等があり、更に、八千代市北西部で、遺地遺跡(17)、間見穴遺跡(2)、島田込ノ内遺跡(40)、妙正神遺跡(18)等が挙げられる。八千代市内での後期弥生土器の出土状況であるが、北関東或いは南東北に出自を持つであろう縄文系土器については、印旛沼周辺で比較的多く出土し、印旛沼から離れるにつれ、出現頻度が低下する傾向にあるようである。後期の輪積痕系土器と縄文系土器との関係、関連を考える上で示唆的である。更に周辺の遺跡として佐倉市に白井南式のタイプサイトである白井南遺跡群(13)、印旛村に前述のトヶ前遺跡(24)、挿園の範囲外となるが佐倉市の江原台遺跡等が存在する。

さて、奈良・平安時代の遺跡に着目して更に視点を広げたい。まずは、境堀遺跡と隣接する向境遺跡が挙げられ、遺構配置から考えて本来同一の遺跡と捉えて良いかと思われる。更に同一の開発事業地内の遺跡として、栗谷遺跡・上谷遺跡が挙げられる。栗谷遺跡では、堅穴住居跡55軒及び堀立柱建物跡13棟が調査され、多くの墨書土器も出土している。また上谷遺跡においては、現在整理中ではあるが、栗谷遺跡を遙かに凌ぐ奈良・平安時代の堅穴住居跡、堀立柱建物跡を検出し、多量の墨書土器も出土している。境堀遺跡の南方に展開する役山東遺跡においても調査されたのは遺跡の一部にすぎないが、奈良・平安時代の堅穴住居跡が調査され、集落の存在を示している。他の八千代市内の遺跡では、境堀遺跡の東方の保品地区に、郷遺跡、おおびた遺跡(14)等が所在し、村上地区には、有名な村上遺跡群(30)をはじめとし、浅間内(31)遺跡、殿内遺跡(35)等が所在する。西方には新川を超えた真木野地区に松原遺跡(32)等が所在する。新川の西岸には権現後遺跡をはじめとする萱田遺跡群が展開し、白幡前遺跡(33)が著名であり、北海道遺跡(35)、井戸向遺跡(36)等が所在する。更にその周辺の遺跡として、池ノ台遺跡(34)、川崎山遺跡等が挙げられる。これらの遺跡もまた、奈良・平安時代の単独遺跡ではなく、

縄文時代をはじめとするいくつかの時代に跨る複合遺跡である。また、印旛沼の北岸に位置することになるが、奈良・平安時代の遺跡として、北の台遺跡(29)、鳴神山遺跡(28)、船尾白幡遺跡(27)等が展開している。境掘遺跡を含め、これらの遺跡は、平安時代の『和妙類聚抄』に記載されている“下総國印幡郡”の郡域に相当する地域で、何れも多量の墨書土器を出土している。境掘遺跡を含め、これらの遺跡を一つ一つ解明し、関連づけてゆくことが本地域の奈良・平安期の在地社会の解明につながってゆくことであろう。

## 註

- (1) 3つの台地は、更に3つの段丘面に分かれ、標高25～30mの下総上位面、標高20～25mの下総下位面、標高11～14mの千葉段丘面に分かれる。境掘遺跡は下総下位面からそれに伴う緩斜面地に位置する。詳細は、

八千代市遺跡調査会 『向境遺跡』 2004

八千代市教育委員会 『平成6年度 八千代市埋蔵文化財調査年報』 1995 による。

- (2) 周辺遺跡については、以下の文献を参考にした。

八千代市教育委員会 『千葉県八千代市池ノ台遺跡発掘調査報告書』 1986

八千代市教育委員会 『千葉県八千代市道地遺跡発掘調査報告書』 1986

八千代市教育委員会 『平成6年度 八千代市埋蔵文化財調査年報』 1995

八千代市教育委員会 『八千代市埋蔵文化財調査年報 平成6年度版』 1996

八千代市教育委員会 『八千代市埋蔵文化財調査年報 平成7年度版』 1997

八千代市教育委員会 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成7年度』 1996

八千代市教育委員会 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成8年度』 1997

八千代市教育委員会 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成13年度』 2002

八千代市教育委員会 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成14年度』 2003

八千代市教育委員会 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成15年度』 2004

おおびた遺跡調査団 『おおびた遺跡』 1975

八千代市遺跡調査会 『萱田町川崎山遺跡』 1979

八千代市遺跡調査会 『池ノ台遺跡』 1979

八千代市遺跡調査会 『阿蘇中学校東側遺跡』 1980

八千代市遺跡調査会 『阿蘇中学校東側遺跡3』 1984

八千代市遺跡調査会 『八千代市川崎山遺跡』 1999

八千代市遺跡調査会 『栗谷遺跡A第1分冊』 2001

八千代市遺跡調査会 『栗谷遺跡-第2分冊-』 2003

八千代市遺跡調査会 『川崎山遺跡d地点』 2003

八千代市遺跡調査会 『栗谷遺跡-第3分冊-』 2004

八千代市遺跡調査会 『川崎山遺跡h地点』 2004

八千代市遺跡調査会 『向境遺跡』 2005

房総考古資料刊行会 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書3』 1975

房総考古資料刊行会 『村上遺跡群』 1975

佐倉市教育委員会 『白井南』 1975

江原台第1遺跡発掘調査団	【江原台】 1979
印旛村教育委員会	【吉田馬々台遺跡】 1980
財団法人千葉県文化財センター	【佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書1】 1977
財団法人千葉県文化財センター	【八千代市権現後遺跡】 1984
財団法人千葉県文化財センター	【八千代市北海道遺跡】 198
財団法人千葉県文化財センター	【八千代市井戸向遺跡】 198
財団法人千葉県文化財センター	【八千代市ヲサル山遺跡】 1986
財団法人千葉県文化財センター	【八千代市白幡前遺跡】 1991
財団法人千葉県文化財センター	【八千代市沖塚・上の台遺跡 他】 1994
財団法人千葉県文化財センター	【船橋印西線埋蔵文化財調査報告書1-八千代市島田込ノ内遺跡-】 1998
財団法人千葉県文化財センター	【八千代市向境遺跡】 1998
財団法人千葉県文化財センター	【千葉県北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書2-印西市鳴神山遺跡・白井谷遺跡-】 1999
財団法人千葉県文化財センター	【千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書15-印西市向新田遺跡-】 2002
財団法人千葉県文化財センター	【船橋印西線埋蔵文化財調査報告書2-八千代市道地遺跡-】 2004
財団法人千葉県文化財センター	【船橋印西線埋蔵文化財調査報告書3-八千代市間見穴遺跡-】 2004
財団法人千葉県文化財センター	【印西市新井廻2遺跡・前戸遺跡】 2004
財団法人印旛郡市文化財センター	【トヶ前遺跡発掘調査報告書】 1992
財団法人印旛郡市文化財センター	【佐倉市井野長割遺跡】 2004

(3) 上谷遺跡及び後述する殿台遺跡については現在整理中。



第4節 遺跡概要及び基本層序

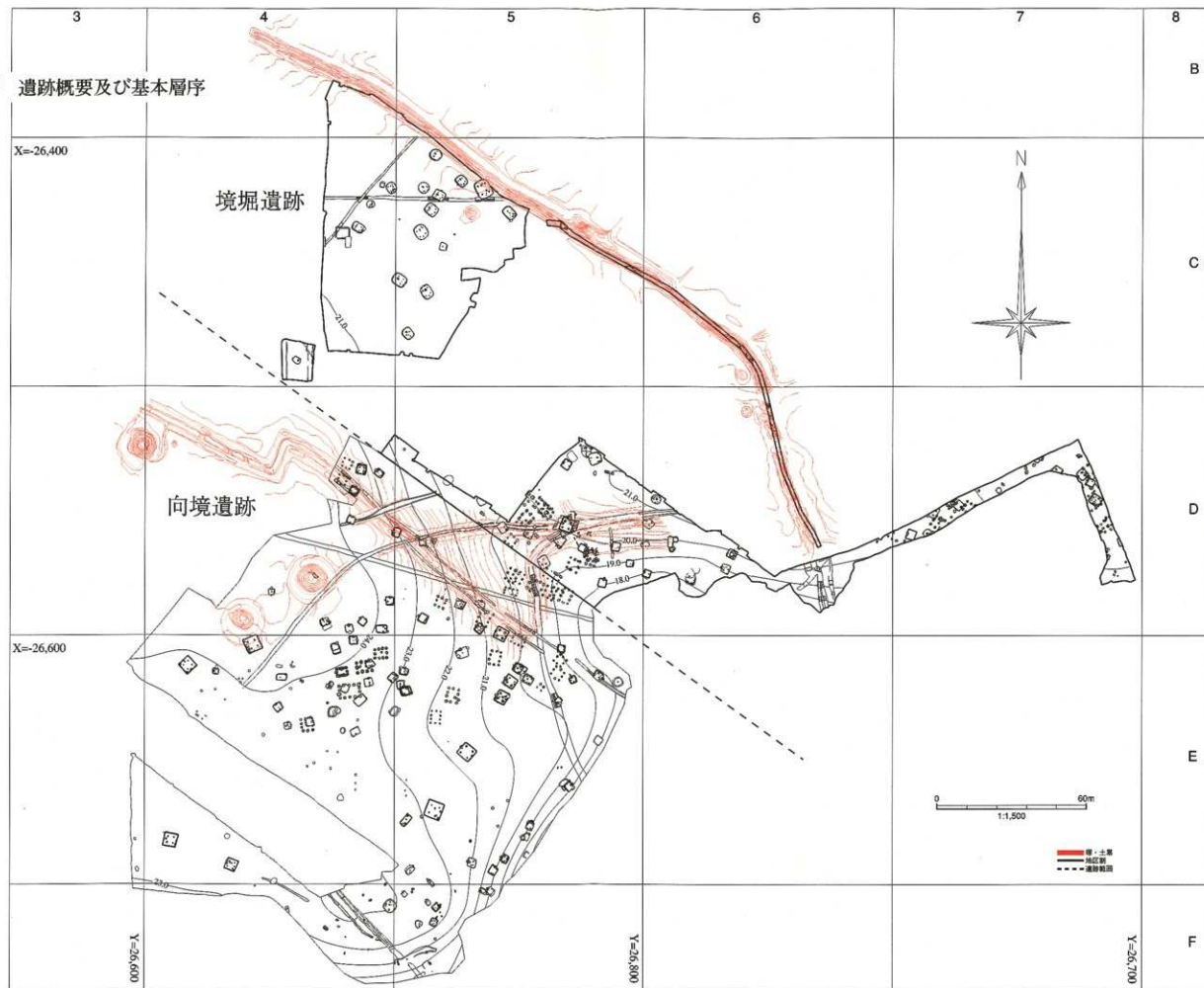


图1-4-1 境堀遺跡遺構配置図

境掘遺跡の立地及び歴史的環境は、前節までに述べたとおりであるが、今回の一連の調査で検出された遺構は次のとおりである。縄文時代については早期の炉穴5基、土坑17基。中期の竪穴住居跡2軒、弥生・古墳時代については、弥生後期～古墳前期の竪穴住居跡31軒、土坑3基、奈良・平安時代については、竪穴住居跡20軒、堀立柱建物跡18棟、中近世以降の土塁4条、溝9条、土坑4基、その他の遺構1基である。

遺跡の基本層序であるが、第1層が表土層、第2層が黒色土層、第3層が暗褐色土層、第4層がソフトローム漸移層、第5層がソフトローム層、第6層がハードローム層となる。遺構検出にあたっては、第4層下面あるいは第5層上面で行った。

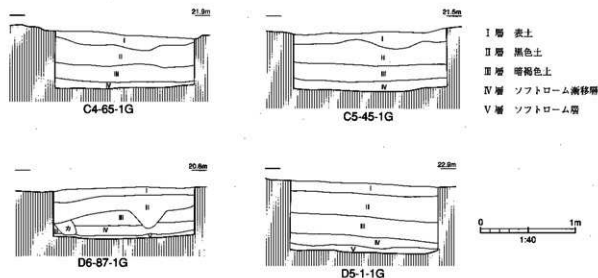


図1-4-2 境掘遺跡基本土層図

## 第2章 遺構と遺物

### 第1節 縄文時代

壕掘遺跡における縄文時代の遺構は、竪穴住居跡2軒・炉穴5基・土坑17基が検出されている。そして、南東に開口する小支谷に面した緩斜面の地区、大グリッドでいうところのD7グリッドでは、早期を中心とする遺物が少なからず出土し、遺物包含層の存在が窺われた。

遺構の時期としては、ほぼ早期後半・中期前半及び中期末葉に限られ、各々がエリア的にもほとんど重複しないという特徴がある。まず早期後半では、調査区東側部分の小支谷に面する緩斜面一帯に展開する。大グリッドでは一部D6を含むD7グリッドが該当するものである。次に中期前半では、一部東側にも分布するものの、土塁に沿って設定された狭小な調査区のうち、C6グリッドにはほぼ収まってしまう。最後に中期末葉であるが、これは小支谷の開析が始まる谷頭部分のほど近く、平坦面から斜面への等高線の変換部分に所在する。さらに加えるならば、東側部分から中期初頭の土坑1基が検出され、後期前半はC6グリッドと東側緩斜面の両方から検出された。いずれにせよ、比較的広範囲に調査されたB4・5・C4・5グリッド及びD5・6グリッドからはほとんど検出されておらず、狭小な調査区に限って集中しているため未調査部分が多く、傾向を語ることはできない。

以下、個別の遺構についての報告に移るが、詳細は遺構一覧表を参照されたい。

#### (1) 竪穴住居跡

8-001

検出地区 D6-05G。台地南東部の谷頭付近に位置する。単独で検出された。

遺 構 平面形はやや不整形を呈する。遺構確認面からの掘込みは比較的浅い。壁は垂直気味に立ち上がり、ソフトローム中に床を設けており、概ね平坦で硬化部分は認められなかった。周溝は検出されておらず、主柱穴は7本、さらに壁柱穴に相当する小穴を8本検出した。その他の屋内施設では、貯蔵穴が東壁に接して検出されている。炉跡は床面中央やや東壁寄り検出され、低いテラスを有する地床炉であって、炉底からテラスにかけて赤化が認められる。

覆土は色調を基本とし、2層に分層された。

遺 物 覆土中より多量に出土した。覆土下層から床面付近に1に示した深鉢が廃棄されており、その他は破片で、1層と2層の層境付近に集中する。なお、本跡では土器片錘の出土が目立った。

所 見 出土遺物から、縄文中期末葉の竪穴住居跡と判断した。

#### 出土遺物 (図2-1-6-1~74)

本跡からは土器・土製品・石器を含め、計509点の遺物が出土している。そのうち、阿玉台式土器279点・土器片錘14点・石器3点を除く213点が中期末葉の土器である。

#### 縄文式土器 (図2-1-4-1~56)

4~32は微隆起線を貼付して意匠を描くもので、1もこの類に属する。器形的には前代から引き継いだ、瓢形の深鉢が主体となり、両耳壺も含む。1は口縁~胴下半の4/5が残存する。口径131mm、残存高125mm。小形の深鉢で、ごくわずかだが、口縁は小波状を呈する。口縁下に微隆起線を貼付して画し、「正反の合」を施文する。外面の一部に帯状の二次焼成痕がある。内面は比較的ていねいなミガキを施す。胎土は細砂目立ち、長石・石英・スコリア細粒含む。

4~14は口縁片。4・5は小波状縁で、波頂下に突起を付し、微隆起線を貼付してから2段LRを施文する。5も突起を除けば4と同様で、2段LR。6は平縁で、微隆起線を貼付後、両脇にごく浅いナ

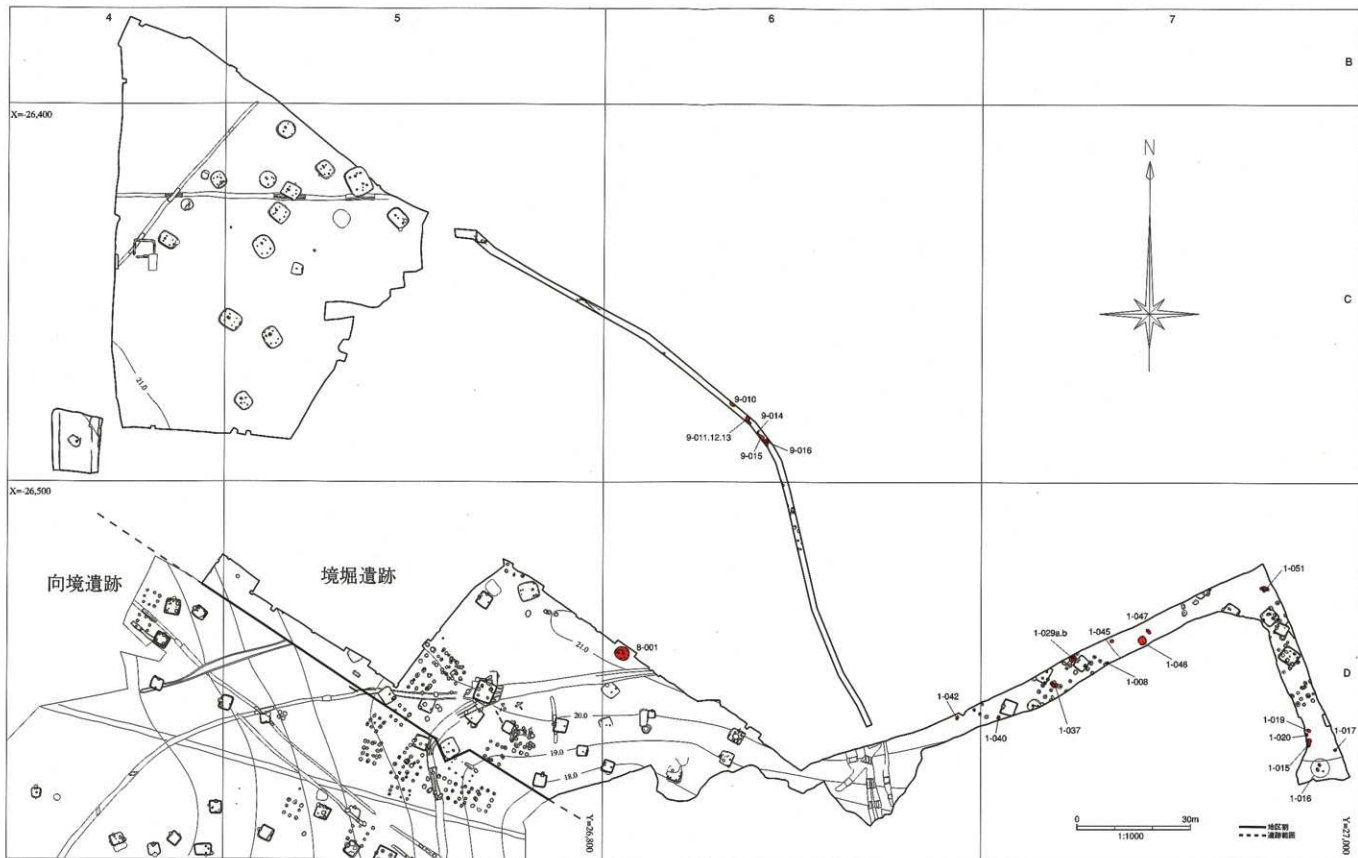
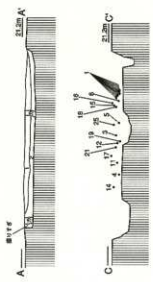
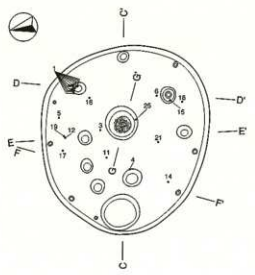
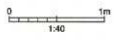
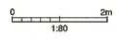
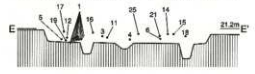


図 2-1-1 境堀遺跡繩文時代遺構配置圖



- 1層 暗褐色土 暗褐色土とロームが均一に混合
- 2層 暗黄褐色土 暗褐色土とロームが均一に混合 焼土粒を微粒含



- 1層 暗褐色土 ロームが少量混 ローム粒少含 焼土粒微含
- 2層 暗褐色土 ロームが少量混 ローム粒少含 直径5mm大のロームブロック少含 焼土粒微含
- 3層 暗褐色土 ロームが混じる ローム粒及び直径5mm大のロームブロック少含 焼土粒少含
- 4層 暗黄褐色土 ソフトロームに暗褐色土が微量に混 焼土粒微含

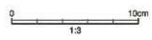
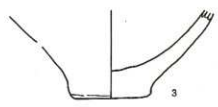
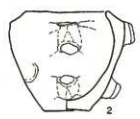
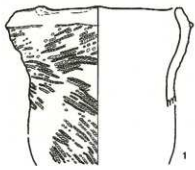


図 2-1-2 8-001

ゾリを入れている。縄文充填は2段RL(0段多条)。7は波状線か。微隆起線を貼付後、2段LR(0段多条)を充填。8は平線か。微隆起線を貼付後、2段LR。9は器面が荒れている。微隆起線を貼付後、脇のナゾリありか。2段LRを充填。10~14は平線。微隆起線を貼付後、縄文を充填するもので、使用原体は10~12が2段RL(0段多条)、13が2段LR、14が1段Lである。

15~17は両耳壺で、同一個体。口縁は直上気味に立ち上がる。16は耳部(把手)で、外面には縄文を転がす。使用原体は1段L。18は微隆起線に近い断面三角形の隆線を貼付し、両脇に浅いナゾリを加える。充填縄文は1段Lを用いる。

19はキャリパー形深鉢の胴部片。2段LRを地文に、磨消懸垂文を施す。加曾利EⅢ式。20~32は微隆起線を付した胴部片。20は地文に2段RLを施し、断面が半円もしくは三角形に近い隆線を付し、両脇に浅いナゾリを加える。このみEⅢ式の浮線系意匠充填系土器。21~23の使用原体は2段RL、24~25は2段LR、26・27は2段RL(0段多条)、28は1段L。28~30・32は隆線脇にごく浅いナゾリを入れるもので、28は1段L、29は2段LR、32は2段RLを用いる。

33~37は沈線で意匠を描くものを集めた。33は沈文系意匠充填系土器で、EⅢ式。このうち、36・37は同一個体。弧線文を描き、2段RLを充填するもので、横位連携弧線文土器になる可能性がある。EⅢ式。34・35はあらかじめ施文域に2段LRを転がしておき、沈線で画してから面線内を磨消す。EⅣ式に比定される。

38~52は縄文の施文された胴部片。38~41は1段L、42・43は2段RLで、44~47は2段RL(0段多条)。48~52は2段LRで、50・51は撚りの細いものである。

53は条線を縦位に施した浅鉢で、EⅢ式に伴うもの。54は波頂部の破片で、55は環状把手である。56はいわゆる「逆ランプシェード形」の底部で、EⅢ式に比定される。

これら中期末素土器群を使用原体で分けて見ると、

1段L	65点
2段RL	59点
2段RL(0段多条)	27点
2段LR(0段多条他)	61点
条線	1点

のような内訳となる。

その他の土器であるが、2は小形の深鉢形土器。一応口縁から底部まで残存しており、復元実測で図化したものである。推定口径65mm、推定底径37mm、器高79mmを測る。口縁はやや強く内傾しており、微隆起線で画される。口縁部及び胴下半部に1対2単位の「横位把手」がつく。胴下半には微隆起線を貼付して意匠を描く。赤彩及び黒彩などは残存していないが、内外面ともよく磨かれているため、彩色されていた可能性は高い。胎土に長石・スコリア細粒を含み、緻密である。

3環状は56と同様に、「逆ランプシェード形」の底部。

#### 石器(図2-1-5-57~59)

57は剥片またはRFで、剥離痕が認められる。黒曜石製。58は磨石(敲石か)で、一部が残存する。磨れ面と敲打面の両方が認められる。破損面が磨れており、再生品の可能性を有する。一部にススまたはタール類の付着が見られる。安山岩製か。59は石皿で、ごく一部分の残存か。縁は作りだしておらず、使用面がわずかに窪んでいる。安山岩製か。本報文では、岩種の判別可能なものについては記載したが、岩種鑑定は行なわれていないことを明記しておく。

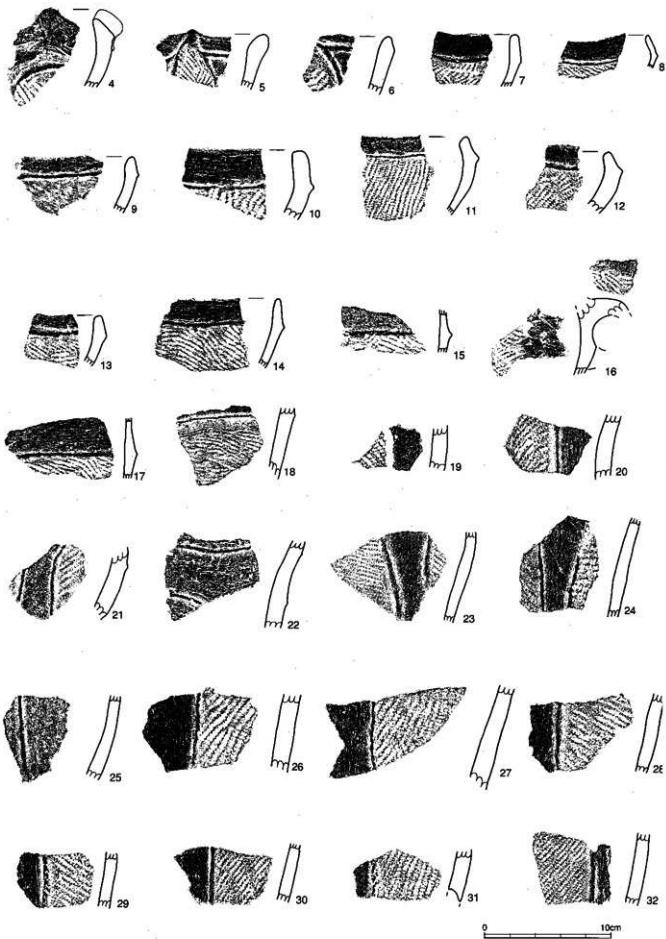


图 2-1-3 8-001 (1)

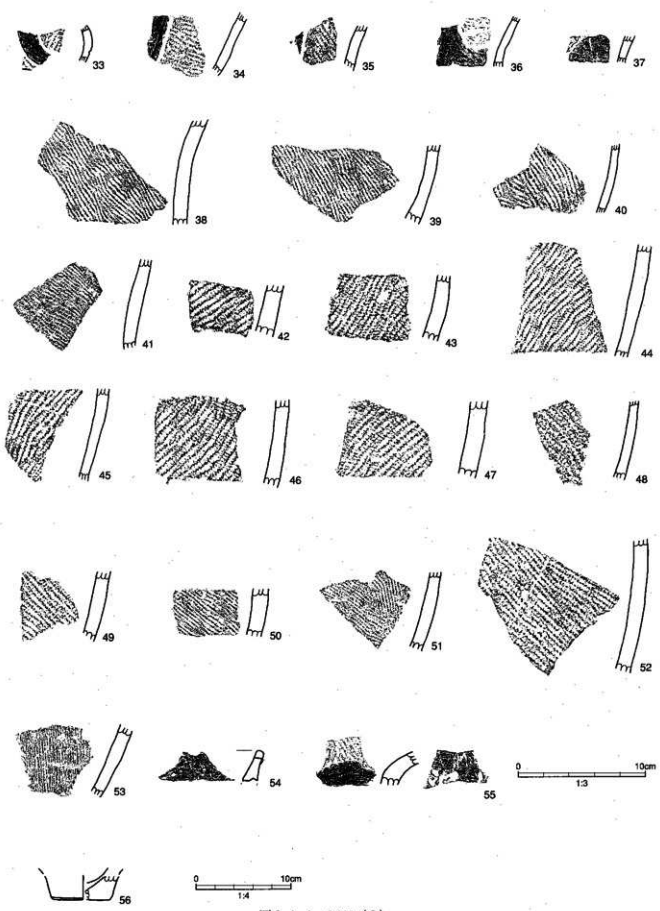


图 2-1-4 8-001 (2)



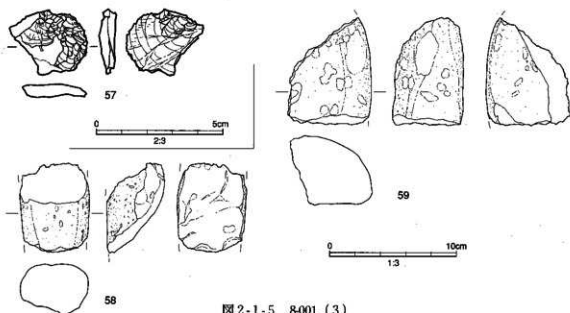


図2-1-5 8-001 (3)

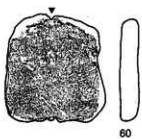
土製品 (図2-1-6 60~74)

全て土器片錘で、計15点出土した。素材とした土器片の時期は、1点が加曾利EⅢ式期で、他は阿玉台1a~1b式期のものである。

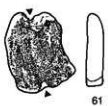
阿玉台式土器を素材としたものは、周縁加工をほとんど加えないことが大きな特徴である。素材の面取りであるが、64・65などは粘土帯に直交した「タテ」方向で、68~70などは粘土帯に平行した「ヨコ」方向となっている。さらに、ここに図示したものは、いずれもが長軸方向に牽溝（観察表での擦痕）を刻むものであるが、ただし、これも良く見ると61・65・73のように、長軸に対して斜行して牽溝を刻むものがある。

加曾利EⅢ式土器を素材としたものは、大形で、かつ周縁加工を加えている点が、上記の阿玉台式土器を素材としたものと大きく異なる点である。

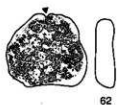
これら14点のあり方であるが、住居跡が中期末葉である点から見て、すぐ前の時期の土器片は比較的得やすかったと思われる。この場合、阿玉台式土器を用いた13点が問題となる。これらは①前代の土器片を振り当てるなどして入手して作成した、②前代の製品を入手し、そのまま再度使用した、という少なくとも二つの解釈が可能であるが、本報文では後者の立場をとりたい。



60



61



62



63



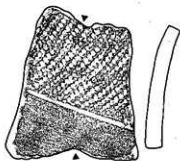
64



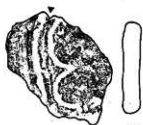
65



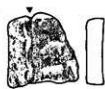
66



67



68



69



70



71



72



73



74



图 2-1-6 8-001 (4)

表 2-1-1 8-001土器片鉢観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
60	土製品 土器片鉢	長さ56 幅50 厚さ8 重量36.3g 胴部片を利用 不整台形 捺痕は縦長軸方向に二条あり、周縁の角の一部に丸みを帯びる。	暗褐色 良	普 砂粒・雲 母多	完形	阿玉台式
61	土製品 土器片鉢	長さ39 幅30 厚さ8 重量13.6g 胴部片を利用 不整長方形 捺痕は縦長軸方向に一条あり、角に丸みを帯びる。	赤褐色 良	普 砂粒・雲 母多	完形	阿玉台式
62	土製品 土器片鉢	長さ38 幅38 厚さ8 重量18g 胴部片を利用 不整円形 捺痕は縦長軸方向の一端にあり、周縁全体的に丸みを帯びる。	茶褐色 良	普 砂粒・雲 母多	4/5	阿玉台式
63	土製品 土器片鉢	長さ39 幅29 厚さ8 重量11.4g 胴部片を利用 不整長方形 捺痕は縦長軸方向に一条あり、周縁に加工は見られない。	黒色 良	普 砂粒多 雲母少	完形	阿玉台式
64	土製品 土器片鉢	長さ30 幅29 厚さ7 重量8.6g 胴部片を利用 不整円形 捺痕は縦長軸方向に一条あり、周縁の半周程に丸みを帯びる。	暗褐色 良	普 砂粒多	完形	阿玉台式
65	土製品 土器片鉢	長さ30 幅28 厚さ6 重量7.6g 胴部片を利用 不整台形 捺痕はやや斜行して縦長軸方向にあり、周縁の一部に丸みを帯びる。 外面 爪形文	茶褐色 良	普 砂粒・雲 母多	完形	阿玉台式
66	土製品 土器片鉢	長さ20 幅17 厚さ11 重量6.5g 胴部片を利用 不整方形 捺痕は縦長軸方向に一条あり、周縁の一部に丸みを帯びる。	茶褐色 普	砂粒・雲 母・白色 粒	完形	阿玉台式
67	土製品 土器片鉢	長さ68 幅80 厚さ8 重量61.8g 胴部片を利用 不整長方形 捺痕は横長軸方向に一条あり、周縁に加工は殆どみられない。 外面 右捻り横位の斜縄文 沈線で区画	暗褐色 良	普 砂粒・雲 母・白色 粒・赤色 粒	完形	加曾利BⅢ式
68	土製品 土器片鉢	長さ55 幅(47) 厚さ8 重量28.9g 胴部片を利用 不整方形 捺痕は横短軸方面の一端にあり、周縁の一部に丸みを帯びる。 外面 隆線直下に半散竹管の押引文、アーチ状の押引文	明褐色 良	普 砂粒・雲 母多	4/5	阿玉台式
69	土製品 土器片鉢	長さ37 幅(35) 厚さ10 重量16.1g 口縁部片を利用 不整方形 捺痕は横方向の一端にあり、周縁に加工は見られない。 外面 波状の沈線	明褐色 良	普 砂粒・雲 母多	4/5	阿玉台式
70	土製品 土器片鉢	長さ32 幅37 厚さ9 重量13.3g 胴部片を利用 不整方形 捺痕は横長軸方向に一条あり、周縁の一部に丸みを帯びる。 内面 ミガキ	暗褐色 良	普 砂粒・雲 母	完形	阿玉台式
71	土製品 土器片鉢	長さ38 幅38 厚さ8 重量12.6g 胴部片を利用 不整方形 捺痕は横方向に一条あり、周縁に加工は見られない。 外面 爪形文	灰褐色 良	普 砂粒・雲 母		阿玉台式
72	土製品 土器片鉢	長さ29 幅37 厚さ7 重量9.7g 胴部片を利用 不整長方形 捺痕は横長軸方向に一条あり、周縁に加工は見られない。	赤褐色 良	普 砂粒・雲 母多	完形	阿玉台式
73	土製品 土器片鉢	長さ27 幅35 厚さ10 重量9.9g 胴部片を利用 不整方形 捺痕は横長軸方向に一条あり、周縁に加工は見られない。	赤褐色 普	普 砂粒多	完形	阿玉台式
74	土製品 土器片鉢	長さ29 幅32 厚さ9 重量10.8g 胴部片を利用 不整台形 捺痕は横長軸方向に一条あり、周縁に加工は見られない。	暗褐色 良	普 砂粒多 雲母微	完形	阿玉台式

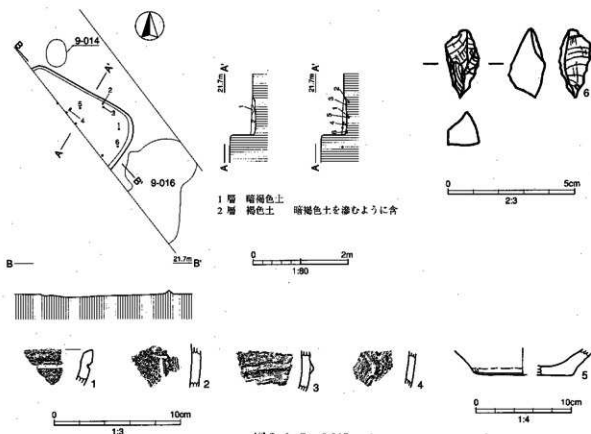


図 2-1-7 9-015

9-015

検出地区 C6-28G。台地中央部に位置する。周辺の遺構として1-019・020がある。

遺 構 平面形は方形を基調とする。遺構確認面からの掘込みは極めて浅い。壁は垂直に立ち上がり、ソフトルーム中に床を設けており、ほぼ平坦で硬化部分は認められなかった。全体の1/3程度の検出にとどまっているが、周溝・柱穴・炉跡などの内部施設は検出されなかった。

覆土は色調を基本とし、2層に分層でき、よくしまっている。

遺 物 覆土最上層と床面付近にやまとまりがあり、上層下層間での接合も認められる。出土総数は11点である。黒曜石剥片を含むが、基本的には縄文式土器の小片が目立っている。

所 見 出土遺物から、縄文中期前半阿玉台式期の竪穴住居跡と判断した。

出土遺物 1～5は阿玉台式土器で、1・4・5の胎土は「雲母混入型」。6は黒曜石の剥片。

表 2-1-2 縄文時代竪穴住居跡一覧表

(単位m)

遺構番号	検出調査区	平面形 規模:長軸×短軸×壁高 遺物の状況	住居跡の状況 覆土の状況	燃焼施設・位置 周溝・備考
8-001	D6-05	不整形円形 3.98×3.49×0.24 主軸 N-73°E 覆土下層から床面付近に深鉢。その他は破片で、1層と2層の層境が主。	炉は中央やや東寄り。主柱穴7本。竪柱穴8本。入り口は西南西か。西壁に貯蔵穴。 色調を基本に2層に分層	周溝 なし 主柱穴 7本
9-015	C6-28	方形を基調とする 2.54×××0.08 主軸 不明 床面付近と覆土最上層にやまとまりがあり、上下での接合もある	壁は緩やかに立ち上がり、床面は比較的平坦 色調を基本に2層に分層	周溝 なし 主柱穴 残存部分では検出されず

(2) 炉穴

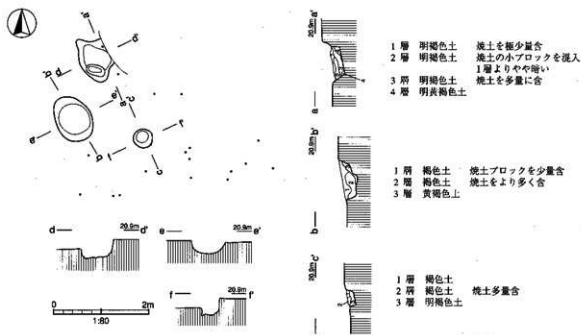
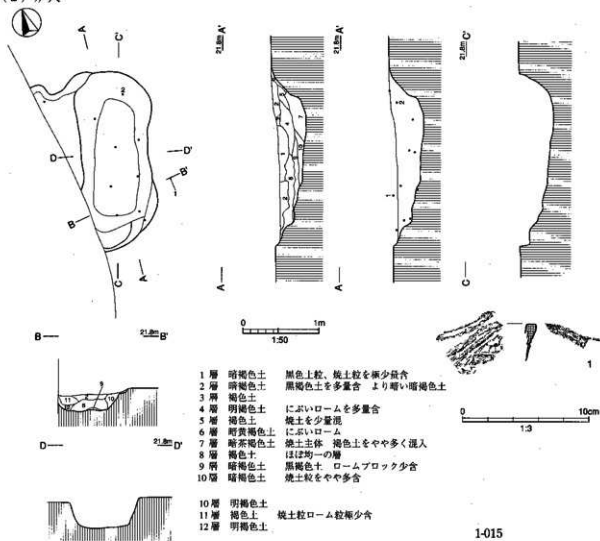


図2-1-8 1-015・1-016

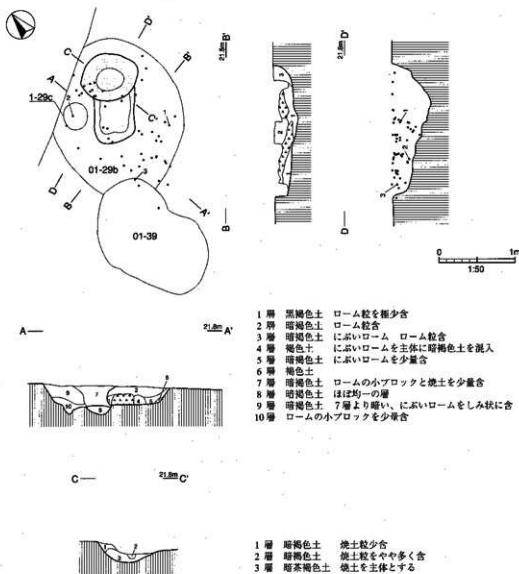


図 2-1-9 1-029a

1-015

検出地区 D7-86G。調査区東側、支谷に面した緩斜面に位置する。周辺の遺構として1-019・020。

遺 構 平面形はやや不整な楕円形。上部を見る限り、重複の可能性がある。足場部は火床部に向かって緩やかに傾斜し、2段のテラスを有する。火床部は焼土が堆積し、良く焼けていて赤化している。

覆土は色調を基本に、12層に分層した。火床部に焼土が堆積するだけでなく、下層は比較的的水平堆積に近く、上層を見てゆく限り、自然堆積ではない蓋然性が高い。

遺 物 足場部では下層に多く、全体で見た場合は、中層(4・5・8層)に目立つ。

所 見 出土遺物及び遺構の形状などから、縄文時代早期後半繩ヶ島台式期と判断した。天井部は残存していなかった。

出土遺物 1は縄文式土器。早期後半条痕土器の口縁片。波状縁で、口唇部形態は角頭気味。沈線によるタスキ状の区画内に連続刺突を充填する。繩ヶ島台式である。図化他にしなかったが、黒曜石剥片・磨石片が出土している。

## 1-016

検出地区 D7-87・97G。調査区東側、支谷に面した緩斜面に位置する。周辺の遺構として1-017。

遺構 本跡は足場部が全く残存しておらず、火床部のみが近接して3基存在する。北から仮にA～Cとした場合、いずれも0.2m程掘り下げており、Cを除いて焼土堆積が確認され、各々赤化する程良く焼けている。

覆土は3基とも焼土の堆積が目立ち、その上は埋め戻しの可能性がある。

遺物 A・Cの周囲に廃棄されており、平面分布図を図化した。ただし、確実に本跡に伴うものか否かは明らかにできなかった。

所見 本跡は斜面部に位置するため、足場部の掘り込みなどが流出した可能性がないわけではない。しかし、遺物出土状態なども踏まえると、早期後半ないしは他時期の屋外炉の可能性もある。

## 1-029 a

検出地区 D7-25G。調査区東側、支谷に面した緩斜面に位置する。周辺の遺構として1-008がある。

遺構 1-029bの破壊を受けているため、掘り込みの大半を消失する。円形に掘り窪めた火床部と、楕円形を呈する足場部からなる。足場部の底面はやや凹凸に富む。火床部には焼土の堆積があり、赤化範囲が認められる。

覆土は色調を基本に、3層に分層した。自然堆積か人為堆積かは、不明とせざるを得ない。

遺物 覆土中にまばらに見られる。

所見 本跡は土坑である1-029bとの重複関係がある。新旧関係としては本跡が破壊を受けている。しかし、本跡が1-029bに丸ごと納まっている状況などを見る限り、廃棄後あまり間をおかずに、あるいは埋没完了前に掘り込んだものと思われる。

## 1-037

検出地区 D7-17G。調査区東側、支谷に面した緩斜面に位置する。周辺の遺構として1-029a,b。

遺構 平面形はやや不整な楕円形。壁は緩やかに立ち上がり、足場部には低いテラスを有する。火床部はピット状に掘り窪められる。赤化範囲が2ヶ所見られ、うち1ヶ所は足場部にある。

覆土は色調を基本に4層ないし5層に分層できる。自然堆積の可能性はある。

遺物 覆土上層の8層・9層とした部分にまとまりが見られる。

所見 本跡は掘立柱建物跡1-103の破壊を受ける。出土遺物及び形状から炉穴と判断した。

出土遺物 7点を図化した。このうち、4・5・7は1-103覆土の逆流入によるもので、直接伴わない。4が鶺鴒ヶ島台式、5は黒浜式、7が阿玉台1b式。6の阿玉台式もこれら3点と同様の可能性が高い。1～3は条痕文土器。1・2は表裏条痕の粗製土器。3は沈線で格子文を描くもので、鶺鴒ヶ島台式。

## 1-051

検出地区 D7-73G。調査区東側、支谷に面した緩斜面に位置する。単独検出である。

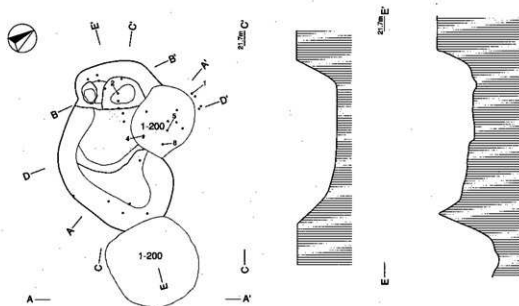
遺構 平面形はやや不整な楕円形。長軸の両端に火床部を有し、南辺には古期の火床部がある。北辺は中央がやや膨らむように壁の立ち上がりが緩やかとなる。各々の火床部は楕円状に掘り窪められ、足場部はやや凹凸を有する。古期火床部との段差は0.15mで、古期の足場部は概ね平坦である。

覆土は色調を基本に11層に分層でき、埋め戻しの可能性がある。

遺物 1層と6・7層との層境にまとまりがある。一部5層及び7層からも出土している。

所見 出土遺物及び遺構の形状から、縄文時代早期後半の炉穴と判断した。3基の火床部には時間差があり、新期の東火床部が古期に続き、西火床部が最後のものと判断される。

出土遺物 1・2とも表裏に条痕を施し、胎土中の繊維含有が少ない。野鳥式の可能性がある。



A ————— A'



B ————— B'



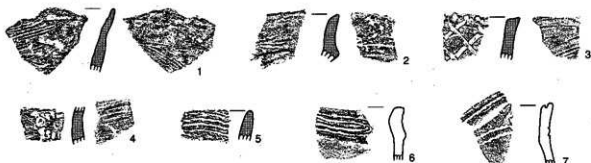
- 8層 褐色土 ほぼ均一の層
- 9層 褐色土 においロームブロックを少なく焼土粒をより少なく混入
- 10層 褐色土 焼土粒を含ま
- 11層 明褐色土 ロームをより多含
- 12層 褐色土 焼土をより多含

- 1層 暗褐色土 ローム粒、においロームを多含
- 2層 暗褐色土 ローム粒を混入
- 3層 暗褐色土 黒褐色土を多くロームの小ブロックを混入
- 4層 黒褐色土 黒褐色土を多含 ロームブロックを少なく混入

D ————— D'



0 1m  
1:50



0 10cm  
1:3

図 2-1-10 1-037



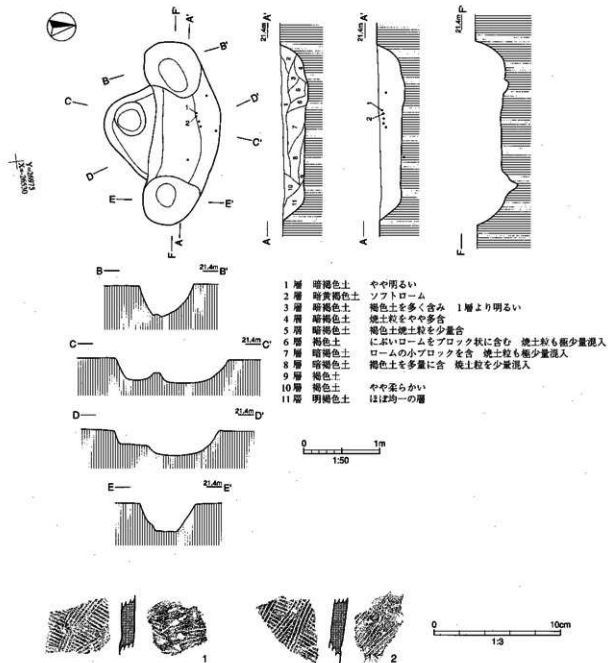


図 2-1-11 1-051

表 2-1-3 縄文時代炉穴一覧表

(単位m)

遺構番号	検出調査区	平面形 規模;長軸×短軸×壁高 遺構の状況	覆土の状況 遺物の状況	その他考 備
1-015	D7-86	楕円形 2.40×1.03×0.43 主軸 N-19°-E 足場部は火床部に向かって緩やかに傾斜し、一段のテラスを有する	色調を基本に12層に分層 火床部に焼土堆積。下層は水平堆積に近い 足場部は下層に多い。全体としては中層(3・5・8層)に目立つ	黒曜石・磨石 条痕文期
1-016	D7-87	A 楕円形 0.67×0.47×0.20 主軸 N-33°-W B 楕円形 0.65×0.40×0.22 主軸 N-22°-W C 0.28×0.25×0.11 主軸 N-24°-W 火床部のみ3基からなる	A 色調を基本に3層に分層 B 色調を基本に4層に分層 C 色調を基本に3層に分層 A・Cの周囲に腐葉	屋外伊の可能性もあり 条痕文期か
1-029a	D7-25	楕円形 1.20×0.74×0.25 主軸 N-35°-E 足場は凹凸に富み、傾斜も有して火床部に至る。火床部は焼けている	覆土中に瞭らに見られる	D104に破壊される 条痕文期
1-037	D7-17	不整楕円形 2.17×1.33×0.45 主軸 N-69°-W 足場部はテラスを有し、火床部はピット状に凹む	色調を基本に4ないし5層に分層 覆土上層の8・9層とした部分にまとまりが見られる	I-200の破壊を受ける 縄ヶ島台式
1-051	D7-73	やや不整楕円形 2.42×1.52×0.25 主軸 N-82°-W 足場部は平坦で、両端に火床部 周辺には古期の火床部がある	色調を基本に11層に分層 埋めの灰しの可能性が高い 1層と6・7層との層境にまとまりがある 一部、5層と7層からも出土している	火床部は3カ所に認められた 野島式期か

## (3) 土坑

## 1-008

**検出地区** D7-35G。調査区東側、支谷に面した緩斜面に位置する。周辺の遺構に1-029 a. bがある。  
**遺構** 平面形は円形。遺構確認面からの掘り込みは浅い。壁は緩やかに立ち上がり、底面に小ピット2基を穿つ。底面は凹凸に富む。2基のピットのうち一つは楕円形で、長軸は0.4m、深さは0.1m程である。もう一つは円形で、径0.3m、深さは0.2m程となっている。

覆土は色調を基本に4層に分層できた。

**遺物** 覆土中の1層及び3層下部より出土している。小ピットにかかる部分に多い。

**所見** 1-201の破壊を受ける。覆土の観察から、小ピットは本跡を破壊する可能性がある。

**出土遺物** 1は口縁片。連続刺突で意匠を描く。2は2本1組の沈線で意匠を描く。3は条痕を地に、沈線で意匠を描くもの。1・2は縄ヶ島台式に比定され、これをもって本跡の掘削時期としたい。

## 1-017

**検出地区** D7-97G。調査区東側、支谷に面した緩斜面に位置する。周辺の遺構に1-016がある。

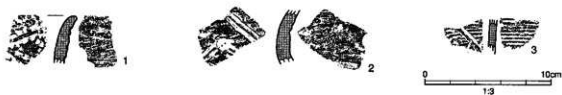
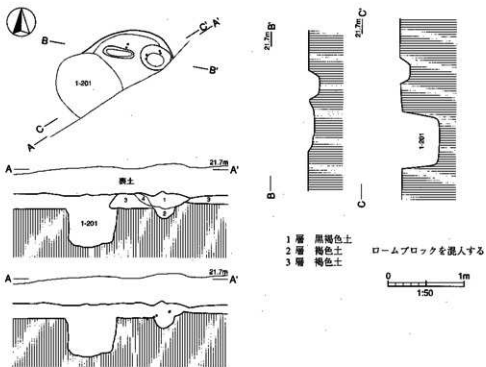
**遺構** 平面形は略円形。西側～南側にかけての壁は緩やかで、それ以外では垂直気味に立ち上がる。底面はやや凹凸を有し、小ピット1基を穿つ。

覆土は色調を基本に5層に分層できた。人為堆積である。

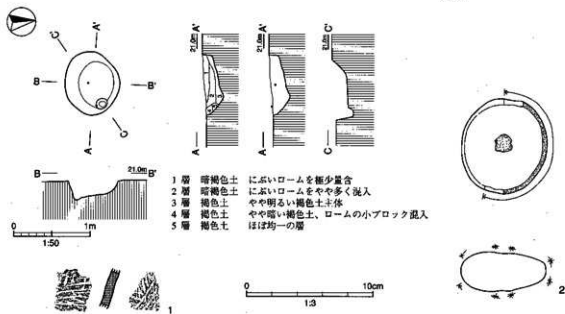
**遺物** 1層上部及び1層と2層の層境より出土している。

**所見** 出土遺物から縄文時代早期後半(野島式か)の土坑と判断した。

**出土遺物** 出土総数は2点であった。1は表裏に条痕を施した胴部片で、野島式か。2は磨石または敲石。表裏に磨れ面を有し、側面に敲打面、表裏の中央部に敲打による凹穴を有するものである。

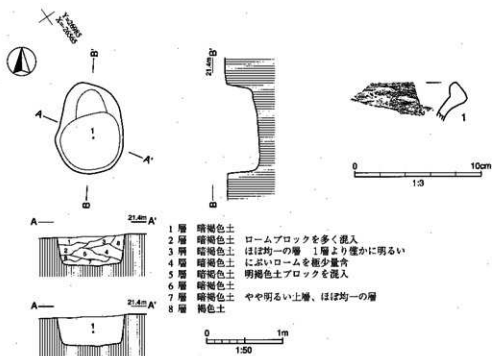


1-008

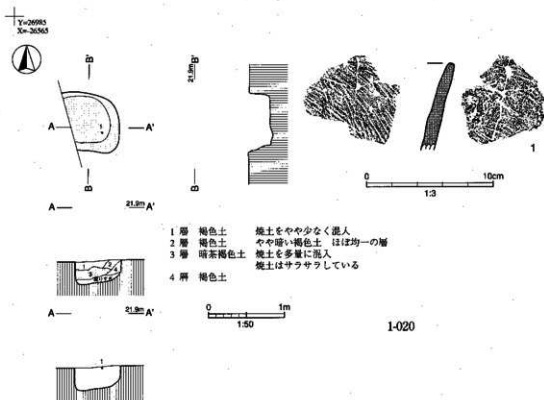


1-017

図 2-1-12 1-008・1-017



1-019



1-020

図 2-1-13 1-019・1-020

## 1-019

**検出地区** D7-86G。調査区東側、支谷に面した緩斜面に位置する。周辺の遺構として1-020がある。  
**遺構** 平面形は楕円形で、円形の底面にテラスがつく形である。壁は垂直に立ち上がる。底面はやや凹凸を有するが全体的にはきっちりと掘られている。

覆土は色調を基本に8層に分層できた。短日時の埋め戻しである。

**遺物** 覆土中の5層中より出土している。出土遺物は唯1点のみである。  
**所見** 出土遺物から縄文時代後期前半堀之内式期の土坑と判断した。その形状及び覆土の堆積状況からは、小竪穴または小竪穴転用墓などの可能性がある。ただし、ローム層を0.4m程掘削している割には、ローム質土の混入があまりにも少ない。この点から鑑みれば、墓坑の可能性は低いと思われる。  
**出土遺物** 1は口縁片で、外反気味に立ち上がりつつ、端部は内側に屈曲する。堀之内式。

## 1-020

**検出地区** D7-86G。調査区東側、支谷に面した緩斜面に位置する。周辺の遺構として1-019がある。  
**遺構** 全体の2/3程度の検出である。平面形はやや不整な楕円形。壁は北辺では垂直、東～南辺では緩やかに立ち上がる。底面は凹凸に富む。

覆土は色調を基本に4層に分層でき、埋め戻しである。最下層は多量の焼土を含有しており、底面・壁及び層の上面は何ら焼けていなかった。これらから、「捨て焼土」と見なすことができる。

**遺物** 覆土最上層より出土している。  
**所見** 出土遺物から縄文時代早期後半野島式期の土坑と判断した。  
**出土遺物** 出土総数は4点で、1点を図化した。1は口縁片で、外反気味に立ち上がり、口唇部形態は角頭気味で、平縁の資料である。表裏とも条痕が施され、外面では右下がりの貝殻条痕を施している。

## 1-029 b

**検出地区** D7-25G。調査区東側、支谷に面した緩斜面に位置する。周辺の遺構として1-030がある。  
**遺構** 平面形は楕円形。西辺の一部を除き、壁は垂直気味に立ち上がる。底面はやや凹凸に富む。1-029 aを破壊し、1-029 c及び1-039の破壊を受ける。

覆土は色調を基本に10層に分層できた。埋め戻しで、3ブロックの遺構内堆積貝層が認められた。

**遺物** 底面付近・貝層中・貝層上面(2層最下部)に見られる。  
**所見** 出土遺物から縄文時代早期後半縄ヶ島台式期の土坑と判断した。  
**出土遺物** 1は貝層中、2は底面付近、3は貝層上面。1・2は口縁片。1は内削ぎ状の口唇部形態を呈し、口唇上にキザミ、沈線区画内に連続刺突を充填し、文様交点に円形刺突を施す。表面は条痕を施しているが、原体は貝殻を用いていない。2は角頭気味の口唇部形態を呈し、口唇上にキザミを施し、文様の起点と交点に円形刺突を施す。3は表裏に条痕を施した粗製土器。表裏ともに斜方向(右下がり)を主とする貝殻条痕を施している。縄ヶ島台式。

## 1-030

**検出地区** D7-25G。調査区東側、支谷に面した緩斜面に位置する。周辺の遺構として1-029 a, bがある。  
**遺構** 平面形はやや不整な楕円形を呈する。壁はやや垂直気味に立ち上がり、底面に向かってややすぼまり気味となる。底面は凹凸に富み、ピット状に窪む個所がある。

覆土は色調を基本に4層に分層でき、埋め戻しである。

**遺物** 覆土中の2層及び3層より土器片2点が出土しているが、図化できるものはなかった。  
**所見** 出土遺物などから、縄文時代の土坑と判断した。しかしながら、出土土器はあまりにも属性に乏しく、時期については明らかにできなかった。

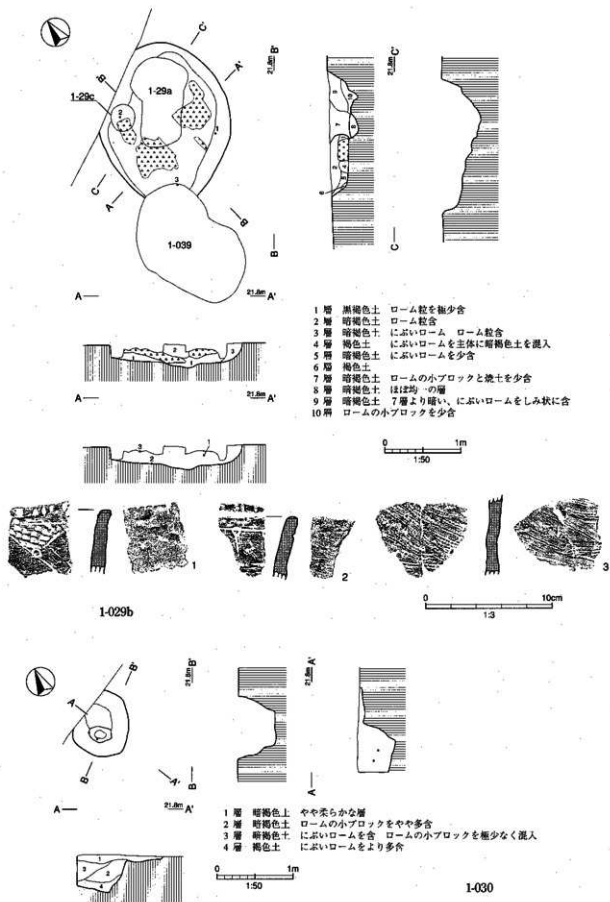
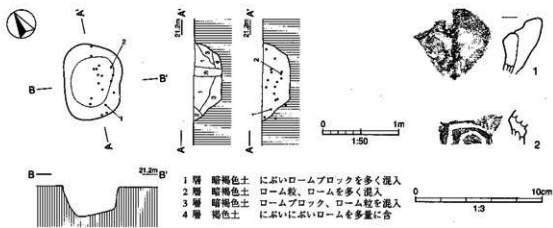
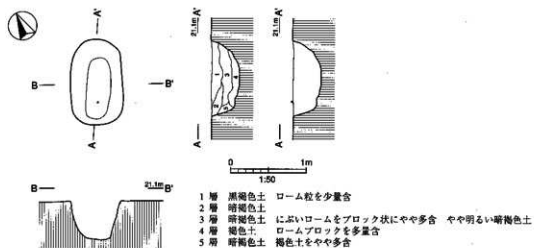


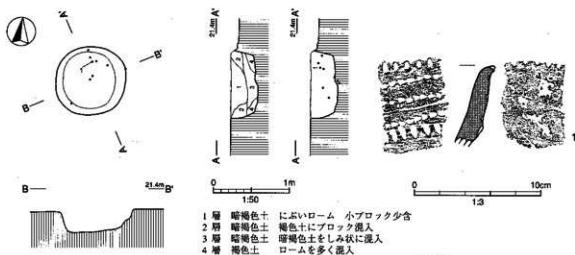
図 2-1-14 1-029b・1-030



1-040

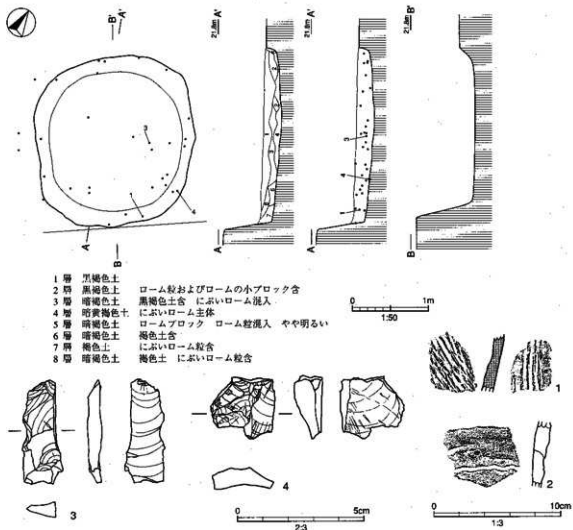


1-042

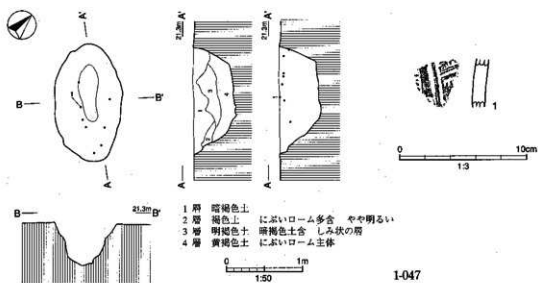


1-045

図 2-1-15 1-040・1-042・1-045



1-046



1-047

図 2-1-16 1-046・1-047



#### 1-040

検出地区 D7-07G。調査区東側、支谷に面した緩斜面に位置する。周辺の遺構として1-042がある。

遺構 平面形は不整形円形。壁は比較的緩やかに立ち上がり、底面はやや凹凸に富む。東辺ではやや垂直気味であるが、全体的にはきっちりと掘られていない。

覆土は色調を基本に4層に分層できた。各層ともローム・ブロックなどが目立ち、埋め戻しである。

遺物 各層より万遍なく出土しているが、下層の3層及び4層では少ない。

所見 出土遺物から縄文時代中期前半阿玉台式期の土坑と判断した。

出土遺物 出土総数は18点で、うち2点を図化した。1は波状縁の口縁片。波頂部にキザミを入れて左右非対称にするもので、波頂部より突起を付す。2は頸部付近で、2列の有節線文を施すが、単列を重ねて施文したものである。1・2とも胎土は雲母混入型。

#### 1-042

検出地区 D6-97G。調査区東側、支谷に面した緩斜面に位置する。周辺の遺構として1-040がある。

遺構 平面形は楕円形を呈する。長辺に沿った壁は垂直気味、対する短辺の壁は緩やかに立ち上がる。底面は丸味を帯び、やや凹凸に富んでいる。

覆土は色調を基本に5層に分層した。最下層はローム・ブロックを多量に含む褐色土で、2層までは褐色土系の土が投げ込まれている。最上層の1層はローム粒を少量含む黒褐色土である。これらから、2～5層までが人為堆積で、最上層は自然堆積の可能性がある。

遺物 覆土最上層の1層より1点が出土した。

所見 出土遺物などから、縄文時代のもつと判断したが、細別時期は不明である。

出土遺物 1点出土したが、図化できるものはなかった。

#### 1-045

検出地区 D7-44G。調査区東側、支谷に面した緩斜面に位置する。周辺の遺構として1-046がある。

遺構 平面形は円形を呈する。全体として比較的きっちりと掘られており、壁は垂直気味に立ち上がり、底面はやや凹凸を有する。

覆土は色調を基本に4層に分層できた。埋め戻しである。

遺物 覆土中の2層下部から3層中出土が目立っている。

所見 出土遺物から、縄文時代早期後半茅山山下層式期の土坑と判断した。

出土遺物 覆土中からの出土総数は9点である。このうち1点のみ図化した。1は口縁片。全体に緩いぐれを有し、外反気味に立ち上がり、口唇部形態は内削ぎ気味。口縁端部にキザミを施し、横走する3条の刺突列を充填する。裏面は捺痕に近い条痕を施す。

#### 1-046

検出地区 D7-45G。調査区東側、支谷に面した緩斜面に位置する。周辺の遺構として1-045がある。

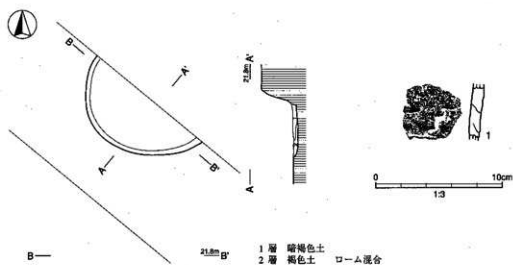
遺構 平面形は円形を呈する。壁は垂直気味に立ち上がり、底面は比較的平坦である。

覆土は色調を基本に8層に分層できた。基本的には埋め戻しと思われる。

遺物 覆土の各層から万遍なく出土しており、特に3層中の出土が目立っている。

所見 有効な出土状態と思われる遺物のうち、最新の時期であるところの縄文時代中期前半阿玉台式期の小堅穴と判断した。

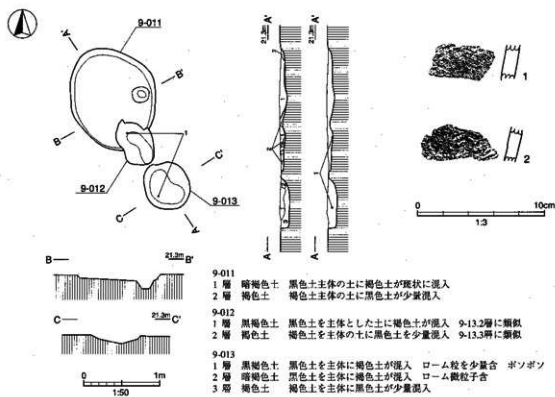
出土遺物 覆土中からの出土総数は32点である。このうち、4点を図化した。1～2は黒曜石製の剥片。2は側縁に刺突痕が認められる。3は早期後半条痕文土器の胴部片。表裏に条痕を施す。4は胴部に沈線で波状文を描くもので、中期前半阿玉台式。非雲母混入型の胎土である。



1層 暗褐色土  
2層 褐色土 ローム混合



9-010



9-011  
1層 暗褐色土 黒色土主体の土に褐色土が塊状に混入  
2層 褐色土 褐色土主体の土に黒色土が少量混入

9-012  
1層 黒褐色土 黒色土を主体とした土に褐色土が混入 9-13.2層に類似  
2層 褐色土 褐色土を主体の土に黒色土を少量混入 9-13.3層に類似

9-013  
1層 黒褐色土 黒色土を主体に褐色土が混入 ローム粒を少量含 ボソボソ  
2層 暗褐色土 黒色土を主体に褐色土が混入 ローム微粒子含  
3層 褐色土 褐色土を主体に黒色土が少量混入

図 2-1-17 9-010・9-011・9-012・9-013

1-047

検出地区 D7-44G。調査区東側、支谷に面した緩斜面に位置する。周辺の遺構として1-046がある。  
遺構 平面形は不整楕円形を呈する。あまりきっちりと掘られておらず、壁は底面に向かってすぼまり、底面は凹凸に富む。

覆土は色調を基本に4層に分層できた。埋め戻しの可能性がある。

遺物 覆土中の1層を中心に出土しているが、特に傾向はない。

所見 出土遺物から縄文時代中期初頭五領ヶ台式（八辺系）期の土坑と判断した。

出土遺物 覆土中からの出土総数は8点で、1点を図化した。1は胴部片。隆線を縦位に貼付し、隆線に沿って沈線で意匠を描き、斜方向の刺突を施す。施工具はやや細めの円形竹管か。八辺系土器。

9-010

検出地区 C7-16G。調査区中央。台地上平坦部に位置する。周辺の遺構として9-011がある。

遺構 平面形は円形を呈し、平面形自体は比較的きっちりと掘られている。壁は緩やかに立ち上がり、底面は概ね平坦である。本跡は1/2程度の検出であった。

覆土は色調を基本に2層に分層でき、埋め戻しと思われる。

遺物 覆土中より1点出土したのみである。

所見 出土遺物から縄文時代中期前半阿玉台式期の小竪穴と判断した。

出土遺物 1は胴部片である。輪痕をそのまま残し、外面はナデのみであって、内面はミガキあり。胎土は非雲母混入型である。

9-011・012

検出地区 C6-17G。調査区中央。台地上平坦部に位置する。周辺の遺構として9-010がある。

遺構 011の平面形は楕円形。壁は緩やかに立ち上がり、底面は凹凸が目立つ。覆土は色調を基本に2層に分層できる。012は平面形が不整楕円形。壁は緩やかに立ち上がり、底面は凹凸を有する。覆土は色調を基本に2層に分層できる。

遺物 011は出土遺物が皆無で、012は2点出土している。1点は黒曜石製の剥片であるが、もう1点は土器片で、013と接合しており、台帳の扱いは013になっているものである。

所見 9-011は012の破壊を受ける。9-011は円形土坑または小竪穴に近いものと思われ、9-012は規模的にはビットに近いものがある。柱穴のような機能を有した遺構であった可能性が高い。時期的には、出土遺物から縄文時代後期前半堀之内式期と捉えておきたい。

出土遺物 1は深鉢の胴部片。堀之内式で、遺構間接合である。

9-013

検出地区 C-17G。調査区中央。台地上平坦部に位置する。周辺の遺構として9-010がある。

遺構 平面形は不整楕円形を呈する。長辺での壁は垂直気味、短辺では緩やかに立ち上がり、底面は丸味を帯びる。

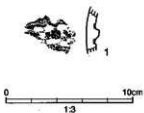
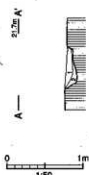
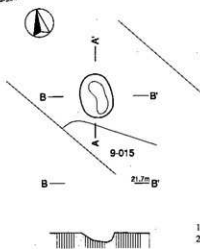
覆土は色調を基本に3層に分層できた。上層の黒褐色土はしまりを欠く。2層及び3層を見る限り、埋め戻しと思われる。

遺物 覆土中より2点出土し、1点は012と遺構間接合である。

所見 本跡は土坑とするにはやや小振りではある。そして、「あたり」などもなく、柱穴とも考えにくいものがある。時期的には、出土遺物から縄文時代後期前半堀之内式期と捉えておきたい。

出土遺物 2は深鉢の胴部片で、堀之内式。

Y=26640  
X=26485

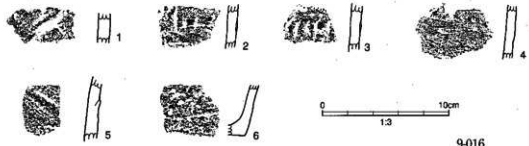
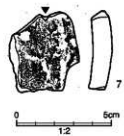


- 1層 暗褐色土 黒色土を主体とした土に褐色土が混入
- 2層 褐色土 褐色土を主体の土に黒色土が斑点状に混入

9-014



- 1層 暗赤褐色土 赤褐色土主体に褐色土混入 焼土粒、炭化粒含
- 2層 黒褐色土 褐色土に暗褐色土が少量混入 焼土粒少含 炭化粒多含
- 3層 暗褐色土 褐色土混入 ローム粒少含
- 4層 暗褐色土 黒色土主体に褐色土混入 径10~15mm大のロームブロック含
- 5層 暗褐色土 褐色土主体に黒色土混入
- 6層 暗褐色土 褐色土主体に黒色土少量混入



9-016

図 2-1-18 9-014・9-016

9-014

検出地区 C6-27G。調査区中央。台地上平坦部に位置する。周辺の遺構に9-015・016がある。

遺構 平面形は楕円形を呈する。壁は西側を除いて垂直気味に立ち上がる。底面は凹凸を有する。底面の形状はやや不整形である。

覆土は色調を基本に2層に分層でき、埋め戻しと思われる。

遺物 覆土中より1点出土した。

所見 出土遺物から、縄文時代中期前半阿玉台式期の土坑と判断した。本跡も9-012・013同様に、土坑とするにはやや小振りではある。

出土遺物 1は胴部片。横位に隆線を貼付し、その両脇に沿って単列の角押文を施文したものの。これは胎土的には非雲母混入型である。

9-016

検出地区 C6-27G。調査区中央。台地上平坦部に位置する。周辺の遺構に9-014・015がある。

遺構 平面形は不整形楕円形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、底面はやや凹凸に富み、北側一帯の底面が一段下がる。

覆土は色調を基本に6層に分層できた。埋め戻しと思われ、上層に焼土が含まれる。

遺物 覆土中から万遍なく出土したが、特に2層と4層に多い。

所見 出土遺物から縄文時代中期前半阿玉台式期の土坑と判断した。

出土遺物 出土総数は33点で、7点を図示。1は隆線を貼付した胴部片。2・3はハマグリの復縁を用いてひだ状の装飾を施す。4～6は胴下半であるが、ユビナデを中心に特に調整はしない。胎土は、1・4を除いて雲母混入型。7は土器片鏝。輪積みに対して平行の面取りを行い、長軸に索溝を刻む。

表 2-1-4 縄文時代土坑一覧表

(単位m)

遺構番号	検出調査区	平面形 規模;長軸×短軸×壁高 遺構の状況	覆土の状況 遺物の状況	その他 備考
1-008	D7-97	略門形 0.85×0.72×0.23 主軸 N-60°-E 壁は比較的緩やかで底面はやや凹凸を有し、ビット1基を有す	色調を基本に5層に分層 埋め戻しか	底面に小ビット1基 奈良文期(野鳥?)
1-017	D7-86	楕円形 1.27×0.92×0.38 主軸 N-2°-E 壁は垂直気味に立ち上がる。底面は北側に低い段を有するが平坦	色調を基本に8層に分層 短時間の埋め戻し 遺物は5層中心に出土	低い段を有する 堀之内式期
1-019	D7-86	不整形楕円形か (0.73)×0.76×0.23 主軸 N-92°-E 壁は垂直気味に立ち上がる。底面は門凸に富む	色調を基本に4層に分層 埋め戻し。最下層に焼土多量 最上層を中心に出土	捨て焼土、或いは炉火の 火床部か 奈良文期(野鳥?)
1-020	D7-25	楕円形 (2.02)×1.74×0.25 主軸 N-35°-E 壁は比較的緩やかに立ち上がる 底面は概ね平坦	色調を基本に10層に分層 最下層の上に貝投棄。埋め戻し 底面付近、貝層中、貝層上層(2層最下部)に見られる	1-029aを破壊する 遺構内埋積貝層 縄ヶ島台式期
1-029b	D7-35	楕円形 (0.88)×(0.75)×0.4 主軸 N-60°-E 壁は緩やかに立ち上がる 底面はやや凹凸に富む	色調を基本に4層に分層 1層及び3層下部に遺物多い	底面に小ビット2基 縄ヶ島台式期

遺構番号	検出調査区	平面形 規模；反軸×短軸×壁高 遺構の状況	覆土の状況 遺物の状況	その他考 備
I-030	D7-25	不整楕円形 0.87×0.72×0.51 主軸 N-29°-E	色調を基本に4層に分層	一部不明
		壁は緩やかに立ち上がる 底面はやや凹凸に富む	2・3層より遺物が出上	
I-040	D7-07	不整楕円形 1.01×0.77×0.37 主軸 N-20°-E	色調を基本に4層に分層 埋め戻し	阿玉台式期
		壁は緩やかに立ち上げる 底面は凹凸を有する	各層に万遍なし 1層下部から3層上部に多い	
I-042	D6-97	楕円形 1.16×0.70×0.37 主軸 N-30°-E	色調を基本に5層に分層 埋め戻し	不明
		壁は緩やかに立ち上がり、底面は丸みを帯びる	最上層にて検出	
I-045	D7-44	円形 0.92×0.90×0.36 主軸 ほぼ南北	色調を基本に4層に分層 埋め戻し	縄ヶ島台式期
		壁は垂直気味。底面はやや丸みを帯びて凹凸を有する	2層下部から3層にかけての出上が目立つ	
I-046	D7-45	円形 2.27×2.10×0.86 主軸 N-34°-W	色調を基本に8層に分層 埋め戻し	小堅穴 阿玉台式期
		壁は垂直気味に立ち上がり、底面は比較的平坦	各層に満遍なく。3層中の出土が目立つ	
I-047	D7-44	不整楕円形 1.57×0.90×0.56 主軸 N-46°-W	色調を基本に4層に分層 埋め戻し	五領ヶ台式期
		壁は底に向けてすぼまる。底面は凹凸に富む	1層を中心に出上する	
9-010	C6-16	円形 1.8×(0.78)×0.08 主軸 不明	色調を基本に2層に分層 埋め戻し	1/2未調査 小堅穴 阿玉台式期
		壁は緩やかに立ち上がり、底面は概ね平坦	遺物の出土は少ない	
9-011	C6-17	楕円形 1.38×1.16×0.10 主軸 N-33°-W	色調を基本に2層に分層	9-012の破壊を受ける
		壁は緩やかに立ち上がる。底はやや凹凸が目立つ		
9-012	C6-17	不整楕円形 0.62×0.43×0.06 主軸 N-33°-W	色調を基本に2層に分層	9-011を破壊する
		壁はやや緩やかに立ち上がり、底面は凹凸を有する	9-013と遺構間接合	
9-013	C6-17	不整楕円形 0.67×0.60×0.13 主軸 N-33°-W	色調を基本に3層に分層	層之内式期
		壁は垂直気味に立ち上がり、底面は丸みを帯びる	9-012と遺構間接合	
9-014	C6-27	楕円形 0.59×0.43×0.14 主軸 N-10°-W	色調を基本に2層に分層 埋め戻し	阿玉台式期
		壁は西側を除き、垂直気味に立ち上がる。底面は凹凸を有する	覆土中より極少量	
9-016	C6-27	不整楕円形 (2.15)×1.45×0.23 主軸 N-11°-E	色調を基本に6層に分層 自然堆積ではなく、上層に焼土	阿玉台式期
		壁は緩やかに立ち上がる 北側の底面が一段下がる	満遍なく出土。特に2層と4層に多し。	

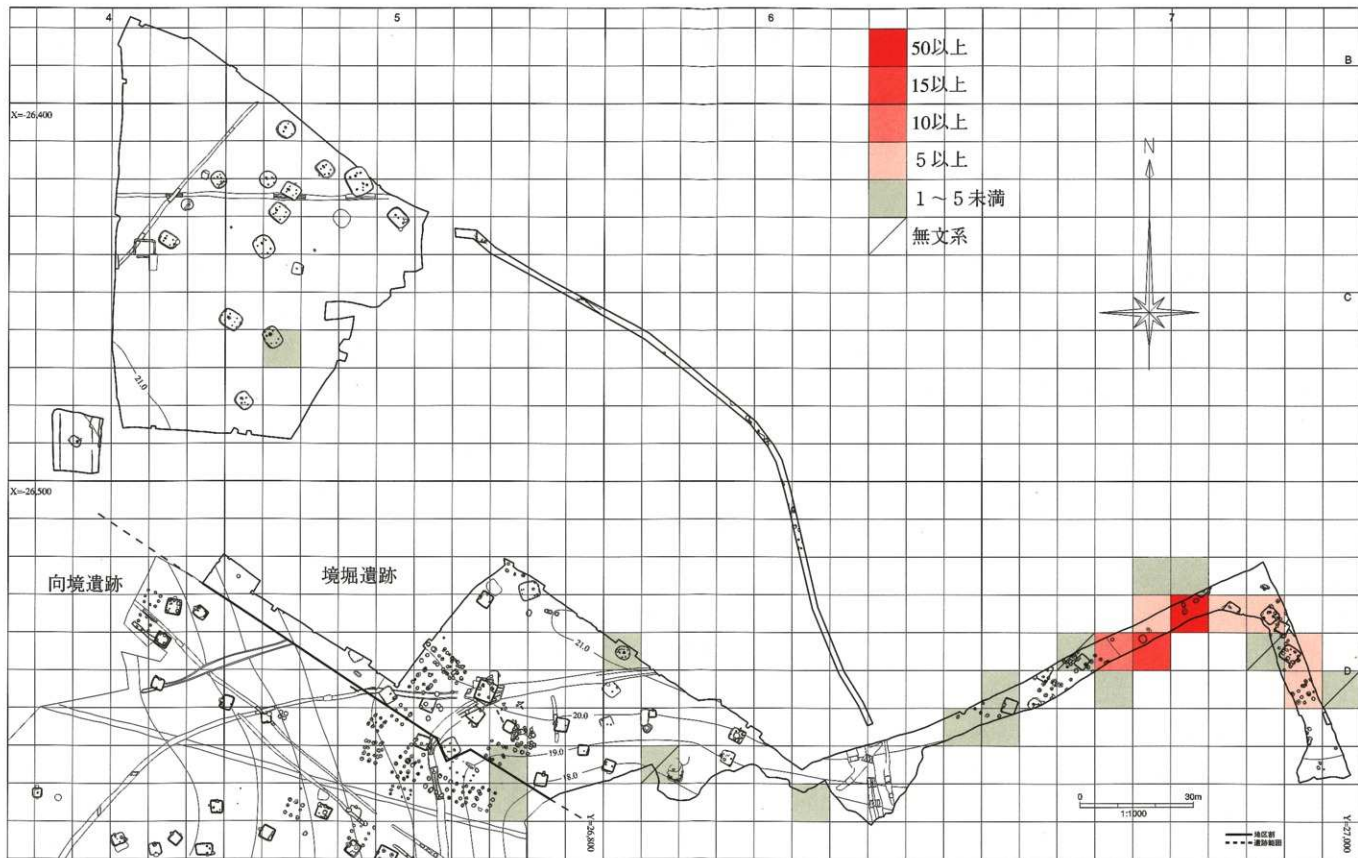


图 2-1-19 境堀遺跡遺物包含層圖 (燃系文系土器)

#### (4) 遺構外出土遺物

##### 1 土器

早期 埴埴遺跡の縄文時代早期における出土遺物は、条痕文期の遺物が早期の主体を占めていると思われ、鶉が島台期の遺物がまとまって出土した。また、燃糸文期後半（稲荷台新段階～花輪台期）の遺物も少量ながらまとまって出土した。

燃糸文期 燃糸文期の土器については、1類（稲荷台式）、2類（花輪台式）に大きく類別して記載を行う。また、各類別に必要な応じて分類を行いたい。

##### 1類 稲荷台式（図2-1-20～図2-1-23）

図2-1-20、1～16、図2-1-21、17～23

全て口縁片で、1～16が有文タイプ（a種）で、17～23が無文タイプ（b種）である。

a種 1は、口縁が外削ぎみに肥厚し、直行ないしやや外傾する。口縁部に若干の無文部を形成し、細かなR燃糸を縦位に施文し、帯状施文の可能性有り。色調は淡褐色で、胎土にチャート、石英等の小角礫を微量含むが緻密で内外面ともよく研磨されている。焼成も良好である。2も、口縁が外削ぎみに僅かに肥厚し、直行ないしやや外傾する。口縁部に僅かに無文部を形成し、細かなR燃糸を縦位に施文する。色調は表面が褐色で裏面が黒褐色である。胎土にチャート等の小角礫を微量含むが、内外面ともよく研磨されている。焼成も良好である。3、4は、ともに類似した個体で、口縁が外削ぎみに肥厚し、直行ないしやや外傾する。口唇が角頭状を呈す。口縁部無文帯に関しては形成されていない。原体は判然としない部分も多いがR燃糸か。色調は橙褐色で、胎土にチャート、石英等の小角礫を少量含むが、内外面とも研磨されている。焼成も良好である。5は口縁が外削ぎみに肥厚し、直行ないしやや外傾する。口唇が角頭状を呈し、口縁下に僅かに凹線が廻る。口縁部無文帯に関しては形成されていない。原体はR燃糸を施文。色調は褐色で、胎土にチャート、石英等の小角礫を少量含む。焼成も良好である。6は、口縁が外削ぎみに肥厚し、口縁部無文帯に関しては形成されていない。原体は判然としない部分も多いがR燃糸か。色調は褐色で、胎土にチャート、石英等の小角礫を少量含む。焼成も良好である。7は、口縁が僅かに肥厚、外反し、直行ないしやや外傾して立ち上がる。口縁下に凹線が廻る。口縁部無文帯に関しては形成されていない。R燃糸を施文。色調は表面が褐色で裏面が暗褐色で、胎土にチャート、石英等の小角礫を少量含む。焼成も良好である。8も、口縁が僅かに肥厚、外反し、直行ないしやや外傾して立ち上がる。口縁下に凹線が廻る。口縁部無文帯に関しては形成されていない。原体はR燃糸を施文。色調は表面が暗褐色で裏面が褐色で、胎土にチャート、石英等の小角礫を微量含む。焼成も良好である。9は、口縁が僅かに外反し、直行ないしやや外傾して立ち上がる。口唇が角頭状を呈し、口縁下に僅かに凹線が廻る。口縁部無文帯に関しては形成されていない。原体はR燃糸を斜位に施文。色調は淡褐色。胎土は比較的緻密でよく研磨されている。10は、口縁が僅かに外反し、直行ないしやや外傾して立ち上がる。口唇が角頭状を呈し、口縁下に凹線が廻る。口縁部無文帯に関しては形成されていない。原体はR燃糸を施文。色調は褐色。胎土は比較的緻密。焼成も良好である。11は、口縁が内削ぎされ外側に肥厚しやや外傾して立ち上がる。口縁部は無文帯となり、口縁下に半裁竹管によるC字の連続刺突が廻り、口縁部と胴部を区画する。胴部羽は、R燃糸を縦位に施文。色調は橙褐色。胎土は比較的緻密。焼成も良好である。12は、口縁が僅かに肥厚、外反し、やや外傾して立ち上がる。口唇は角頭状を呈し、口縁部は無文帯となる。口縁下に僅かに凹線が廻り同時に半裁竹管によるC字の連続刺突を施し、口縁部と胴部を区画する。胴部に所謂補修孔が見られるが、胴部文様帯については不明。色調は表面が褐色で裏面が橙褐色。胎土は比較的緻密。焼成も良好である。13は、11と類似し、口縁が外削ぎ状に肥厚し、やや外傾して立ち上がる。口縁部は無文帯となり、口縁下に半裁竹管によるC字の連続刺突が廻り、口



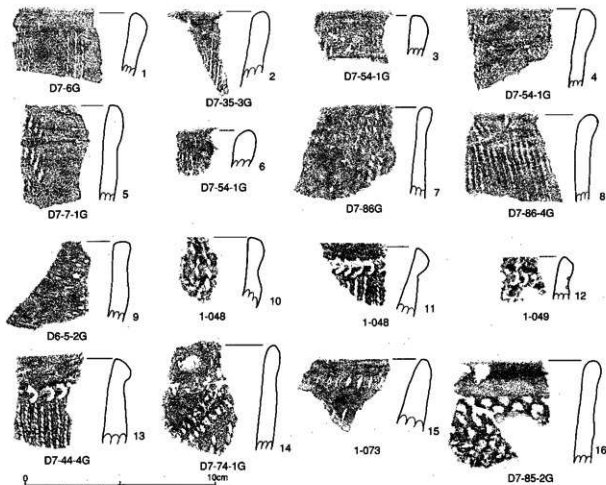


図 2-1-20 燃糸文土器 (1)

緑部と胴部を区画する。胴部羽は、R燃糸を縦位に施文。色調は褐色。胎土は緻密で研磨されている。焼成も良好である。14は、口縁が僅かに肥厚し、ほぼ直行して立ち上がる。口縁部に無文帯を形成し、口縁下に凹線が廻る。胴部に絡条体圧痕を斜位に2段施し、更に燃糸Rを縦位に施している。色調は褐色。胎土は比較的緻密。焼成も良好である。15は、口縁が直行ないしやや外傾して立ち上がる。口唇が角頭状を呈する。口縁部直下に絡条体圧痕を横位に2段施す。色調は褐色。胎土は比較的緻密出研磨されている。焼成も良好である。16は、口縁が僅かに肥厚、外反し、やや外傾して立ち上がる。口縁部は無文帯となる。胴部は、節の粗いLR縄文を斜位に施文。色調は表面が褐色、裏面が暗褐色。胎土は緻密で研磨されている。焼成も良好である。

b種 17は、口縁が僅かに外削ぎみに肥厚し、直行ないしやや外傾する。口縁下に凹線が廻る。色調は淡褐色で、胎土にチャート、石英等の小角礫を少量含む。焼成も良好である。18は、口縁が僅かに外削ぎみに肥厚し、直行ないしやや外傾する。口縁下に凹線が廻る。色調は淡褐色で、胎土にチャート、石英等の小角礫を少量含む。焼成も良好である。19は、口縁外削ぎで、僅かに外反する。色調は淡褐色で、胎土は緻密で焼成も良好である。20は、口縁が僅かに外反し、直行ないしやや外傾する。口唇は角頭状を呈する。薄手の口縁片で、口縁下に僅かに凹線が廻る。色調は淡褐色で、胎土は緻密で、口縁付近で横位の、胴部で縦位の削ぎを施す。焼成も良好である。21は、口縁が僅かに外反し、直行ないしやや外傾する。口唇は角頭状を呈する。色調は暗褐色で、胎土は緻密。焼成も良好である。22は、口縁が直行ないしやや外傾し、口唇は角頭状を呈する。色調は褐色で、胎土は緻密。焼成も良好である。23は、口縁が僅かに外反し、直行ないしやや外傾する。薄手の口縁片で、口縁下に僅かに凹線が廻る。色調は暗褐色で、胎土は緻密。焼成も良好である。

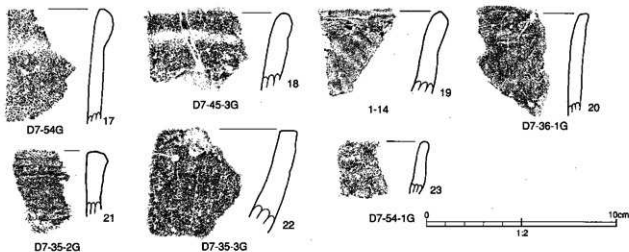


図2-1-21 燃糸文系土器(2)

図2-1-22, 1~26 1類(稲荷台式)に伴う有文の胴部片を取り上げた。

1は、絡糸体圧痕を5段施し、以下をRL縄文を施文する。色調は褐色で、胎土は緻密。焼成も良好である。2は、細かなR燃糸を縦位に施文し、帯状施文の可能性有り。色調は表面が褐色で裏面が暗褐色で、胎土は緻密でよく研磨されている。焼成も良好である。3は、細かなR燃糸を縦位に2段施文し、帯状施文の可能性有り。色調は表面が褐色で裏面が暗褐色で、胎土は緻密でよく研磨されている。焼成も良好である。4~5は、細かなR燃糸を縦位に施文し、帯状施文の可能性有り。色調は表面が褐色で裏面が暗褐色で、胎土は緻密でよく研磨されている。焼成も良好である。3~5は、同一個体の可能性あり。6は、細かなL燃糸を縦位に施文し、色調は表面が橙褐色で裏面が暗褐色である。胎土は緻密でよく研磨されている。焼成は良好である。7は、細かなL燃糸を縦位に施文し、色調は表面が橙褐色で裏面が淡褐色である。胎土に若干の砂粒を含む。焼成は良好である。8、9、10は、細かなR燃糸を縦位に施文し、色調は褐色である。胎土に若干の砂粒を含む。焼成は良好である。11は、細かなR燃糸を縦位に施文し帯状施文の可能性有り。色調は橙褐色で胎土に若干の砂粒を含む。焼成は良好である。12は、細かなR燃糸を縦位に施文し、色調は褐色である。胎土は緻密で焼成も良好である。13、14は、細かなR燃糸を縦位に施文し、色調は表面が橙褐色で裏面が暗褐色である。胎土は緻密で焼成も良好である。15は、細かなRL燃糸を縦位に施文し帯状施文の可能性有り。色調は表面が橙褐色で裏面が暗褐色である。胎土に若干の砂粒を含む。焼成も良好である。16は、細かなR燃糸を縦位に施文し帯状施文の可能性有り。色調は表面が淡褐色で裏面が暗褐色である。胎土に若干の砂粒を含む。焼成は良好である。17は、表面に細かな横位の擦痕があり、研磨の後、細かなR燃糸を縦位に施文したと思われる。帯状施文の可能性有り。色調は表面が橙褐色で裏面が褐色である。胎土に若干の砂粒を含む。焼成は良好である。18も、細かなR燃糸を縦位に施文し帯状施文の可能性有り。色調は褐色である。胎土は緻密、焼成も良好である。19は、細かなR燃糸を縦位に施文し帯状施文の可能性有り。色調は表面が橙褐色で裏面が淡褐色である。胎土は緻密で焼成も良好である。20は、細かなR燃糸を施文し色調は暗褐色である。胎土は緻密で焼成も良好である。21は、R燃糸を縦位と斜位に施文し、色調は表面が橙褐色で裏面が淡褐色である。胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良好である。22は、節の粗いR燃糸を縦位に施文し色調は表面が淡褐色で裏面が暗褐色である。胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良好である。23は、細かなR燃糸を縦位に色調は表面が褐色で裏面が暗褐色である。胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良好である。24は、R燃糸を縦位に施文し、色調は淡褐色である。胎土は緻密で焼成は良好である。25は、底部付近の胴部片でR燃糸を縦位に施文し、色調は表面が褐色で裏面が暗褐色である。胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良好である。26は、L燃糸を縦位に施文し、色調は表面が褐色で裏面が暗褐色である。胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良好である。

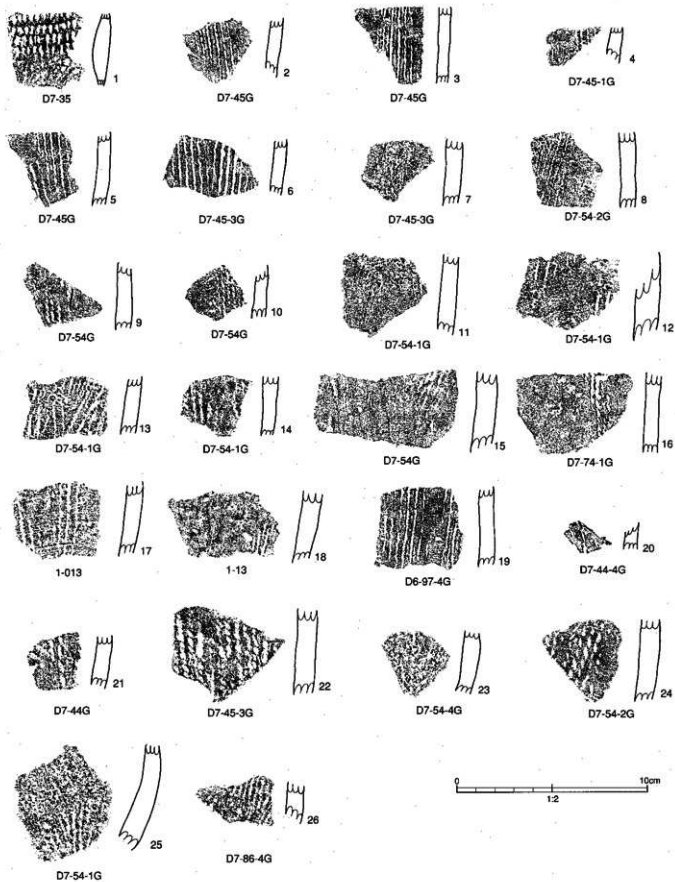


图2-1-22 梳齿文系土器(3)

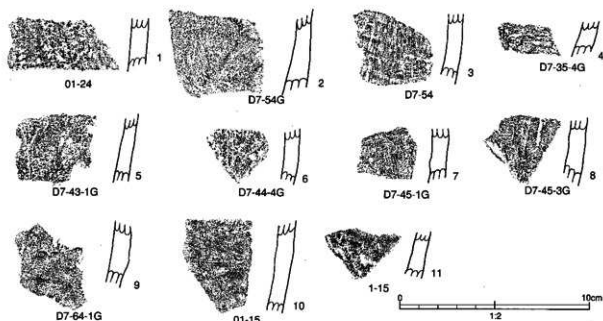


図2-1-23 燃糸文系土器(4)

図2-1-23, 1~11 1類(稻荷台式)に伴う無文タイプの胴部片である。有文タイプの無文部分である可能性もあるが、ここでは一括して取り上げた。

1は、色調が橙褐色で、胎土に少量の砂粒を含み、表面は丁寧に研磨されている。焼成は良好である。2は、色調が表面が褐色で裏面が暗褐色である。胎土は緻密で、焼成は良好である。3は、色調が褐色で、胎土は緻密で、焼成は良好である。4は、色調が表面が褐色で裏面が暗褐色である。胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良好である。5、6は、色調が表面が褐色で裏面が淡褐色である。胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良好である。7は、表面に僅かに縦位の擦痕があり、色調は表面が橙褐色で裏面が褐色である。胎土に若干の砂粒を含む。焼成は良好である。8は、色調が淡褐色で、胎土に若干の砂粒を含む。焼成は良好である。9、10、11は、色調が表面が褐色で裏面が淡褐色である。胎土に少量の砂粒を含み、焼成は良好である。

## 2類 花輪台式(図2-1-24, 1~18)

花輪台式及びその他を取り上げた。18は、沈線文系土器と思われる。

1は、口縁片で、直行ないしやや外傾する。口唇は凹頭状を呈する。口縁部に若干の無文部を形成し、破片資料の為、詳細は不明だが、口縁部下端に原体の側面圧痕があったものと思われる。色調は表面が黒褐色で裏面が淡褐色である。胎土は緻密で焼成も良好である。2~14は、胴部片である。2は、L R縄文を羽状構成で施文する。色調は褐色で胎土は緻密、焼成も良好である。3も2と同様であるが、色調は淡褐色である。4は、細片の為不明な部分もあるが、口縁部下端に原体の押圧があると判断し2類とした。色調は淡褐色で胎土は緻密、焼成も良好である。5は、R燃糸を施文する。色調は褐色で胎土は緻密、焼成も良好である。6は、L R縄文を羽状構成で施文する。色調は淡褐色で胎土は緻密、焼成も良好である。7は、R L縄文を施文する。色調は褐色で胎土は緻密、焼成も良好である。8は、L R縄文を施文。色調は褐色で、胎土は緻密、焼成も良好である。9~11は、R L縄文を施文。どれも色調は褐色で、胎土は緻密、焼成も良好である。出土地点も同じ為、同一個体の可能性有り。12は、L R縄文を施文する。色調は褐色で胎土は緻密、焼成も良好である。13は、R L縄文を施文する。色調は淡褐色で胎土は緻密、焼成も良好である。14は、R L縄文を施文する。色調は橙褐色で胎土は緻密、焼成も良好である。15~17は、底部付近の胴部片で、15は、R L縄文を施文する。色調は淡褐色で胎土は

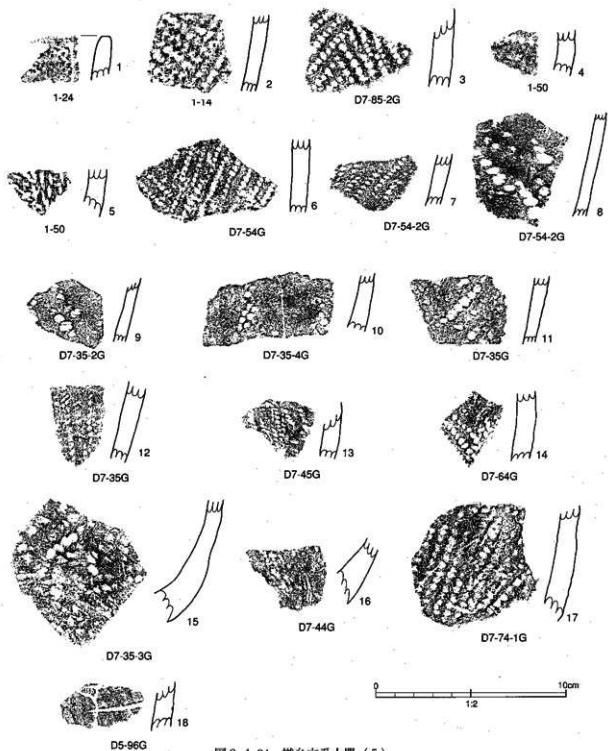


図 2-1-24 燃糸文系土器 (5)

緻密、焼成も良好である。16は、R燃糸を施文か。色調は淡褐色で胎土は緻密、焼成も良好である。17は、L R縄文を施文する。色調は表面が褐色で裏面が淡褐色である。胎土は緻密、焼成も良好である。18は、胴部片で胴部上半にあたると思われる。横走る沈線が2条あり。色調は橙褐色で胎土に少量の砂粒を含む。焼成は良好である。田戸下層式か。

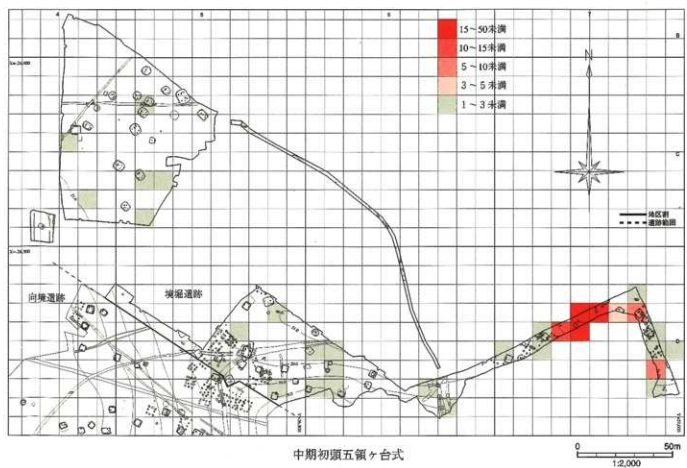
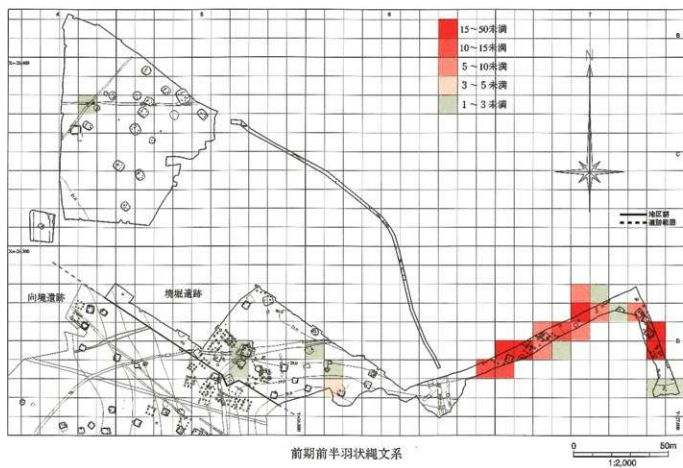
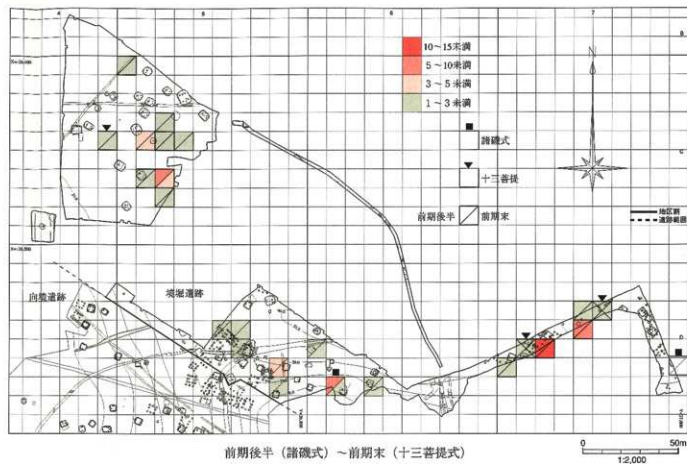
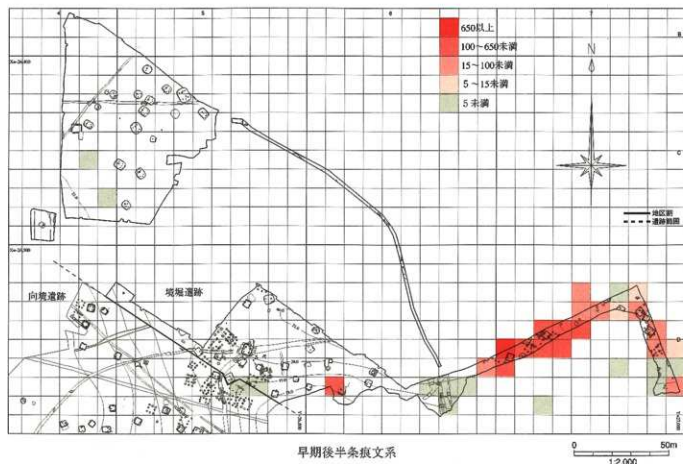


図2-1-25 境堀遺跡遺物包含層図(中期~早期)

条痕文土器 条痕文土器については、細別型式の判明したものは型式毎に分け、単に属性のみで記したのものもある。細別型式の中でも、諸属性に応じて分類して記すことにしたい。

以下の各類の対応は、1類（子母口式）・2類（野鳥式）・3類（茅山下尼式）となる。

#### 1類 子母口式（図2-1-26-1～4）

いずれも口縁は軽く外反気味に立ち上がり、口唇部形態は角頭状を呈する。口唇部には浅いキザミを施し、表裏とも条痕を施すもので、「D」字状に割った工具により数条の点列状の刺突を施文するものである。1・2は同一個体。

#### 細隆起線で意匠を描くもの（図2-1-26-5）

やや太めの細隆起線で意匠を施すもの。細片のため、意匠は不明である。

#### 3類 鶺鴒ヶ鳥台式（図2-1-26-6～図2-1-29-91）

諸属性により、仮に下記のように分類する。

##### a類 細隆起線による区画内に連続刺突を充填するもの（図2-1-26-6～9）

これは、aイ種 細隆起線に沿って沈線を引くもの（同図6）

aロ種 細隆起線に沿って連続刺突を施すもの（同図7～9）

に分けられる。ともに口唇部形態は内削ぎ状を呈する。6は外側、7は外側と内側の両方にキザミを施す。文様の起点などの刺突文は、6が半截竹管、7は盲孔状の円形刺突となっている。器形的には6がくびれを1段有し、7は2段のくびれを有するものである。なお、9の胎土は雲母細粒を含んでおり、にぶい光沢を放っている。

##### b類 沈線による区画内に連続刺突を充填するもの（図2-1-26-10～22）

いずれも単沈線を描線として「タスキ」掛け状文などを基調とした意匠を描き、区画内に連続刺突を充填するもので、起点には円形竹管による刺突を施している。口縁部を有する資料では、口唇部形態が内削ぎ状となり、器形的には1段ないし2段のくびれを有する。区画内への刺突の充填は、10・11のように疎なものから、13・16のように密なものまで様々であり、ややオムニバスな内容である。17・18の胎土には雲母細粒が含まれている。

施文具は2種類以上を用いるものがほとんどである。文様描線と刺突は同一工具で、円形刺突のみ変えるものが多い。しかし、16及び22では全て同一工具を用いており、いずれも円形竹管（またはある種の鳥骨など）と考えられる。

##### c類 沈線による区画内に連続刺突を充填し、交点に貝殻背圧痕を施すもの（図2-1-27-23～24）

23は文様描線と連続刺突では、使用する工具が異なる。24では同一工具を用いている。文様交点の貝殻背圧痕は、23はサルボウ、24ではハイガイの殻頂部を用いたものである。

##### d類 沈線による縦位区画内に円形竹管による刺突を充填するもの（図2-1-27-25～27）

属性により大きく括ったが、各々の主幹となる文様は異なっており、別々の類型となる可能性がある。25・26では単列、27では複列の縦位区画が認められる。これらのうち、27は文様描線と円形刺突及び連続刺突では同一工具を用いる。他は連続刺突と文様描線とは工具を換えている。さらに、25の文様描線はササラ状工具を、縦位区画に接して半円形の意匠を描き、連続刺突を充填している。

##### e類 沈線及び細隆起線による区画を持たないもの（図2-27-28～29）

いずれも円形刺突と連続刺突の充填が見られるが、文様描線が見られない。ただし、29は小片のため、他の部分に意匠などが施されていた可能性も否定できない。

##### f類 沈線で格子目または山形文を描き、起点に円形刺突を施すもの（図2-27-30～32）

30～31は円形刺突と文様描線では同一工具を用いており、格子目文を描いている。32はあるいは山形文

になるか。これらは、円形刺突を文様の起点と交点とに用いている。そして、いずれの描線も多載竹管などの内側を用い、幅広かつ浅いものである。

g類 細隆起線を横位数条貼付し、円形刺突を施すもの(図2-1-27-33~34)

33は口縁部、34は頸部片であるが、少なくとも口縁部文様帯及び頸部文様帯の両方ともが単純な横帯構成となっていた可能性がある。

h類 文様描線として押し引き文や連続刺突を用いるもの(図2-1-27-35~41)

これは、hイ種 押し引き文を用いるもの(同図38・40)

hロ種 意匠内に連続刺突を充填するもの(同図36・37)

hハ種 純粋に文様描線として用いるもの(同図35・39・41)

に分けられる。イ種の38は、くびれ部の上下では施文具が異なっており、上は極めて細い多載竹管、下は多載竹管を用いている。ロ種の37は、施文効果上、次に記す「2連式竹管」との相関関係が問われるものである。

i種 2連式竹管文を施すもの(図2-1-27-42~44・53)

これらは42のように細隆起線に沿って施すものや、44のように半載竹管の内側を用いたものも含めている。44は施文上の描出効果という点では同様なが、施文具を観察すると半載竹管であるため、厳密には「2連式竹管」の範疇からは逸脱するものではある。

j種 円形刺突を施すのみもの(図2-1-27-45~46)

45はややランダムに、46は横走させ、かつ重畳させている。

k種 格子目文を描くもの(図2-1-27-47~50)

47は起点に円形刺突を施し、細沈線である点を除けば、30~32と近いものがある。49は意匠内の充填として格子目文を施している点で他と異なる。

l種 2連式竹管文を施し、起点に貝殻背圧痕文を施すもの(図2-1-28-51・52)

51は口縁片で、口唇部形態は内削ぎ状を呈し、内外面の口縁端部にはキザミを施す。貝殻背圧痕はハイガイの殻頂部か。2連式竹管は多載竹管を用いる。52の貝殻背圧痕はハイガイの殻頂部を用い、竹管は細い多載竹管を用いている。施文は比較的浅く行われているため、実際の遺物を観察してみると、拓影図の時以上に貝殻背圧痕が浮き立って見える。

m種 単列の押し引き文で意匠を描くもの(図2-1-28-54・58~60)

これらは多分にオムニバスな集まりではある。単列の押し引き文をキイにしてはいるが、意匠など様々なものがある。波状線(54)・平線を含み、口唇部形態も内削ぎはじめとして、角頭状(60)まで様々である。58は押し引き文ではないかも知れない。59は見かけ上3列に見えるが、これは単列の押し引きを近接して施したためで、描出効果上は複列と同様になったものである。使用原体という点で本種に含めたものである。

n種 複列の押し引き文で意匠を描くもの(図2-1-28-55~57)

これらは原体に「2連式竹管」を用いているものである。施文方法として、i種及びl種では刺突による施文であったが、本種は押し引きによる施文となっている。これに加え、施文具自体が細く削いだ多載竹管を用いるため、より繊細な描出効果を与えている。口唇部形態は様々で、内削ぎ気味のもの(55)、尖頭状のもの(56)が見られる。

o種 刺突を集約して施文するもの(図2-1-28-61)

本種は沈線などによる文様描線が見られず、刺突を集約して施文するものである。1例のみであって、大きく括る場合は、他の種に含まれる可能性を孕んでいる。61の口唇部形態は内削ぎ気味で、口唇上に



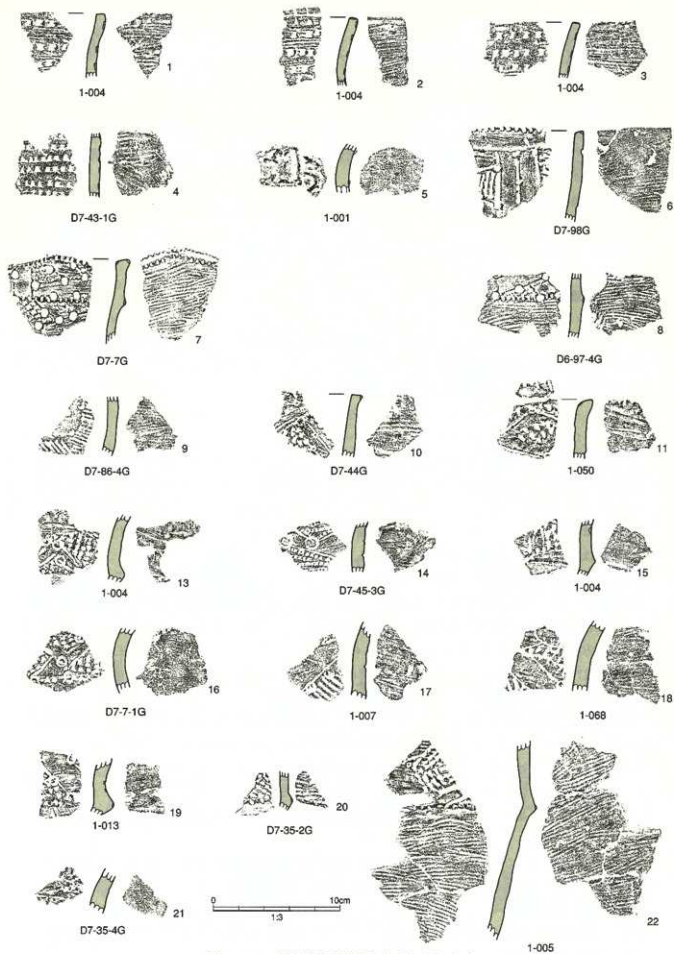


图 2-1-26 縄文時代早期後半条痕土器 (1)

キザミを施している。

**p種 刺突により山形文を描くもの(図2-1-28-62・63)**

これらは、刺突という施文方法と、山形文という描出した意匠における共通項による括りであって、使用原体は異なっている。62は「2連式竹管」を用い、63は多裁竹管である。

**q種 ナゾリにより意匠を描き、円形竹管による刺突を施すもの(図2-1-28-64)**

本種はナゾリにより楕円形の意匠を描いており、アクセント的に円形竹管による刺突を、観察の限りでは3箇所ばかり施文している。

**r種 多条化沈線を文様描線とするもの(図2-1-28-65・66)**

65は3本1組を描線としており、起点及び交点には円形刺突及び貝殻殻頂部圧痕を施している。意匠自体は菱形状あるいはタスキ掛け状文か。66は2本を束ねた竹管の裏面を用いており、やや斜方向気味の平行沈線を引いている。くびれ部に近い起点には、貝殻殻頂部圧痕を施すものである。

**s種 貝殻殻頂部圧痕のみを施すもの(図2-1-28-67・68)**

67の原体はハイガイの殻頂部で、山形を意識した圧痕が見られ、部分的にナゾリが認められる。68はわずかながら刺突文が見られるため、本種からは逸脱するかも知れない。ともにくびれ部付近の破片であって、屈曲部にはキザミを施している。

**t種 表裏に条痕を施した粗製土器(図2-1-28-69~91)**

これは、**tイ種** くびれを有するもの(図2-1-28-69~70)

**tロ種** くびれないもの(図2-1-28-71~85)

に分けられる。69は平縁で、口唇部形態は角頭状を呈し、1段くびれを有するもの。外面はヨコ方向を主とする貝殻条痕、内面は口縁→胴上半ではヨコ、胴中位以下はナナメ方向(右下がり)を主とする貝殻条痕を施す。70は頸部が短く、やや内傾気味に立ち上がり、口縁は緩い小波状となる可能性がある。口唇部形態は円頭状を呈し、キザミを施す。内外面ともヨコ方向を主とする貝殻条痕を施す。

71~79は平縁で、かつ口唇上にキザミを有するものを集めた。

ただし、口唇部形態は様々で、内割ぎ状を呈するものが中心となるが、72・76のような「ひだ状」を呈するものを含めている。器面調整は、内外面ともヨコ方向を主とする貝殻条痕を施すものが目立つ。ただし、厳密に見れば、内外面とも広葉樹の木端などを原体として用いた条痕を施すもの(71・75)、外面がナナメ方向(右下がり)を主とする貝殻条痕のもの(72)、内面がナナメ方向(右下がり)を主とする貝殻条痕のもの(77・78)、などのヴァリエーションが認められる。

80~84は平縁で、かつ口唇上にキザミを施さないものを集めた。

口唇部形態は内割ぎ状を呈するものが中心となるが、角頭気味のもの(80・83)を含めている。器面調整は様々で、内外面ともヨコ方向を主とする貝殻条痕を施すもの(80)、外面がナナメ方向(右下がり)の貝殻条痕のもの(81)、外面を主にナナメ→ヨコ方向の貝殻条痕のもの(82)、内外面ともナナメ方向を主とする貝殻条痕のもの(83・84)などのヴァリエーションが認められる。

85~90は胴部片を集めた。この中には、精製土器の胴部が含まれている可能性があるが、本種として記述することにする。

85は頸部と接するくびれ部付近の破片である。このことにより、精製土器ないしはtイ種の胴部に相当することがわかる。外面はヨコ方向の貝殻条痕、内面はナメを施している。

91は底部片である。やや上げ底気味の平底で、端部は少しだけ外側に張り出す。器面調整として、内外面及び底部外面に貝殻条痕を施す。この属性だけでは、精製土器のものであるか否かは判断できないため、不明としておきたい。

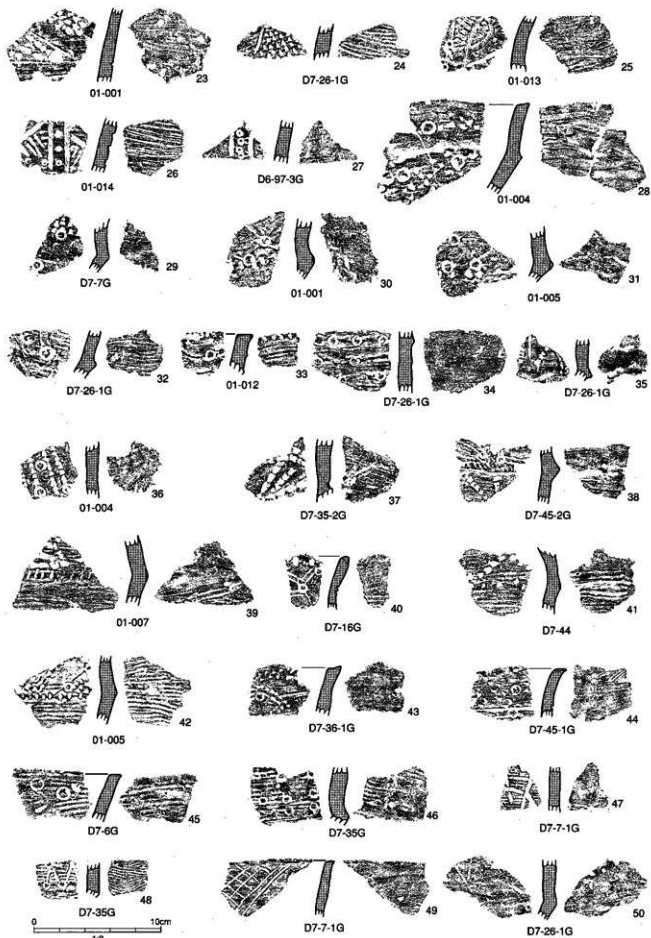


图 2-1-27 縄文時代早期後半条痕土器 (2)

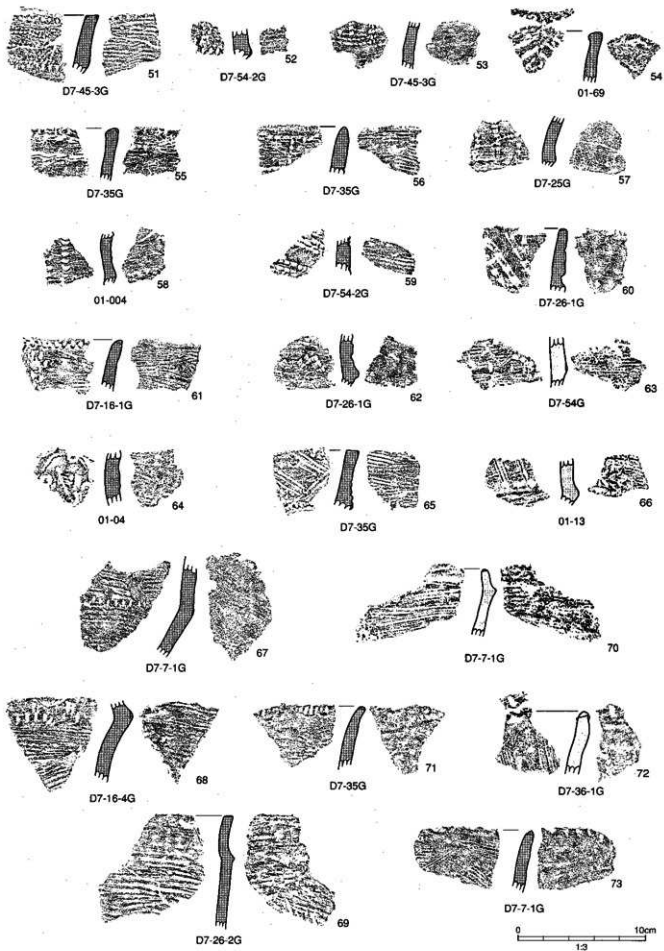


图 2-1-28 縄文時代早期後半条痕土器 (3)

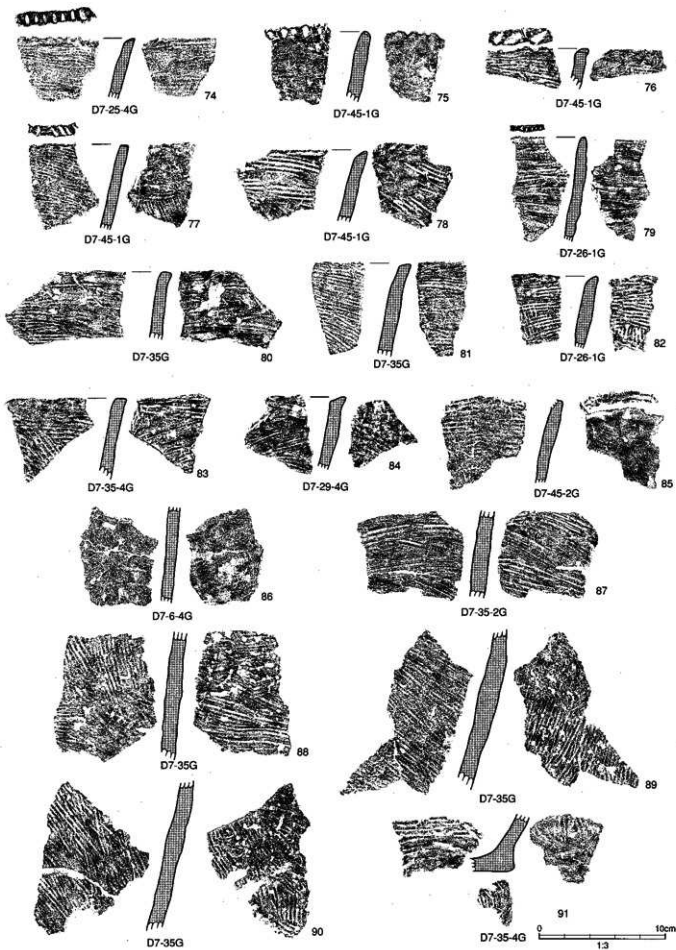


圖 2-1-29 繩文時代早期後半条痕文土器 (4)

前期 境堀遺跡における縄文前期の出土遺物は、決して多いわけではないが、前期前半～末業までが出土した。このうち、前期前半及び末業にややまとまりがあるものの、前後後半ではごく少量にとどまる。  
黒浜式 (図2-1-30-1～25)

- 1はループ文を横位に施した胴部片。胎土には砂・長石・繊維含み、焼成は良好。
- 2～3は口縁部文様帯に櫛歯文を施したもの。ともに施文原体は6本1組の工具である。
- 4～6は波状文を施した胴部片。4・5は施文原体に多載竹管の内側を用いる。4の波状文は大きく、スパンも広いが、5は細かくかつ浅い。6は1本描きで、かつ押し引き状に施文するものである。
- 7はコンパス文を施した胴部片。多載竹管の内側を用い、支点をずらしながら浅く施文する。
- 8は肋骨文を施した胴部片。多載竹管を用い、ごく浅く施文する。外面は橙褐色で、良く研磨されており、胎土はきめの細かいものを使用している。
- 9～10は貝殻文を施した胴部片。9は口縁片で、縦位の貝殻復縁の押捺を施す。10は胴部片で、斜位の貝殻復縁の押捺を施すもの。使用原体はともにアナガラ属の貝(サルボウカ)である。
- 11～25は胴部片を中心に、地文縄文のものを集めた(16のみ例外)。11は口縁片。口唇上から外面に2段RL(0段多糸)を施す。12は2段RL(直前段反燃りか)、13は2段RL、14は附加条縄文か。15は1段L、16は沈線を施文するもの。17・18の使用原体は不明で、19は燃りの粗い附加条縄文を施文し、胎土は長石・石英細粒目立ち、繊維の含有は少量。20は網目状燃糸文を施文し、器壁は薄手で雲母細粒を含み、繊維少量含むもので、他とは毛色が異なるものである。
- 21～24は附加条縄文を施文するもの。21・22は羽状構成となる。23は施文方向がバラバラで、24はクロスする部分がある。
- 25は唯一の例であるが、前々段反燃りの原体を使用しているものである。

#### 浮島・興津系 (図2-1-31-1～4)

- 1は口縁片。口唇上に細かなキザミを施し、口縁下に2列の刺突、その下に横位の爪形文を施す。興津式か。2は横位に産線を貼付後、連続押捺を施す。あるいは中期初頭か。3は三角文を施文するもので、4は粗いケズリ後に軽くミガキを施した胴部片。この2点は浮島3式に比定されよう。

#### 縄文系粗製土器 (図2-1-31-5～14)

- 5は口縁片。口唇はひだ状を呈する。1段Lを施文。6は胎土に砂の目立つもので、1段Lを施文する。7は1段Lを軽い押捺で施文。8も1段Lを用い、9はケズリ調整後、横位の結節縄文。10は2段RLを縦位施文後、タテ方向のケズリを行う。11は1段Lか。12は結節縄文、13は使用原体不明、14は1段L(反燃りか)を施文するものである。

#### 諸磯式 (図2-1-31-15～17)

- 15は連続爪形文で意匠を描くもの。16・17は縄文を地文に、浮線を貼付した浮線文系土器。17は浮線にも縄文を転がしている。これら3点は諸磯b式土器である。

#### 十三善提式 (図2-1-31-18・19)

- 18は複合口縁で、口唇上にキザミを施し、口縁下端に三角形彫刻文を、頸部には斜方向の条線を施す。19は結節浮線文を施すもので、浮線自体は高く太いものを用い、半載竹管を押しつつ引きずる。なお、本例は外面に「スス」または「オコケ」のこびりつきが見られる。

#### 粗く雑な格子文を施すもの (図2-1-31-20～22)

- 3点は同一個体。特徴は胎土に砂・長石・石英粒が目立ち、雲母を含んでおり、器面調整としてごく粗いケズリを行った後、雑な格子文を描く。胎土に雲母を含む点などは、中期初頭及び前半の資料群と共通項とはいえ、そのいずれとも異なる。今回は、取りあえず消去法で前期末業の仲間と見なした。

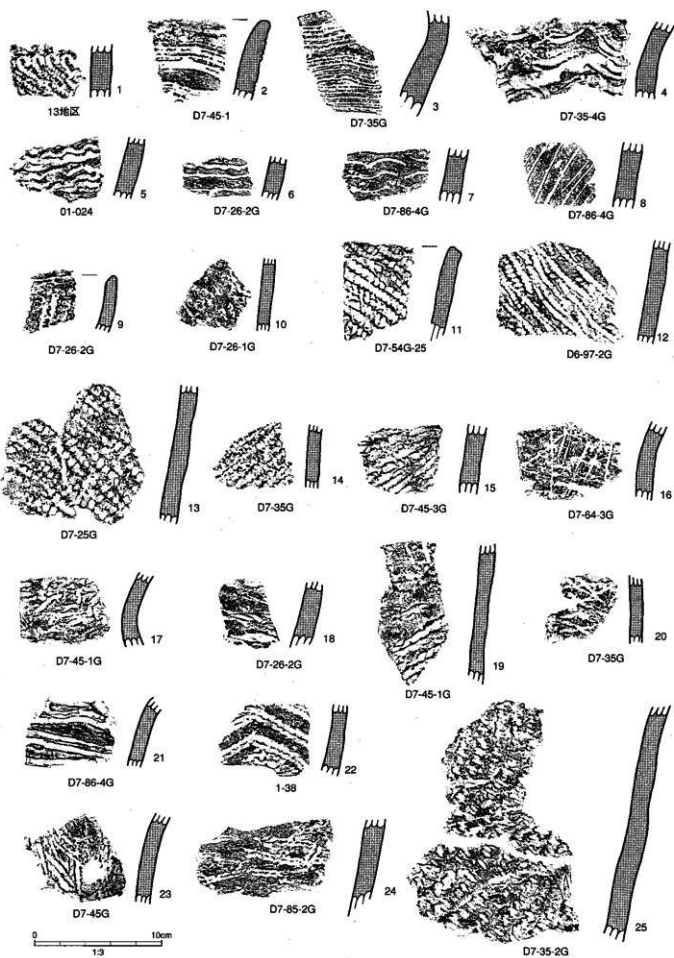


图 2-1-30 繩文時代前期前半黑浜式

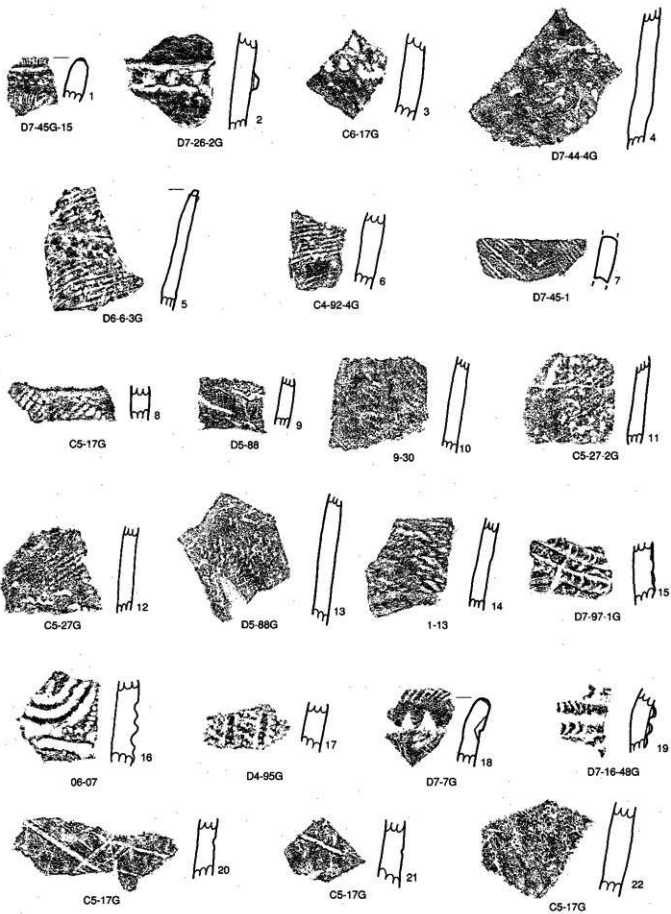


图 2-1-31 縄文時代前期後半～前期末葉



中期 境掘遺跡における縄文中期の出土遺物は、中期初頭～末葉までが確認されており、中期前半の阿玉台式にまとまりが見られた。また、中期初頭及び中期後半も、少量ながらまとまって出土した。

中期初頭 五領ヶ台式及び八辺系(式)土器が出土している。各々属性により分類して記述をしたい。

以下の各類の対応は、1類(五領ヶ台式)・2類(八辺系)・3類(縄文系粗製土器)となる。

### 1類 五領ヶ台式(図2-1-32-1)

1の1点のみ。細紋文系で、細線を施文してから沈線で上下端を区画し、小形三角形印刻を施す。いわゆる「細線先施文型」である。灰褐色に焼かれ、胎土に細砂・長石・スコリア細粒を含む。

### 2類 八辺系(図2-1-32-2～19)

これは、a種 八辺2期(図2-1-32-2～11)

b種 八辺3期(図2-1-32-12)

c種 八辺4期(図2-1-32-2-13～19)

に分けられる。なお、八辺系及びその区分については小林謙一の分類に準拠するものである。

a種 2～4は口縁片。2の口唇部形態は内削ぎ状を呈し、口縁下に複合鋸歯文を施す。3の口唇部形態も2同様で、口縁下に3条の沈線を引き、複合鋸歯文を施す。4の口唇部形態は角頭に近い内削ぎ状。交互刺突文と複合鋸歯文を施文する。5は頸部付近で、複合鋸歯文を横位に施し、その下部からまばらな蛇行沈線を垂下させる。6～7は複合鋸歯文を施すものであるが、6は縦位施文に加えて弧線文を描いており、7は縦位に施した胴部片。8は縦位に隆線を貼付し、隆線に沿って複合鋸歯文を施文するもので、隆線上にキザミを施す。器内面はタテ方向のケズリ後、ミガキ。9は隆線の上に刺突を施し、隆線に沿って2条の沈線を引き、円形竹管による斜方向の刺突を施すもの。10は縦位沈線に円形竹管による斜方向の刺突を施す。11は弧線文を引き、斜方向の刺突を加えるものである。

b種 12は底部付近で、下端は平行沈線を重畳させ、縦位沈線を引いてから斜方向の刺突を沿わせることで、鋸歯状の効果を得るものである。小形で円筒状の深鉢形土器になるものと思われる。

c種 13は口辺の破片で、沈線による意匠を施す。14は口縁片で、半縁。内湾気味に立ち上がり、狭小な内縁がつく。口縁下にスパンの細かい斜沈線を充填する。この下に基幹となる意匠が描かれる。本例は胎土に石英・雲母粒を含む。15は口縁下に縄文帯を2帯廻らせ、その下は3条の沈線を引いて、貼脂を起点に意匠を描く。縄文の原体は2段R Lを用い、胎土に長石・石英粒・雲母細粒を含む。16は波状縁で、内湾気味に立ち上がり、狭小な内縁を有し、口唇上にキザミを施す。縄文地文に沈線による意匠を描く。17は2段R Lを地文縄文に、沈線による意匠が描かれる。18は頸部片で、大きく膨らんで内湾気味に立ち上がり、地文縄文に沈線で意匠を描く。19は2段R L地文に、沈線で意匠を描く。

### 3類 縄文系粗製土器(図2-1-32-20～30)

20～23は口縁片。20は平縁で、口唇部形態は内削ぎ状を呈し、狭小な内縁を有する。口縁下に隆線を貼付し、そのプロフィールは15と近似するものがある。2段R Lを地文。21は20と口唇部形態及び内縁などの形状が近似しているが、隆線は付さない。2段R Lを口縁と頸部では転がす方向を変えている。22は口縁下に少し間をおいて隆線を貼付するもので、1段Lを地文。23は平縁かつ単口縁で、横位の結節縄文を施文する。胎土に長石・石英細粒がやや目立つ。

24～30は胴部片。24は縦位に2条の結節縄文を施文するもので、暗赤褐色に焼かれ、胎土に砂・石英・赤色スコリア粒を含む。本例を含め、26までは精製土器の胴部の可能性を有する。25・26とも縦位に結節縄文を施文するもので、25は附加条縄文か。27は1段Lを施文するが、条の流れが乱れており、「反撚り」か。28は縦位の結節縄文を施文(1段L)し、29は2段R L、胎土に長石・石英粒が目立つ。30は縦位に隆線を貼付した後、2段R Lを施す。胎土に長石・石英粒・雲母細粒を含む。

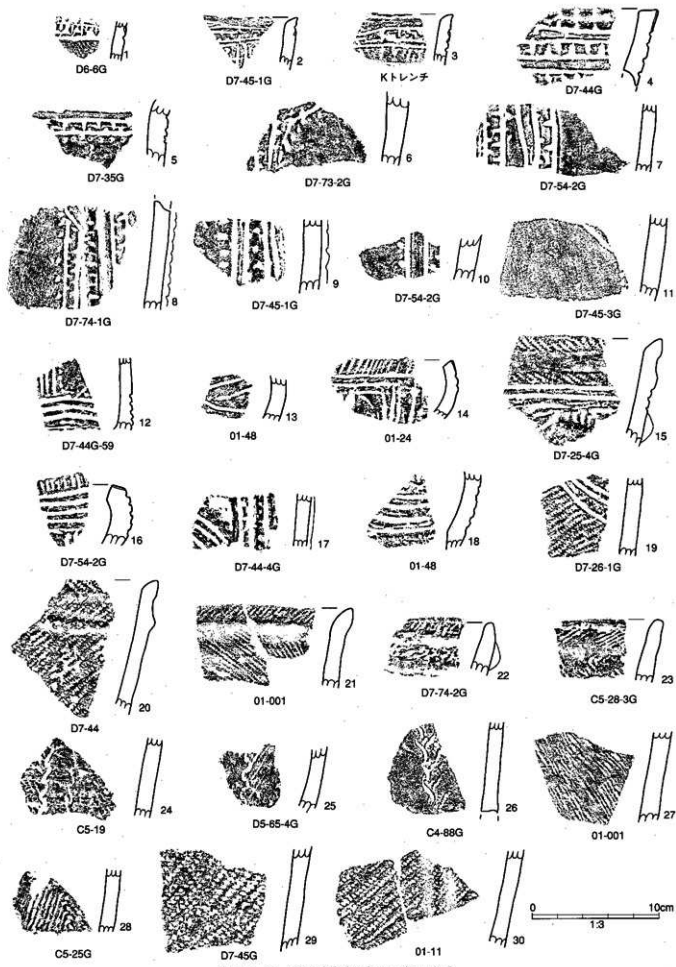
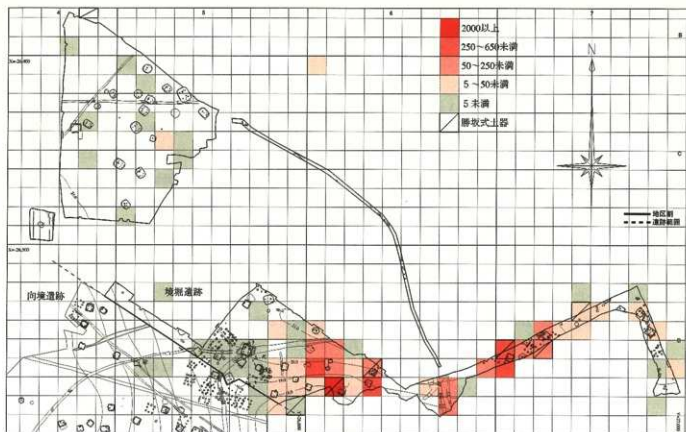
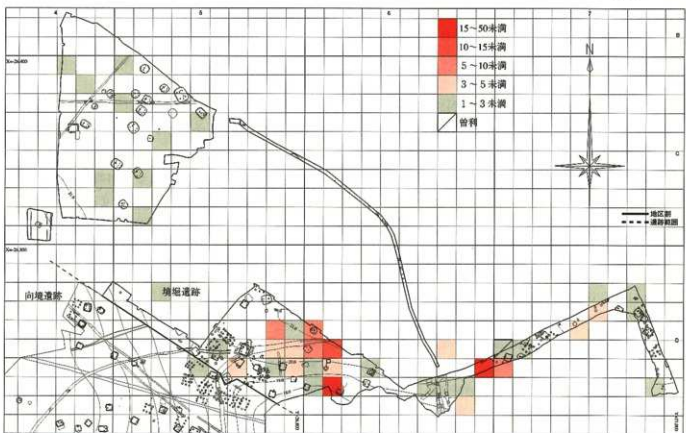


図 2-1-32 縄文時代中期初頭五領ヶ台式



中期前半阿玉台式・勝坂式



中期前半加曾利E式

图 2-1-33 境堀遺跡遺物包含層図

中期前半 阿玉台1 a式～2式が出土している。その他勝坂式及び勝坂系土器の出土もあった。

以下の各類の対応は1類(阿玉台1 a式)・2類(阿玉台1 b式)・3類(阿玉台2式)・4類(勝坂式及び勝坂系)となる。

#### 1類 阿玉台1 a式(図2-1-34-1～49)

1～5は口縁内面に彫刻文あるいは装飾を施したもので、1は波状線かつ大形土器である。6～9も波状線の資料。24～27は粘土棒を芯に粘土板で囲った突起を付すもの。28～33は口縁部に隆線による楕円区画を施すもので、単列の角押文を施文。34は角押文を施さないもの、39は有節線文気味に施文するもの。以上、1～40は口縁部ないし口辺部資料で、隆線に沿って単列の角押文、角押文のみ、ないし単列の角押文の重畳施文のものである。今回は図化しなかったものを含め、平縁資料が多かった。

41～49は胴部片。隆線を垂下するものや、48のように隆線上に押捺を加えるものを含む。

#### 2類 阿玉台1 b式(図2-1-35～37-1～123)

小林謙一による宮平貝塚での分類に概ね準拠する。

- a種 口縁部区画などで、隆線に沿って1条の結節線文を施すもの(小林の2類1種に対応)
- b種 区画内に結節沈線による意匠が施されるもの(小林の2類2種にほぼ対応)
- c種 区画内に斜位などの結節沈線を密に充填するもの(小林の2類3種に対応)
- d種 半裁竹管を器面に垂直に近い角度で施文するもの(小林の2類5種にほぼ対応)
- e種 単沈線で波状文などを描くもの(小林の2類4種にほぼ対応)

a種 図2A 41～16で、14・16は施文具に細い円形竹管を用いており、1類に比定するべきかも知れない。口縁部区画は比較的幅狭なものが多いといえる。

b種 同図17～27で、波状あるいは弧線を横位につなげた構成の意匠が多かった。21・22などは1類に比定すべき要素もあるが、今回は区画内に意匠を充填するという属性により本種と判断した。

c種 同図28～40で、は扇状把手が付けられたもの。39は内縁が未発達で、1類にするべきか。

d種 同図41～56で、46・47は扇状把手が付けられ、44・50は大波状線となる。

e種 同図59・60で、59は内縁に施文が見られ、1類にするべきかも知れない。

61～75は区画文のみ、あるいは無文系を含むその他、76～123は胴部片を中心とする。

#### 3類 阿玉台2式(図2-1-38-1～28)

1～6は波状線の資料。7は平縁で、竹管の内側を用いた平行沈線で波状文を描く。8は幅広の内縁を有する。9は口縁部が内側に強く屈曲する。17は口辺部片。複列の角押文を2列並列させるもので、施文具も複数用いており、三角形区画文を施文している可能性がある。25は複列の角押文で楕円形区画文を描くものである。

#### 4類 勝坂式及び勝坂系(図2-1-39-1～15)

1・2は同一個体。平縁深鉢で、横位に楕円形区画を連携させ、区画に沿って及び区画内に結節線文を充填する。頸部も同様の文様帯構成となるもの。胎土・焼成その他から見て搬入品。3は結節線文で意匠を描くもの。4は結節線文を文様描線として用い、円形竹管による刺突及びハマグリ の復縁による爪形文を充填する。本例はオリジナルからかなり逸脱した例である。5～9は同一個体。本例は波状線で、隆線などで意匠を描き、結節線及び小振りの円形竹管による刺突を充填する。文様帯は口縁部と胴部の二帯構成となっており、橙褐色に焼かれ、胎土は細砂・長石微細粒を含み、オリジナルを比較的忠実にコピーしている。11は隆線で楕円形区画文描き、押し引き文を充填する。本例は勝坂式の影響の強い阿玉台式かも知れない。12は口縁直下に2段R L施した縄文帯、その下に角押文、さらに隆線で区画した下端に刺し切り状の刺突を施す。

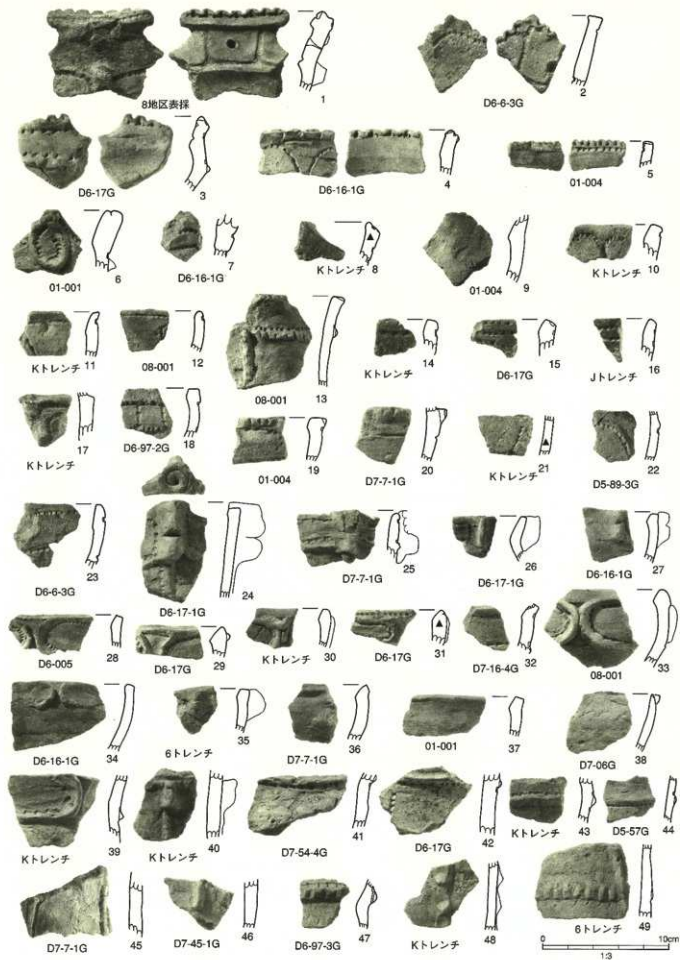


図2-1-34 中期前半阿玉台式 (1)

▲「雲母混入型 (以下同じ)」

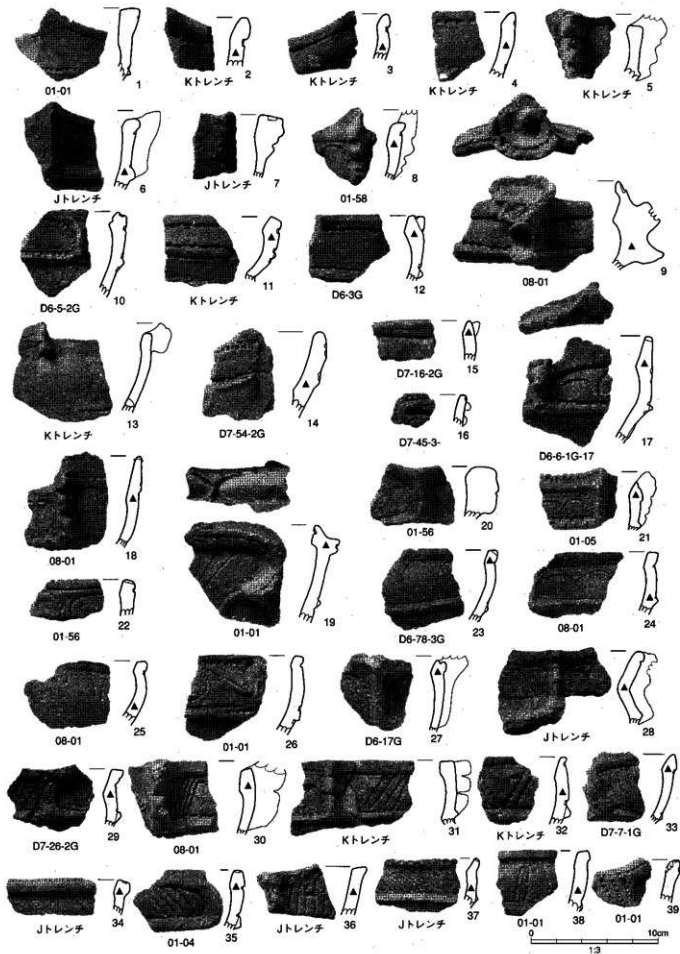


図2-1-35 中期前半阿玉台式(2)

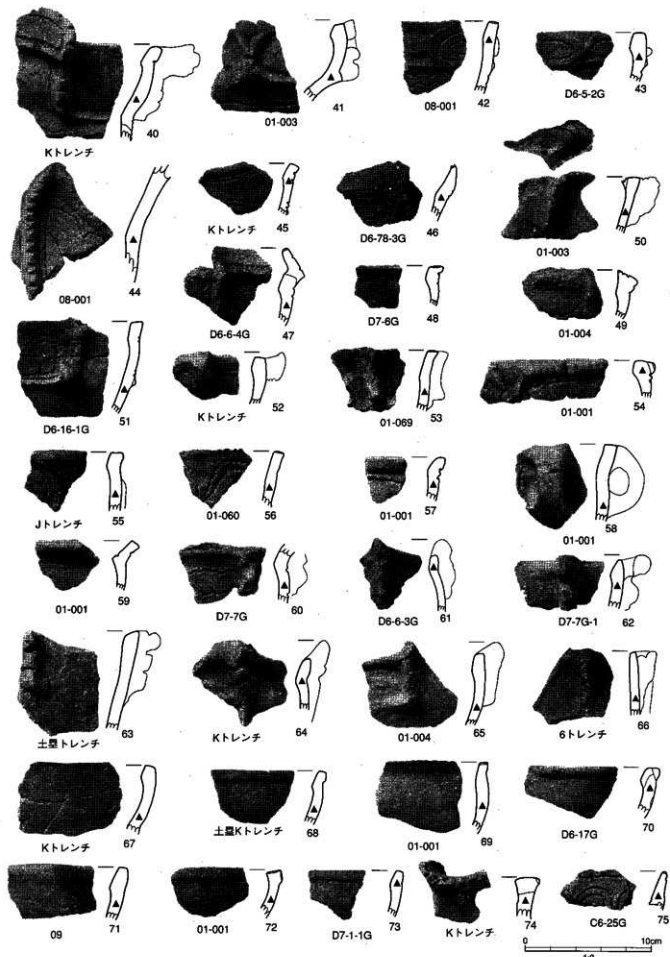


図 2-1-36 中期前半阿玉台式 (3)

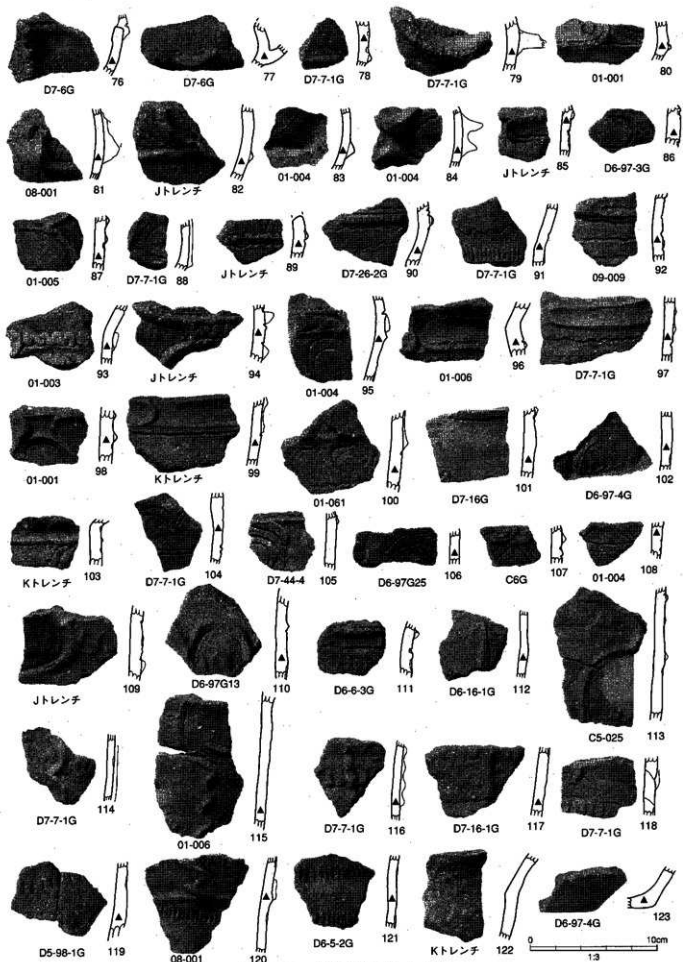


図2-1-37 中期前半阿玉台式(4)



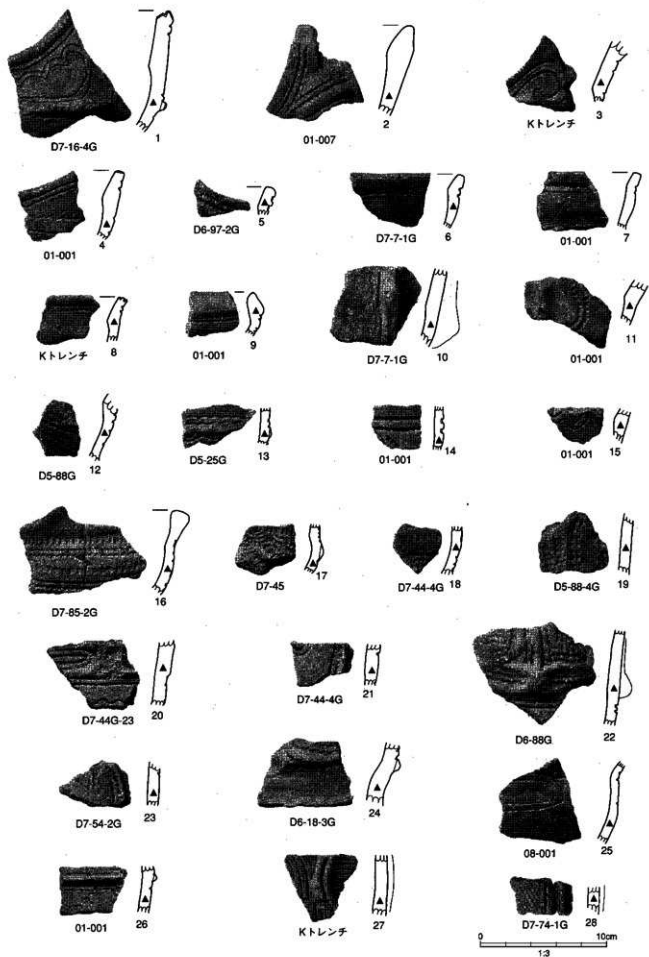


图 2-1-38 中期前半阿玉台式 (5)

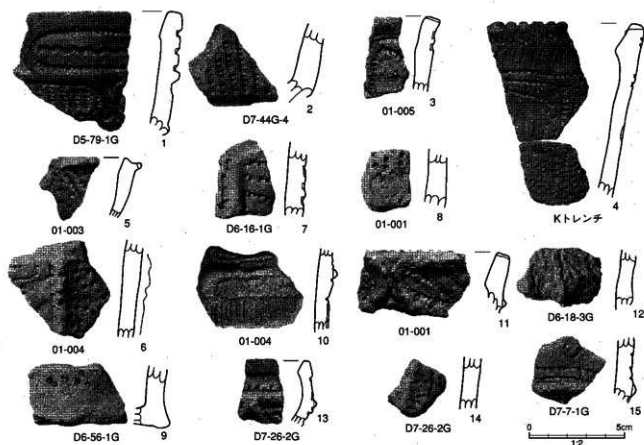


図2-1-39 中期前半階板式及び階板式系

中期後半 加曾利E式及びその周辺の土器が出土している。8-001とのからみを考慮し、大枠で括った上で記すことにしたい。

加曾利E式 (図2-1-40-1～25・29・30)

1～2はE1式。1は地文として3段LRを施し、隆線を貼付するかわりに2本1組の沈線で楕円形枠状文を描く。2は胴部片。地文は2段LRを施し、懸垂文を垂下させる。

3～5はE2式。いずれもキャリバー形深鉢の胴部片で、「磨消懸垂文」を施すもの。3は2段LRを地文とし、3本1組の沈線を描線として懸垂文を引き、描線内(画線内)を磨り消している。下端は疑口縁の部分で欠損しており、その破損面を磨っている。4は2段RL(0段多条)を地文とし、2本1組の描線で懸垂文を引いて描線内を磨り消す。5は2段RLを地文に、2本1組の描線で懸垂文を引いて描線内を磨り消すものである。

6～14はE3式。6はキャリバー形深鉢の口縁片である。口縁部文様帯の下端区画の隆線は、低平かつ形骸化している。7は瓢形深鉢で、浮線系意匠充填系土器。地文2段RL(0段多条)を施し、2本1組の隆線を貼付して意匠を描く。隆線は断面三角形で、両脇に浅いナゾリを施す。8は瓢形深鉢で、口縁下に凹線状の太沈線を廻らせる。地文は1段Lで、胎土は細砂目立ち、長石・スコリア細粒を含む。9も瓢形の深鉢。おそらくは地文施文のみの類型で、口縁下に無文部をはさんで、2段RL(0段多条)を施す。10はキャリバー形深鉢で、胴部のくびれが緩んだタイプである。2段RLを地文に、細く、かつ浅い沈線で懸垂文を引き、描線内を磨り消して「磨消懸垂文」を施す。

11～13は瓢形深鉢で、浮線系意匠充填系土器の胴部片。11は1段Lを地文に、隆線を貼付して意匠を描く。隆線断面はカマボコ形に近く、両脇にナゾリを加える。12は2条1組の隆線を貼付して意匠を描く。隆線断面はカマボコ形に近く、両脇にナゾリを加える。拓影図のみの印象からは、土器の向きが違

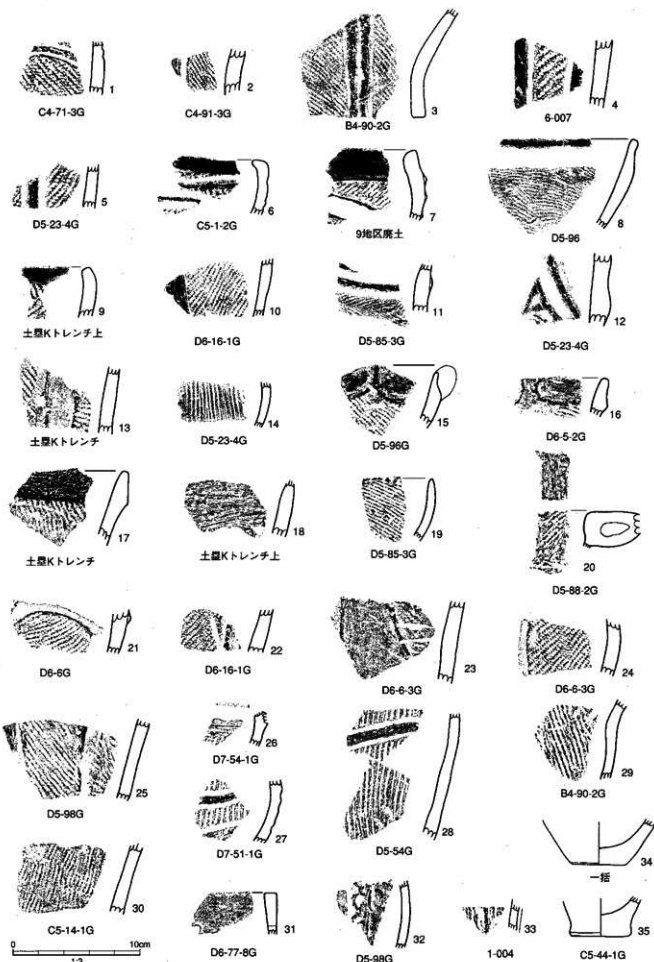


図2-1-40 中期後半加曾利E式

うという意見が出るかも知れないが、内法のカーブや器厚その他から判断しており、間違いではない。13は2段LRを地文に隆線を貼付して意匠を描く。隆線の断面形は三角形で細く、ナゾリは浅くなっており、地文側にはほとんど行われていない。14は条線を施した大形浅鉢の胴部片。器内面は良く磨かれている。

15~25はE4式。15は口縁片。小波状を呈し、器形的には瓢形深鉢の系譜引くと思われるもの。波頂下に小突起を付し、そこを起点に微隆起線を貼付する。この後2段LRを施文。16は口縁下に微隆起線を貼付して無文部を画する。17は波状線か。口縁下に微隆起線を貼付して無文部を画するもので、この後に2段RLを施文する。

18は口辺の破片で、拓本では不鮮明ながら、微隆起線を貼付している。口縁外面の粗いケズリが特徴的である。19は器形的には瓢形深鉢か。口縁直下より地文として1段Lを施文する。20は両耳壺の耳部ないしは深鉢の環状把手部分。地文として2段RL(0段多条)を施す。

21~25は瓢形深鉢の胴部片。21は微隆起線を貼付して意匠を描くもので、球抱文か。隆線貼付後、2段RLを施文。22は微隆起線を貼付してから2段RLを施す。23は器面が荒れている。24は微隆起線を貼付後、25は微隆起線を貼付して意匠を描き、1段Lを施文するもの。

29・30は地文を施したのみ。29は撚糸Lを縦位施文しており、隆帯を貼付した形跡が見られるため、西関東系のキャリバー形深鉢の胴部片の可能性はある。30は2段RLの斜回転施文。

#### 連弧文土器 (同図26~28)

3点は同一個体の、各々頸部及び胴部片。撚糸Lを縦位施文して地文とし、2本1組の沈線を描線として連弧文を描き、描線内を磨り消している。

#### 曾利系土器 (同図32~33)

いわゆる「重弧文土器」などがローカルナイズされたもの。32は蛇行隆帯を垂下させ、沈線を沿わせた胴部片。33は蛇行隆帯を垂下させ、竹管の内側で引いた沈線を沿わせたものである。

#### 鈔付有孔土器及び底部 (同図31・34・35)

31は鈔付有孔土器の口縁部。内外面ともケズリ後ミガキ。焼成前穿孔が認められる。胎土は長石・雲母・赤色スコリア含む。34はキャリバー形深鉢、35は瓢形深鉢の底部(「逆ランプシェード形」)。

後期~晩期 埴堀遺跡における縄文時代後期の出土土器は、決して多くはないものの、初頭~末葉に及び、細別型式はともかく後期初頭に極端に少ないという傾向がある。その一方で、後続する堀之内1式は少ないながらもまとまって出土した。晩期は前半に限り、ごく少数が出土している。

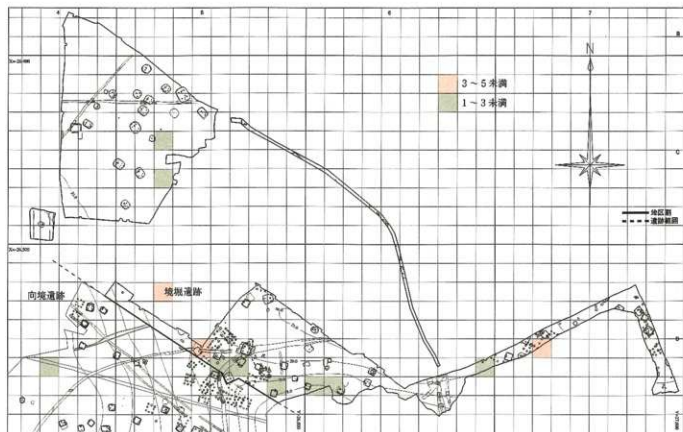
#### 称名寺式 (図2-1-40-1・2)

1は口縁片で、口唇端を欠く。口縁下に緩い段を有し、複合口縁状となる。2は沈線で意匠を描き、縄文を充填する。沈線は浅く、全体的にシャープさに欠けている。

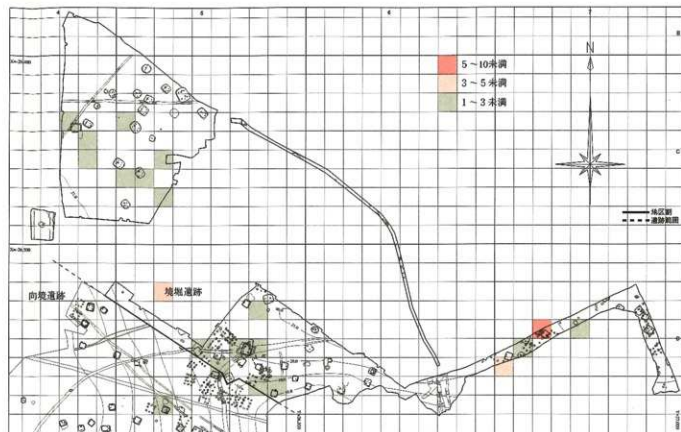
#### 堀之内式 (同図3~15)

3~5は口縁片。3は波状線で、口唇を凹線状に窪ませており、波頂下に首孔状の刺突を施し、ここを起点に沈線を垂下して単位文とする。4は平縁で、口縁下に無文部を形成し、1段Lを地文に浅く太い沈線で入組文的意匠を施す。以上2点は精製土器。5は2段LRを施した縄文系粗製土器。

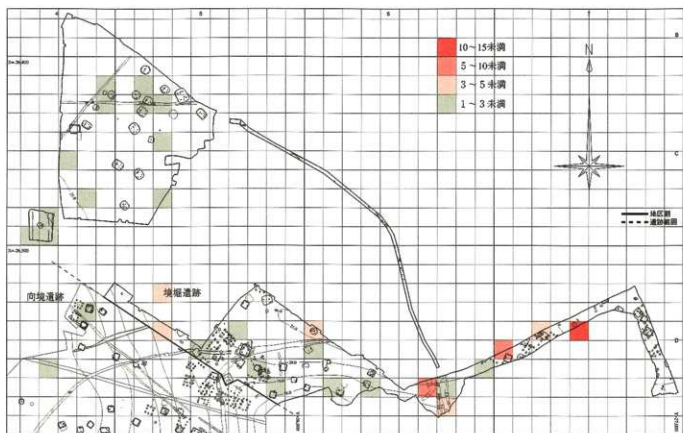
6~15は胴部片。6は2段LRを地文に、沈線で裏手文ないしそれに類した意匠を施す精製土器。7は2段RLを地文に沈線で意匠を施す。8は沈線で意匠を描くものであるが、器面が荒れており、地文は不明。9は斜行沈線を雑に施し、胎土に雲母細粒を含む。10は1段Lを地文に3本1組の沈線を引く。11は地文を持たず、半截竹管の裏面を用いて懸垂文及び蛇行沈線を垂下する。12は1段L、13は2段RL、15は2段LRを地文。14は2段RLを施文後、軽くミガキ。以上は縄文系粗製土器。



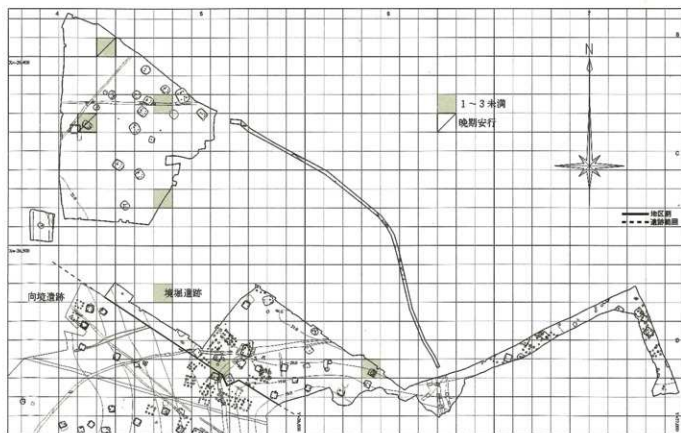
後期初頭称名寺式



後半中葉加曾利B式



後期前半堀之内式



後期・晚期安行式

图 2-1-41 堤根遺跡遺物包含層圖 (後期~晚期)

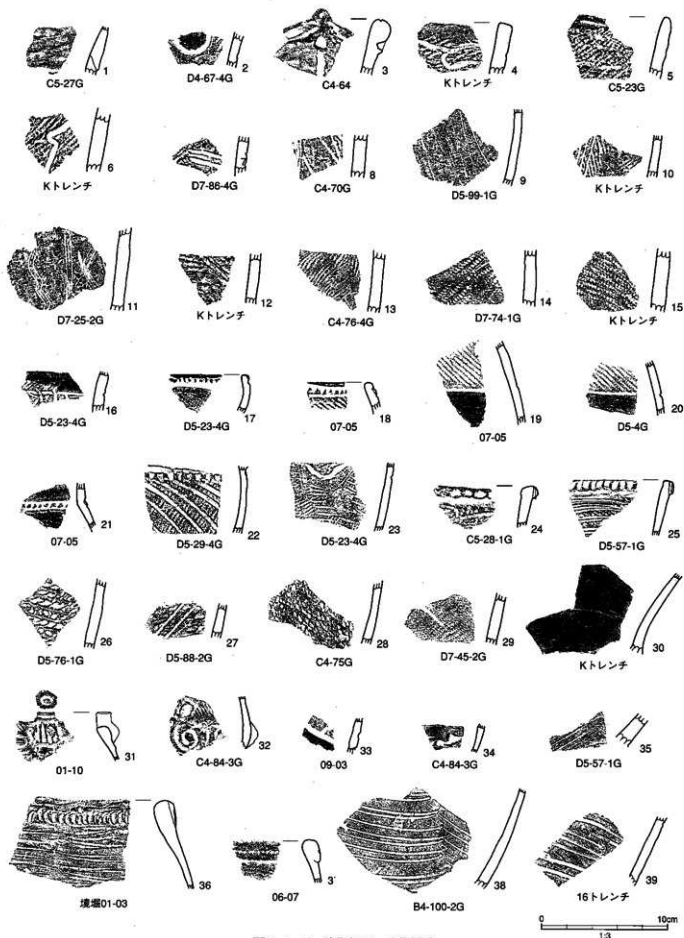


図 2-1-42 後期初頭～晩期前半

### 加曾利B式（同図16～30）

16・24・29・30はB 2式。16は頸部文様帯片。予め縄文部分に2段RLを転がし、沈線で区画後に磨消し、縦位の3列の弧線を引く。30は浅鉢ないし鉢の胴部。24は紐線文系粗製土器の口縁。地文縄文→紐帯貼付→紐帯上の押捺という工程。1条の内沈線を施す。29は縄文系粗製土器で2段LR。

17～23・25はB 3式。17の口縁部文様帯は単段連刻で、頸部は2段RLを施文。18～21は同一個体で甕形土器。18は口縁片で、口縁部文様帯は単段連刻で、頸部は2段RL施文。19・20は頸部片で、ともに下端区画が残存する。21は胴部片。くびれ部分に上下を沈線で面してキザミを施す。22は2RLを地文に斜沈線を引く。23は地文縄文に短沈線を充填し、上部には太沈線による主幹文様を描く。

25はB 3式、26～28はB 2～B 3式の紐線文系粗製土器。25は地文縄文→紐帯貼付→紐帯上の押捺。後期安行式（同図31・35・36・37）

31は2式の精製注口付土器。口唇上にキザミを施したボタン状の突起を付す。35は1式の台付浅鉢。密接した条線を施す。36～37は2式の紐線文系粗製土器。工程は条線→紐帯貼付→紐帯上の押捺。

晩期安行式（同図32～34・38・39）

32～34は精製土器。32は帯縄文に貼瘤、ここに渦巻状の沈線を施す。33は磨消縄文で意匠を施すもので、縄文部分は2段RLの細縄文。姥山2式の精製。34は彫刻的な描出法で、器内外面を研磨する。

38～39は姥山式に伴う粗製土器。斜方向の条線を施す胴部片。

### 2 石器

境場遺跡における石器は、その量こそ決して多くはないものの、剥片石器・礫石器とも各種のものが出土している。ここでは剥片石器・礫石器に分け、記すことにしたい。

#### 剥片石器（図2-1-43-1～13）

石鎌・剥片類及び石核を含む。1～5は石鎌。1は無茎凹基式で、先端を欠く。ていねいな両面調整で側縁は鋸歯状を呈する。黒曜石製。2は無茎凹基式で、完存品。基部の挟りが大きい。黒曜石製。3は無茎凹基式で、先端を欠く。両面調整で、黒曜石製。4も無茎凹基式で、先端を欠く。ていねいな両面調整で、黒曜石製。5は無茎平基式で、完存品。本例は五角形に近い形状をなす。

6・8～13は剥片。これが全てではない。このうち、6・8・9・11・12はRFに相当しよう。

7は石核で、完存品。背腹の二面に主要剥離作業面が存在する。黒曜石製。

#### 礫石器（図2-1-44-14～23）

半磨製石斧・敲石・ハンマーストーン・石皿・砥石を図化した。これが全てではない。14は半磨製石斧で、完存品。背面に自然面を残し、刃部の表裏面を部分的に研磨する。

15～17は敲石。15は側面を中心に、多面体状の敲打による使用面がある。17は先端に敲打痕、表裏に凹面をなす使用面あり。18～19はハンマーストーンである。ともに上下端に敲打痕がある。

純然とした磨石は16のみ。20～22は石皿。20は1/6程度の残存か。21は1/5程度の残存ながら再生品の可能性がある。明瞭な縁を作り出し、裏面に3個所の凹穴を穿つ。23は軽石を用いた砥石である。

### 3 土製品

境場遺跡における土製品は、土器片錘を中心に、土器片円盤及び土製挾状耳飾が出土している。

土器片錘 図2-1-45-1～図2-1-47-69は土器片錘で、その9割が阿玉台式土器を再利用している。分布図を見ると、8-001を除き、調査区東側の小支谷に面した緩斜面及び谷頭に集中が見られ、同エリアでは阿玉台式土器の出土も多く、土器片ともども最終的な廃棄の場所であった可能性がある。

土器片円盤 図2-1-48-1～6で、直径3.5～2.5cm大、周縁は磨れている。阿玉台式土器を再利用。

土製挾状耳飾 図2-1-48-7で、小片が1点出土した。これのみ純然とした土製品である。

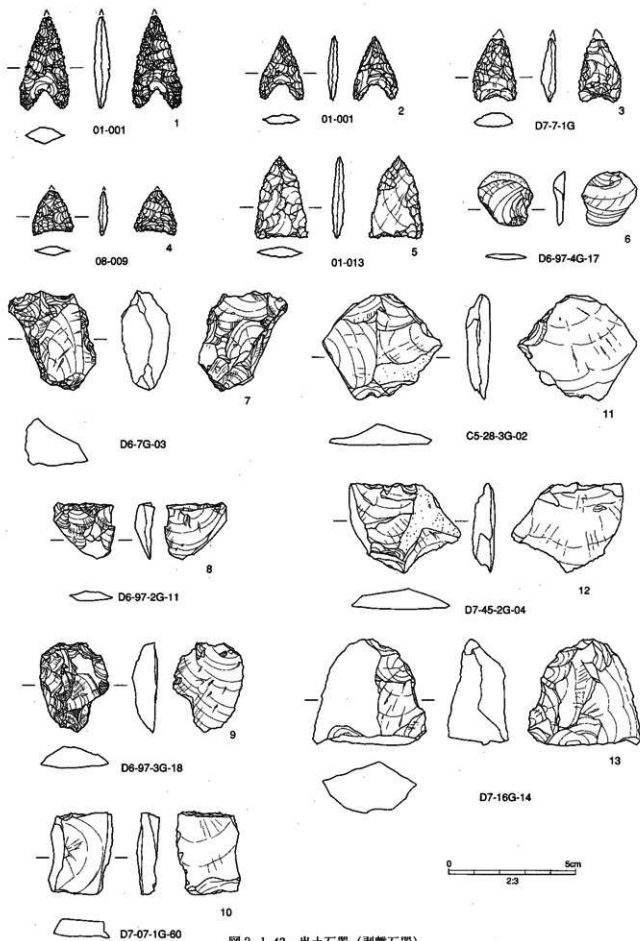


图 2-1-43 出土石器 (剥雕石器)



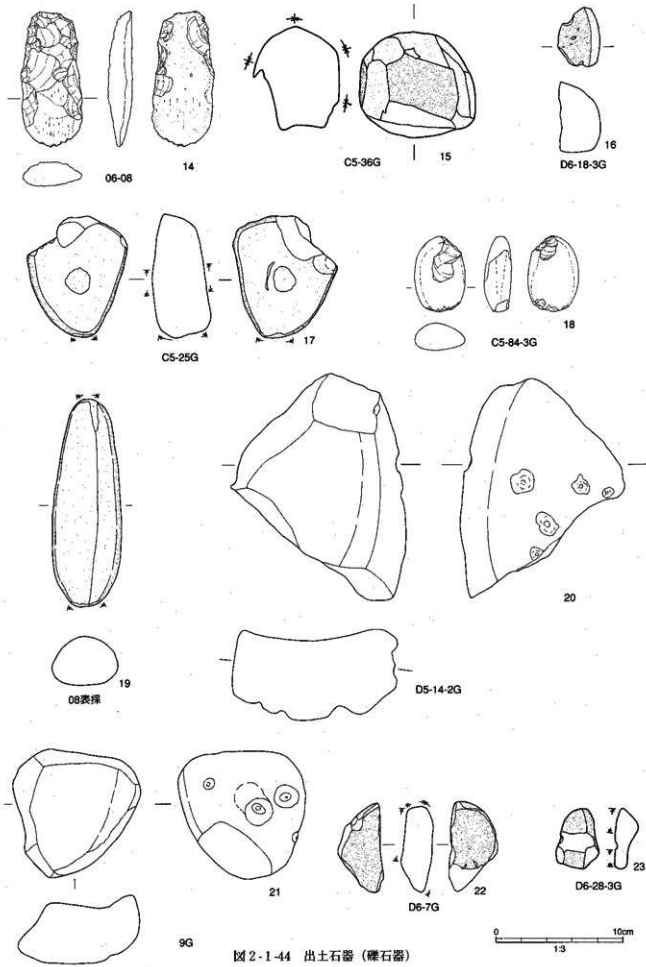


图 2-1-44 出土石器 (礮石器)

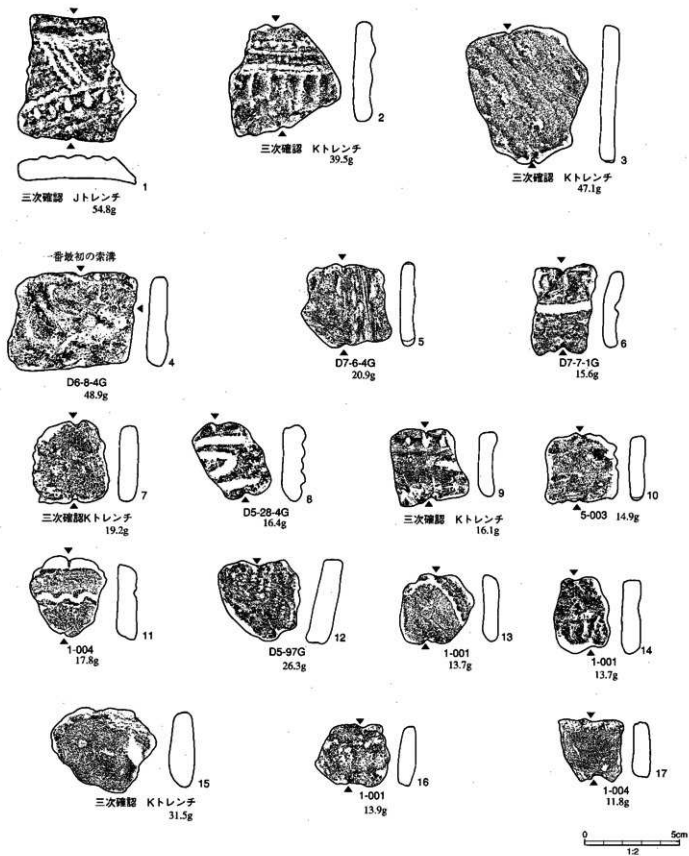


図2-1-45 出土土器片鍾(1)

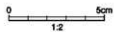
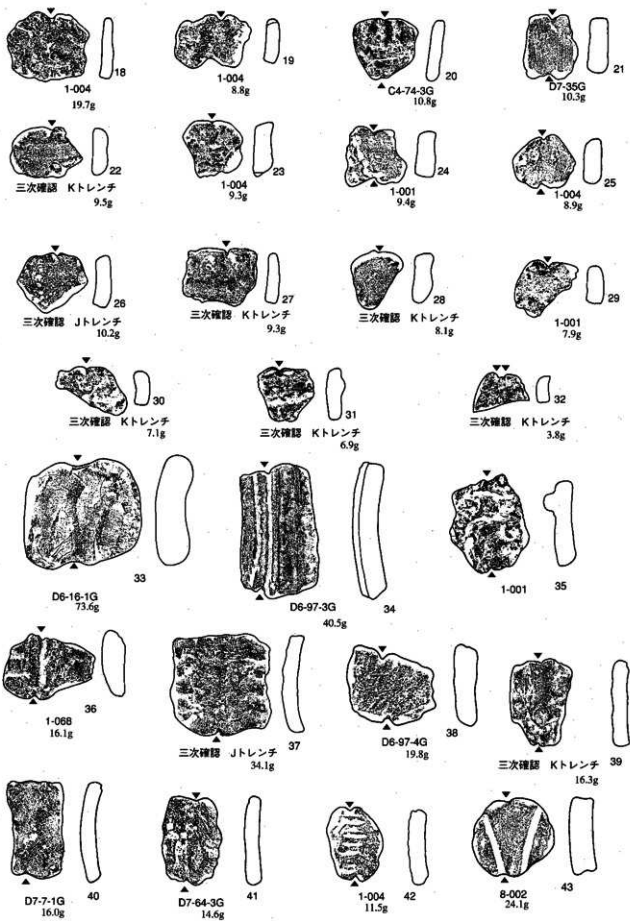


図2-1-46 出土土器片鏢(2)

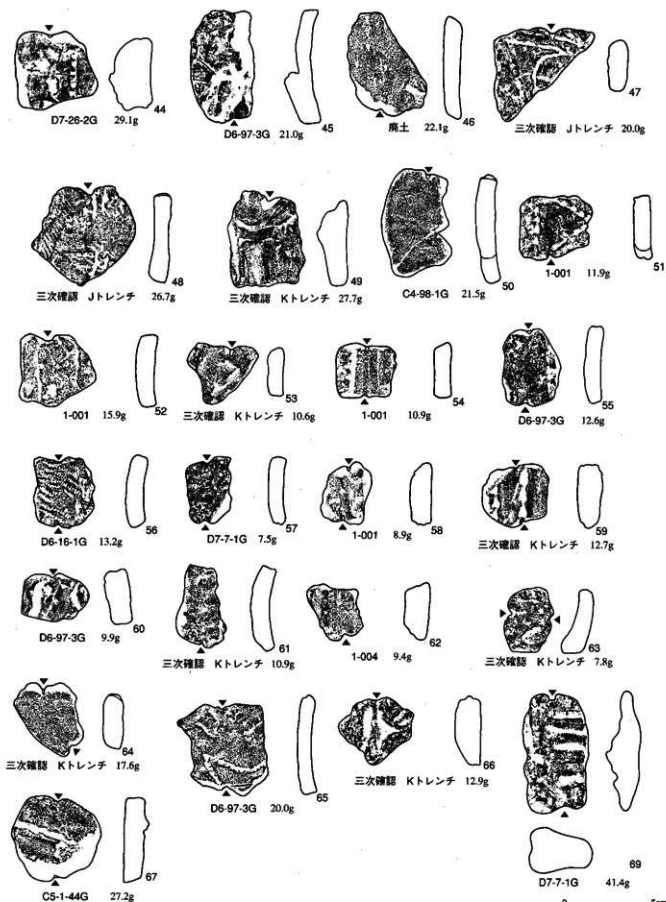


図2-1-47 出土土器片鏝(3)

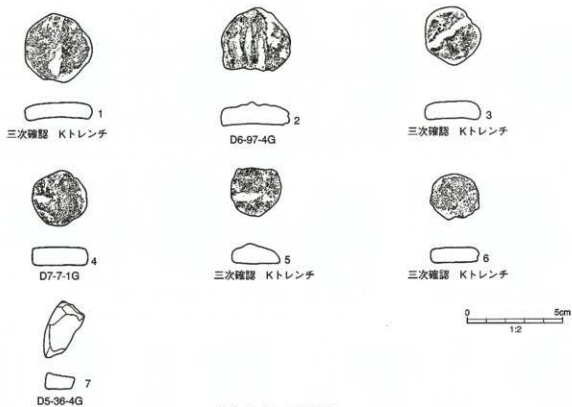


図 2-1-48 土製製品

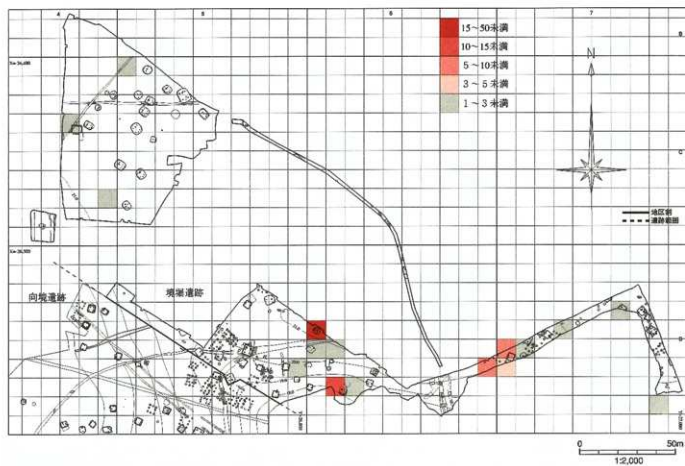


図 2-1-49 土器片鋪出土状況図

## 第2節 弥生・古墳時代

境掘遺跡の弥生・古墳時代については、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡が31軒、土坑3基、古墳時代後期の竪穴住居跡が1軒、検出された。

### 第1項 弥生時代後期～古墳時代前期

弥生時代後期から古墳時代前期については、時代区分上の問題も有り、敢えて時期区分をせず、弥生・古墳時代として報告する。検出された遺構は、調査区北側に集中する区域があり、集落の一部を形成していると思われる。また、調査区東側の道路状の細い調査区域においても断片的に数軒を検出している。未調査区域を考慮に入れても、北側の集落とは別の集落展開を想定できる。以下、個別報告に移る。各遺構の計測値等は、別に掲げた遺構一覧表等を参照されたい。(尚、弥生・古墳時代の竪穴住居跡については、調査上の不手際から土層断面図が未作成のものがあることをあらかじめお断りしておく。)

#### (1) 竪穴住居跡

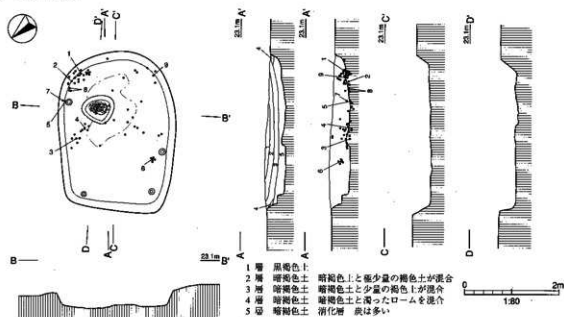


図 2-2-1 6-001

6-001

**検出地区** C4-69G。台地上位段丘の先端部から下位段丘に向かう緩斜面に立地する。他の弥生・古墳時代遺構とやや離れ、孤立して立地している。

**遺 構** 不整形の小型の住居跡である。床は、ロームの踏み固めた床で、住居跡中央部、炉の周辺で硬化面を検出している。壁もロームの壁で斜めに立ち上がっている。主柱穴、周溝は検出されなかった。炉は、住居跡北側長辺側に位置し、地床炉である。

覆土は色調を基本とし、5層に分層された。床面直上層、壁際から多量の炭化材を検出した。焼土の検出は無いものの、人為的な埋め戻しの後、自然堆積による埋没が考えられる。

**遺 物** 床面直上層から覆土下層を中心に少量(30点程度)出土。

**所 見** 出土遺物から、弥生後期の竪穴住居跡と判断した。栗谷遺跡A155と同様の器種構成が見受けられる。(1)と(2)が床面直上で共伴出土していることは、本遺跡を含む印旛沼南岸地区の当該時期の器種構成を考える上で示唆的である。また、床面直上から砥石と思われる石器が出土していることも金属器の存在を想定でき示唆的である。

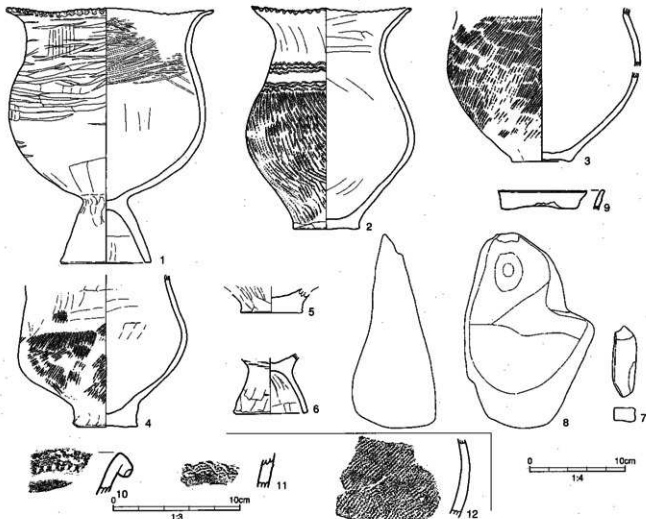


図 2-2-2 6-001

表 2-2-1 6-001遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 台付壺	口縁大きく外反 胴中位膨らみ頸部やや直線的 外面 口縁-押圧 頸部-胴下半-横ヘラケズリ後粗いヘラミガキ 下端-縦位のヘラケズリ 脚部-ヘラケズリ? 内面 口縁-胴上半 -横ナデ ヘラナデ後ヘラミガキ 下半-ヘラナデ	220×98×271	暗褐色	砂粒 白色粒	4/5	外面コゲ状付着 内面スス付着
2	弥生 壺	口縁外反 胴中位が膨らむ 外面 口縁-押圧 頸部-ヘラナデ 胴上半-下端-結節3段施文 階を置いて結節3段以下端まで附加糸縄文 内面 口縁-横ナデ 頸部-胴下半-ヘラナデ	173×70×238 最大径176	◎赤褐色 ◎暗褐色	砂粒	略定形	内外面スス付着
3	弥生 壺	球胴状 外面 胴上半-輪積痕 胴下半-下端-附加糸縄文 内面 胴部-ヘラナデ?	×73×(159)	◎赤褐色 ◎暗褐色	砂粒 白色粒	1/3	内外面スス及び コゲ状付着物
4	弥生 壺	胴部下半が膨れる 底部台上をなす 外面 胴上半-ヘラナデ 下半-附加糸縄文 下端-ヘラケズリ 内面 胴上半-下端-ヘラナデ	×65×(162)	◎赤褐色 ◎暗褐色	砂粒 白色粒	1/2	外面コゲ 内面スス付着
5	弥生 壺	球胴状 外面 胴下半-ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 剥離ヒビ割れ著しく不明	×62×(28)	◎暗赤褐色 ◎黒褐色	白色粒多	底部片	
6	土師器 台付壺	脚部やや内湾 外面 ヘラナデ 内面 ヘラナデ及びヘラケズリ	×70×(63)	暗褐色	砂粒 赤色粒 白色粒	脚部片	
7	石器 磁石	長さ56×幅18×厚さ10 重量20g				完形	



图 2-2-3 境掘遺跡 弥生·古墳時代遺構配置図



8	石器 砥石	長さ(155)×幅100×厚さ44 重量1230g	灰		略完形
9	土師器 甕	-X-X- 内面 横位のヘラミガキ	暗褐色	縦糸	口縁片
10	土師器 壺	-X-X- 折り返し口縁 口縁外反 内外面とも器面剥離著しく 詳細不明 外面 口縁下端を刺突	橙褐色		口縁片
11	弥生 壺	-X-X-	砂黒 砂橙褐色		頸部片
12	弥生 甕	-X-X- 外面 胴上半-RL縄文	砂黒褐色 砂暗褐色		胴部片

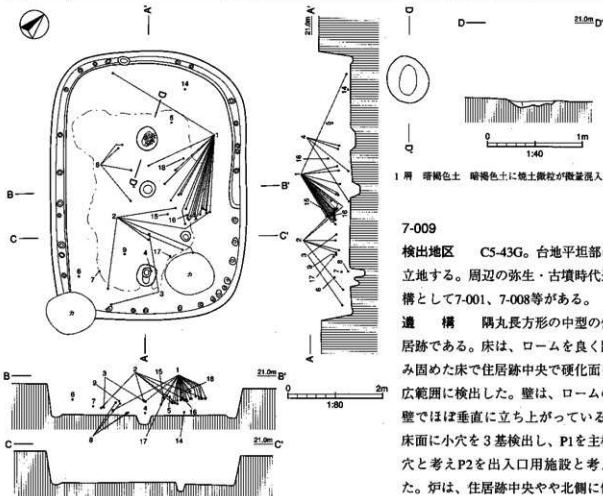


図2-2-4 7-009

覆土は色調を基本とし、概ね6層に分層され、人為的な埋め戻しの後、人自然堆積による埋没が進んだと考えられる。

**遺物** 床面直上～覆土上層にかけて、多量(240点程度)に出土した。また、紡錘車が比較的まとまって出土した。

**所見** 出土遺物から弥生時代後期の堅穴住居跡と判断した。出土土器について同様の様相をしている住居跡として6-001、栗谷遺跡A155等が挙げられる。また、南関東系の土器に混ざり、小片ながら縄文系土器も少量出土している。

#### 7-009

**検出地区** CS-43G。台地平坦部に立地する。周辺の弥生・古墳時代遺構として7-001、7-008等がある。

**遺構** 隅丸長方形の中型の住居跡である。床は、ロームを良く踏み固めた床で住居跡中央で硬化面を広範囲に検出した。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がっている。床面に小穴を3基検出し、P1を主柱穴と考えP2を出入口用施設と考えた。炉は、住居跡中央やや北側に位置し、地床炉である。

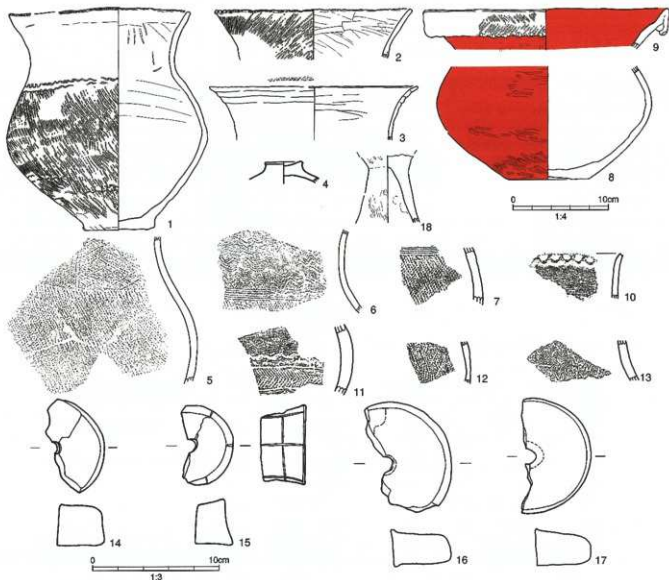


図 2-2-5 7-009

表 2-2-2 7-009遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	189×74×237 口縁やや内湾しつつ外傾 胴中位楕円状に膨らむ 外面 口唇→附加条縄文 胴部→ハラナダ 胴上半→筋節2段→附加条 縄文 中位とやや下半に結節縄文 他は附加条縄文 内面 横ナダ→ハラナダ	褐～ 暗褐色	砂粒 白色粒多	略定形	外面コゲ、 スス附着 内面スス附着
2	弥生 甕	(204)×-×(53) 外反する折り返し口縁 外面 口縁、口唇とも附加条縄文 内面 ナダ	橙～ 黒褐色	砂粒 白色粒	口縁片	
3	弥生 甕	(218)×-×(58) 口縁外反 外面 口唇→附加条縄文 輪積痕3段→ハラナダ 内面 ハラナダ	暗褐 色	砂粒	口縁片	
4	弥生 蓋	つまみ径40×残存高(22)	褐 良	緻密		
5	弥生 甕	-×-×- 外面 樽縁による縦区画内、格子目文充填→附加条縄文	暗褐 色	粗砂粒多		外面コゲ状 附着物
6	弥生 甕	-×-×- 外面 柳指波状文→樽縁横走文→附加条縄文 内面 ハラナダ	褐 色	粗砂粒多	胴部片	

7	弥生 壺	-X-X- 外面 櫛栞横文による区画を施し、以下RL縄文	④黒褐 砂褐 良	緻密	胴部片	
8	弥生 壺	-X 87×(120) 底部やや上げ底 外面 胴下半～下端ヘラミガキ 内面 器面の剥離が著しく調整痕不明	明褐 悪	砂粒 白色粒	胴部～ 底部片	
9	弥生 壺	(256)×-X(42) 複合口縁 断面三角状 外面 口縁-羽状縄文、下端交互に押圧 頸部ヘラミガキ 内面 ヘラミガキだが器面の剥離著しく残存は一部	橙褐 悪	砂粒 雲母微	口縁～ 頸部	赤彩 頸部外面 内面
10	弥生 壺	-X-X- 外面 口縁-櫛状工具による押圧	④淡褐 砂褐 良	緻密	口縁片	
11	弥生 壺	-X-X- 外面 S字状結節文2段、RL、LR縄文による羽状縄文を沈線で区画			胴部片	赤彩 胴上半
12	弥生 壺	-X-X- 外面 L縞系	④暗褐 砂褐 良	緻密	胴部片	
13	弥生 壺	-X-X- 外面 3本歯による櫛栞波状文	④暗褐 砂褐 良	砂粒少	頸部片	
14	土製品 紡錘車	-X-X-				
15	土製品 紡錘車	上径(34)×下径(42)×厚さ24 重量23.3g			1/2	縦割「口」
16	土製品 紡錘車	上径(60)×下径(66)×厚さ19 重量46.9g			1/2	
17	土製品 紡錘車	上径(56)×下径(58)×厚さ19 重量42.4g			1/2	
18	弥生 高坏	-X-X(73) 胴部上半の周きは小さい 外面 坏部ヘラミガキ 脚部一ハケの後ヘラミガキ 内面 頸部ナテ	明褐 悪	砂粒	胴部片	赤彩 外面 (残存は一部)

## 6-005

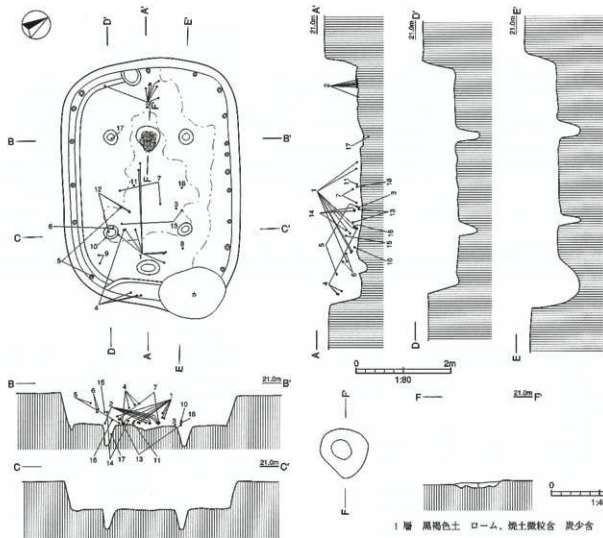
**検出地区** C4-84G。台地平坦部に立地する。周辺の弥生・古墳時代遺構として6-009、6-004等がある。

**遺構** 隅丸長方形の中型の住居跡である。床は、ロームの床で良く踏み固められている。住居跡中央部に硬化面を広く範囲に検出している。中央部に関しては、他より若干、凹んでいる。壁は、ロームの床で、ほぼ垂直に立ち上がっている。典型的な4本柱の堅穴住居跡である。P5は出入口施設で、P5の手前にある凹みは、恐らく貯蔵施設と思われる。炉は、住居跡中央やや北側に位置し、地床炉である。周溝は住居跡西側で一部検出している。

覆土は色調を基本とし、概ね8層に分層された。床面直上で焼土を検出しており、人為的な埋め戻しの後、自然堆積による埋没が進んだと考えられる。但し、覆土上層でも焼土を若干検出していることから、埋没の途中で火を焚く行為が行われたと考えられる。

**遺物** 覆土中から比較的多量(190点程度)出土した。7-009、6-002同様、小片ながら櫛栞文土器が出土している。

**所見** 古墳時代の土師器と思われる遺物の出土もあるが、出土遺物及び出土状況等から、弥生時代後期の堅穴住居跡と判断した。



1 層 黒褐色土 ローム、焼土微粒含 炭少含

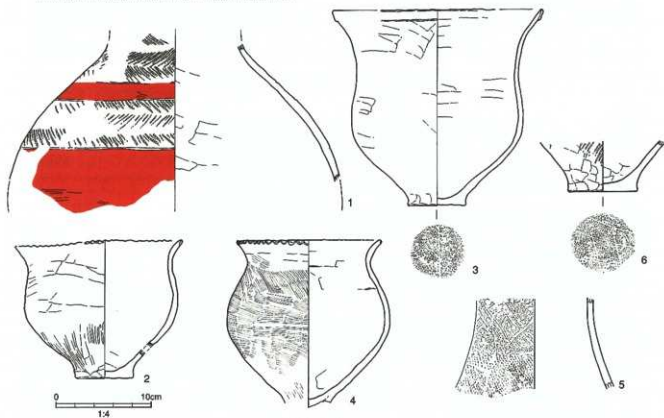


图 2-2-6 6-005

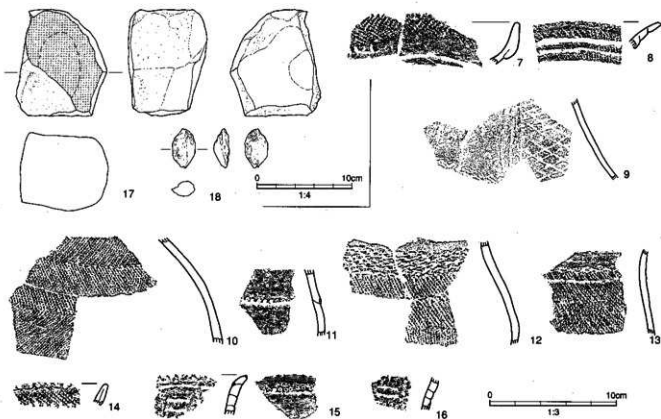


図 2-2-7 6-005

表 2-2-3 6-005遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 壺	—×—(193) 胴部楕円状に膨らむ 外面 頸部一羽状縄文を沈線で区画 沈線間はヘラミガキ 胴下半→ヘラミガキ 内面 ヘラナダと思われるが器面の剝離が著しく残存は一部	橙褐色 黒	赤色土片 褐色土片	頸部～ 胴部片	
2	弥生 甕	(174)×59×145 口縁外反し広口 頸部やや括れ中位で張り出した胴部は下半で傾斜してすばまる 外面 口縁→押圧 頸部～胴上半→ヘラナダ 胴下半→ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 口縁→横ナダ 頸部～胴部→ヘラナダ	暗褐色 青	砂粒 白色粒多	3/4	赤彩 外面コケ状附着物
3	土師器 甕	(220)×60×207 折り返し口縁は外反し広口 頸部ならだかに括れ、胴下半に膨らみを持つ 外面 口縁→横ナダ 頸部、胴部→ヘラナダ 胴下端→ヘラケズリ 底部→木炭痕 内面 口縁→頸部→ヨコナダ 胴部→ヘラナダ	砂黒褐色 橙褐色 西黒褐色		1/2	
4	弥生 内付壺	(148)×—×(178) 口縁外反 頸部「く」の字状 胴やや上半に膨らみを持つ 外面 口縁→押圧 頸部→ヨコナダ 胴部→ハケ 内面 口縁→頸部→横ナダ 胴上半→ヘラナダ	橙褐色 青	砂粒 白色粒	1/3	外面コケ状スス附着
5	弥生 甕	—×—×72 外面 口縁→附加条縄文(一部) 頸部→櫛排の格子目文→附加条縄文 内面 頸部→ヘラナダか?	茶褐色 黒	砂粒多	頸部片	器面の剝離多
6	弥生 甕	—×70×(53) 外面 胴下半→附加条縄文 胴下端→ヘラケズリ 底部→木炭痕 内面 胴下半→ヘラナダ	砂暗褐色 西黒褐色 青	砂粒	胴部～ 底部片	内面スス附着
7	弥生 壺	—×—×— 折り返し口縁 外面 口唇→縄文原体の押圧 口縁→RLLRの羽状縄文 口縁下縁一部分的に刻み目を入れる	橙褐色 青		口縁片	
8	弥生 甕	—×—×— 口縁外反 輪積痕 外面 口唇、口縁ともし熟点を施文後、附加条縄文条を施文 内面 丁寧なミガキ	砂黒褐色 砂暗褐色 良	赤色スコ リア少	口縁片	
9	弥生 壺	—×—×— 外面 櫛排による縦区画に格子目文→結節2段→附加条縄文か? 内面 器面の剝離が著しく不明	橙褐色 黒	砂粒多	頸部片	

10	弥生 壺	-X-X- 外面 胴上半-附加条縄文による羽状縄文	砂暗赤褐 砂橙褐 良		胴部片	胴部外面は全面的に赤彩か?
11	弥生 甕	-X-X- 外面 胴上半-輪積痕の下端を竹管による連続刺突によって裝飾的処理を行う 内面 ヘラミガキ	砂暗褐 砂橙褐 良	石英少 長石少 砂粒少	胴部片	
12	弥生 甕	-X-X- 外面 頸部-S字状結節で区画し以下胴部をRL縄文 内面 ミガキ	砂黒褐 砂褐 良	石英少 長石少 赤色スコリア微	頸部- 胴部片	
13	弥生 甕	-X-X- 輪積痕が痕跡的に残る 外面 頸部-S字状結節で区画し以下胴部を附加条縄文 内面 ミガキ	砂褐 砂橙褐 良		胴部- 胴部片	
14	弥生 壺	-X-X- 折り返し口縁 外面 口唇-附加条縄文 口縁下端-竹管による連続刺突 内面 ヘラミガキ	砂褐 砂暗赤褐 良		口縁片	
15	弥生 甕	-X-X- 口縁外反 小波状を呈する 外面に輪積痕、内面は最上段のみ輪積痕残り下端に竹管による連続刺突で裝飾的処理を行う 外面 口唇-棒状工具の押圧で小波状口縁の效果を出す 口縁-部分的に輪積痕を指頭によってナゲ消す 内面 ナゲ	黒褐 良	砂粒少	口縁片	
16	弥生 甕	-X-X- 外面 頸部-輪積痕を部分的に指頭によってナゲ消す 輪積最上段を竹管による連続刺突 内面 ミガキ	砂暗褐 砂橙褐 良	砂粒少	頸部片	NO.9と同一體
17	石器 磨石	長軸91×短軸72×厚さ57 重量471.8g 本来の形状不明 全体に研磨痕を持ち、特に表面は中央部近くが凹む 割れ面にも弱い研磨痕が見られるが本来は石皿的機能?			1/2	
18	石製品 甕子	長さ41×幅24×厚さ16 重量2.7g 種子形を呈する 使用痕は認められない 用途不明			完形	

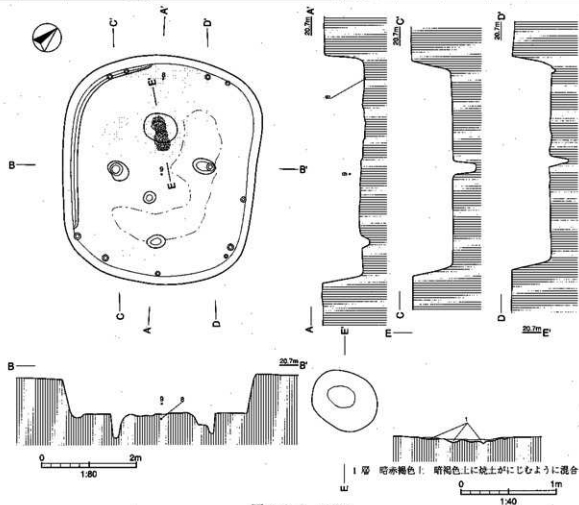


図 2-2-8 6-002

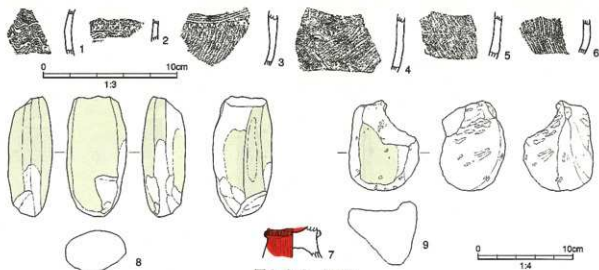


図 2-2-9 6-002

表 2-2-4 6-002遺物観察表

(単位mm)

No	種別	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	-×-×- 外面 頸部-4本歯による櫛描波状文		④黒褐 ⑤橙褐 ⑥青		頸部片	
2	弥生 甕	-×-×- 外面 頸部-櫛描波状文 胴上半-附加条縄文か?		④黒褐 ⑤橙褐 ⑥青		頸部片 胴部片	NO.1と同一個体か?
3	弥生 甕	-×-×- 外面 頸部-櫛描横走文 以下附加条縄文		④黒褐 ⑤橙褐 ⑥青		頸部- 胴部片	
4	弥生 甕	-×-×-		④黒褐 ⑤橙褐 ⑥青	粗く石英 長石 白 色砂粒少	胴部片	
5	弥生 甕	-×-×- 外面 胴上半-L捻糸		淡褐 青		胴部片	
6	弥生 甕	-×-×- 外面 胴上半-附加条縄文		④黒褐 ⑤橙褐 ⑥青	緻密	胴部片	
7	弥生 高坏	-×-×(33) 外面 脚部接合部-刻みを加えた突起貼付 脚部-ヘラミガキ 内面 ヘラナデ		橙褐 青	砂粒多 雲母	脚部	赤彩-坏部底面・脚部外面(突起上にも)
8	石器 磨石	長軸(95)×短軸47×厚さ32 重量195.7g 長楕円形を呈する 全面に研磨痕 片面の一部に長さ約50mm、幅3~7mm程の溝状の凹 みがあり砥石的な使用も考えられる					略完形
9	石製品 軽石製品	長さ96×幅73×厚さ64 重量60.4g 三角状を呈する 表面一面のみ使用痕が認められる					断片

6-002

検出地区 C5-8G。台地平坦部に立地する。周辺の弥生・古墳時代遺構として6-009、6-004等がある。

遺構 小判形の小型の住居跡である。床は、ロームの床で良く踏み固められている。住居跡中央部、やや東側に硬化面を検出している。壁は、ロームの床で、ほぼ垂直に立ち上がっている。主柱穴は、住居跡中央で2本検出している。炉は、住居跡中央からやや北側に位置し、地床炉である。周溝は住居跡西側で一部検出している。

覆土は色調を基本とし、概ね4層に分層された。床面直上層から焼土を検出しており、人為的な埋め戻しの後、自然堆積による埋没が考えられる。

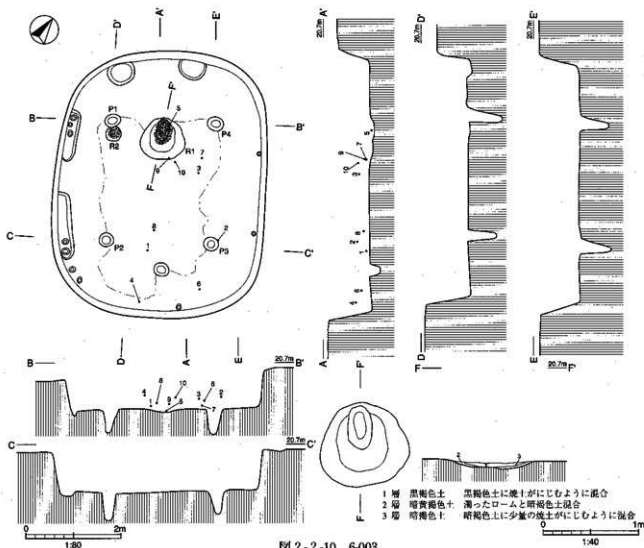


図 2-2-10 6-003

**遺物** 覆土中から小破片が少量(10点程度)出土したのみであった。小片ながら埴輪系土器が出土している。

**所見** 出土遺物から、弥生時代後期の竪穴住居跡と判断した。2本柱で一部周溝を検出した竪穴住居跡の類例として栗谷遺跡A075が挙げられる。

#### 6-003

**検出地区** C6-14G。台地平坦部に立地する。周辺の弥生・古墳時代遺構として6-002、6-004等がある。

**遺構** 小判形の中型の住居跡である。床は、ロームの床で良く踏み固められている。住居跡中央部に硬化面を広範囲に検出している。壁は、ロームの床で、ほぼ垂直に立ち上がっている。典型的な4本柱の竪穴住居跡である。炉は、2基検出されている。R1は、住居跡中央やや北側に位置し、1段テラスを有した地床炉である。R2はP1付近から検出され、R1同様の地床炉である。R1を主体的に使用し、R2は補助的に使用したものと思われるが、R2に関しては、主柱穴に近すぎることも有り、使用実態については、尚、検討を要するだろう。周溝は住居跡西側で一部検出している。

覆土は色調を基本とし、概ね7層に分層された。自然堆積による埋没が考えられる。

**遺物** 覆土中から小破片を中心に少量(80点程度)出土したのみであった。7-009同様、小片ながら埴輪系土器が出土している。

**所見** 出土遺物から、弥生時代後期の竪穴住居跡と判断した。炉を2基持つ住居跡として本遺跡では、6-009、7-001、7-006、7-003が類例として挙げられる。



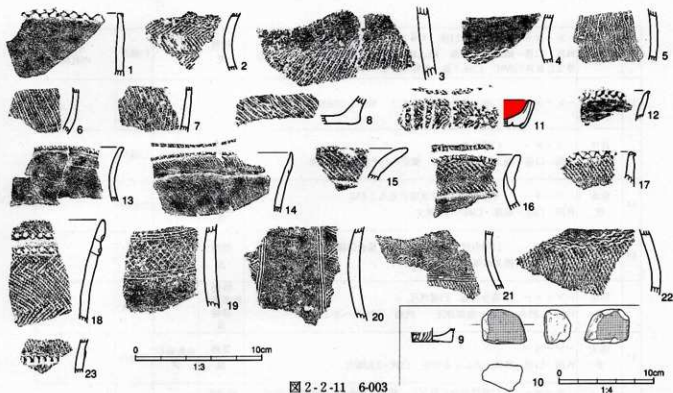


図 2-2-11 6-003

表 2-2-5 6-003遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	-X-X- 口縁傾 口唇に棒状工具による交互押圧を行い、小波状の効果を出す 内外面ともハケ調整後ミガキ	黒褐 良	緻密	口縁片	
2	弥生 壺	-X-X- 外面 R.L.R.L 縄文による羽状構成 下端をS字状結節文数段で区画	淡褐 普		頸部片	
3	弥生 壺	-X-X- 外面 頸部一無紋 胴上半一附加条縄文 内面 ミガキか?	淡褐 普	石英長石 白色砂粒 少	胴部片	内外面ミガキ後 赤彩か? 器面剥 離の為詳細不明
4	弥生 甕	-X-X- 外面 横位のハケ調整後、頸部下端をS字状結節文数段で区画 内面 横位のハケ調整	◎黒褐 ◎橙褐 良	緻密	頸部片	NO.13と 同一個体か?
5	弥生 甕	-X-X- 外面 胴上半-L器系?	黒褐 良	緻密	胴部片	
6	弥生 甕	-X-X- 外面 胴上半一附加条縄文	黒褐 良		胴部片	
7	弥生 甕	-X-X- 外面 胴上半一附加条縄文	◎黒褐 ◎暗褐	白色砂粒 少	胴部片	
8	弥生 甕	-X-X- 外面 胴下端一附加条縄文 底部一本葉痕	◎褐 ◎淡褐 普	砂粒多	底部片	
9	弥生 甕	-X-X- 外面 胴下半一丁寧な縦位のヘラミガキ 底部一ヘラミガキ	◎橙褐 ◎黒褐 良	緻密	底部片	
10	石製品 軽石製品	長さ36×幅43×厚さ27 重量9.9g 台形状を呈する 表裏面に使用痕が認められる			断片	

11	弥生 甕	-X-X- 折り返し口縁 大きく外反後直線的に立ち上がる 外面 口唇-RL縄文 口縁-RL.LRの羽状縄文施文後棒状浮文を貼る 浮文に原体の押圧 L口縁下端-原体の押圧 内面 ヘラミガキ	橙褐色		口縁片	赤彩 内外面
12	弥生 甕	-X-X- 口唇に原体の押圧を行う 輪積痕が痕跡的に残る			口縁片	
13	弥生 甕	-X-X- 口縁外反 外面 口唇-縄文施文 内面 横位のハケ調整後ミガキ	黒褐色 良	緻密	口縁片	
14	弥生 甕	-X-X- やや外反し直立気味に立ち上がる 外面 口唇-黒体 口縁-RL縄文	◎黒褐色 ◎橙褐色 良	緻密	口縁片	
15	弥生 甕	-X-X- 口縁外反 下側に後を持ち複合口縁の効果を出す 外面 L口唇-縄文原体 口縁-L燃系?	橙褐色 良		口縁片	
16	弥生 甕	-X-X- 複合口縁 口縁外反 外面 L燃系 口唇-原体押圧 内面 丁寧なヘラミガキ	◎橙褐色 ◎黒褐色 ◎赤褐色 良		口縁片	
17	弥生 甕	-X-X- 外面 口唇-棒状工具による押圧 口縁-RL縄文	黒褐色 良	白色砂粒 少	口縁片	
18	弥生 甕	-X-X- 口縁緩やかに外反し、輪積1段を残し裝飾的にデザイン する 口唇に縄文を施文 口唇直下からRL.LRの羽状縄文2段施文 輪積痕の下端と口縁下端をそれぞれ竹管による連続刺突	◎淡褐色 ◎橙褐色 良	白色砂粒 少	口縁片	
19	弥生 甕	-X-X- 外面 胴部-篩状工具による格子目文を施文上下を3本歯による櫛指 横走文による区画 胴上半-無紋 内面 ミガキか?	褐色 良	石英長石 白色砂粒 少	胴部片	内外面ミガキ後 赤彩か? 器面深 彫の為詳細不明
20	弥生 甕	-X-X- 外面 3本歯の櫛状工具による縦区画を行い区画内を櫛指による格子目 文を充填する 内面 剥離著しく不明	橙褐色 良	粗砂粒多	胴部片	
21	弥生 甕	-X-X- 全体的に丁寧なミガキを行い、胴部は附加条縄文 外面 胴上端を施文後4本歯による櫛指横走文で区画後、胴部に櫛指波 状文を施文 内面 ハケ調整後ミガキ	◎褐色 ◎橙褐色 良	緻密	胴部片	
22	弥生 甕	-X-X- 外面 胴部にRL縄文を施文後胴上端をS字状結節文3段による区画 内面 ミガキ	◎黒褐色 ◎褐色 良		胴部片	
23	弥生 甕	-X-X- 外面 ヘラ状工具による押し引き気味の連続刺突による区画を行う 胴上部-L燃系か?	暗褐色 良		胴部片	

#### 6-004

**検出地区** C5-6G。台地平坦部に立地する。周辺の弥生・古墳時代遺構として6-005、6-010等がある。  
**遺 構** 小判形の中型の住居跡である。床は、ロームの床で良く踏み固められている。住居跡中央部に硬化面を広範囲に検出している。壁は、ロームの床で、ほぼ垂直に立ち上がっている。典型的な4本柱の堅穴住居跡である。また、P6、P7は貯蔵穴と考えられる。炉は、住居跡中央やや北側に位置し、地床炉である。周溝は住居跡長辺側で一部検出している。

覆土は色調を基本とし、概ね4層に分層された。住居跡東側から焼土を検出しており、人為的な埋め戻しの後、自然堆積による埋没が考えられる。

**遺 物** 覆土中から小破片を中心に少量(80点程度)出土したのみであった。弥生土器と古墳時代初頭の土師器が混在する状況で出土していた。また、覆土中から墨書土器も2点出土した。

**所 見** 古墳時代の土師器と思われる遺物の出土もあるが、出土遺物及び出土状況等から、弥生後期の堅穴住居跡と判断した。

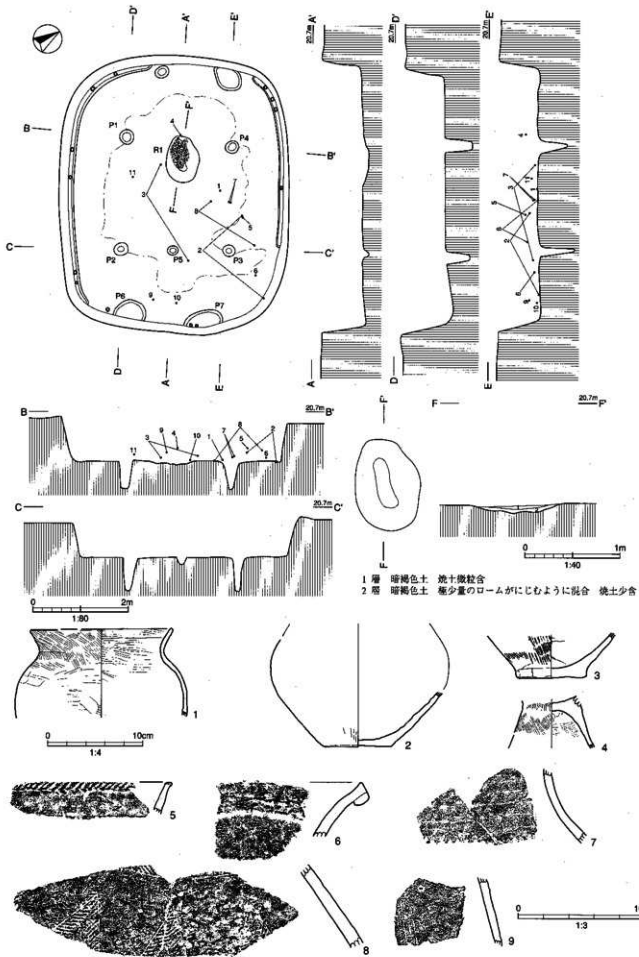


図 2-2-12 6-004

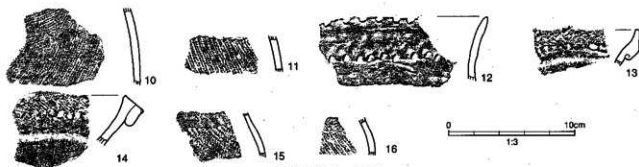


図 2-2-13 6-004

表 2-2-6 6-004遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 或 形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 甕	(148)××(93) 口縁やや外反 頸部緩やかな「く」の字状 外面 口縁→ハケ後一部横ナデ 胴部、胴上半→ハケ後ヘラナデ 内面 口縁、頸部→ハケ 胴上半→ヘラナデ	暗褐色	砂粒 白色粒		
2	弥生 壺	—×67×(130) 胴部算盤玉状の彫らみを呈する。内外面とも器面の剝離摩耗が著しく残 存はごく一部 外面は恐らくヘラミガキと思われるが内面は不明	橙褐色	粗砂粒 橙色粒多	胴～ 底部片	
3	弥生 甕	—×(68)×(48) 外面 胴下半→附加条縄文 ヘラケズリ 内面 胴下半→ヘラナデ	⑤暗褐色 ⑥暗褐色	砂粒 橙色粒	胴～ 底部片	内面スス付着
4	土師器 付合甕	—×—×(55) 外面 接合部ヘラケズリ 胴部→斜位のハケ 内面 接合部ヘラケズリ 胴部→横位のハケ	⑤暗褐色 ⑥暗赤褐色	砂粒 白色粒	胴部片	
5	弥生 壺	—×—×— 口縁やや外反 外面 口縁→縄文原体による押圧	⑤黒褐色 ⑥所屬良	白色砂粒 石英長石 赤色スコ リア	口縁片	
6	弥生 壺	—×—×— 折り返し口縁 口縁外反 外面 口縁→RL縄文 頸部→縦位のヘラミガキ	淡褐色 良	砂粒少	口縁片	
7	弥生 壺	—×—×— 口唇外反 輪襷3段が痕跡的に残る 外面 口唇→外側から縄文原体の押圧 頸部→横位のヘラケズリ	⑤黒褐色 ⑥暗褐色	石英 長石少	胴部片	
8	弥生 壺	—×—×— 外面 頸部→RL縄文を沈線で区画 胴上半→RL縄文を沈線で区画し副 歯文を構成	⑤赤褐色 ⑥暗褐色	砂粒多	底部～ 胴部片	赤彩 外面
9	弥生 壺	—×—×— 外面 胴上半→L燃糸	⑤暗褐色 ⑥黒褐色 良		胴部片	
10	弥生 壺	—×—×— 外面 胴上半→附加条縄文による羽状構成か?	⑤暗褐色 ⑥黒褐色 良		胴部片	
11	弥生 壺	—×—×— 外面 胴上半→附加条縄文	⑤暗褐色 ⑥黄褐色 良		胴部片	
12	弥生 壺	—×—×— 口唇外反 輪襷3段が痕跡的に残る 外面 口唇→棒状工具による押圧 口縁下端→輪襷の最下段、下端を 棒状工具に燃る刺突	⑤黒褐色 ⑥黄褐色 良		口縁片	外面にスス状の 炭化物付着
13	弥生 壺	—×—×— 折り返し口縁 外反後直立する 外面 口縁→LR、RL縄文による羽状縄文 口縁先端部→原体による押圧 頸部→縦位のヘラミガキ 内面 器面剝離の為詳細不明	⑤暗褐色 ⑥赤褐色		口縁片	赤彩(外面 器 面剝離の為詳細 不明)
14	弥生 壺	—×—×— 折り返し口縁、外反の後やや内傾気味に立ち上がる 外面 口縁→LR、RL縄文による羽状縄文 口縁先端部→原体による押圧 頸部→縦位のヘラミガキ 内面 器面剝離の為詳細不明	橙褐色 良		口縁片	

15	弥生 壺	-X-X- 外面 頸部-櫛指波状文 胴上半-附加条縄文 内面 ヘラケズリ	①黒褐 ②褐 良		胴部片
16	弥生 壺	-X-X- 外面 胴上半-S字状給節文2段で区画し以下附加条縄文	①黒褐 ②暗赤褐 良		胴部片

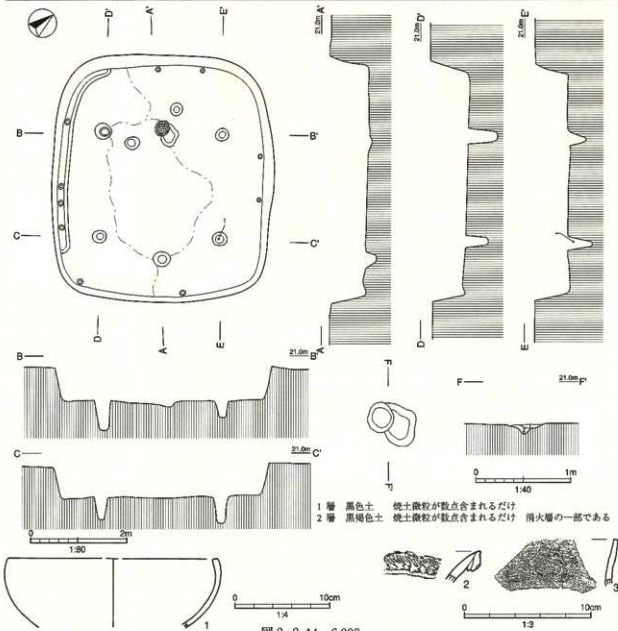


図 2-2-14 6-008

表 2-2-7 6-008遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の 特徴	色調 焼	調 胎土	遺存	備考
1	弥生 鉢	(220)×-(73)×最大径(230) は面取りし平坦面を作る 外面 口唇に赤彩を行ったと思われるが断片的に残るのみ	淡褐 良		口縁片	赤彩 (無頸壺)
2	弥生 壺	-X-X- 外面 口縁-RL縄文 口縁下端-原体による押圧 内面 ミガキ	橙褐 良		口縁片	内外面とも赤彩 を施したと思わ れるが残存度は わずか
3	弥生 壺	-X-X- 外面 口唇-附加条縄文 口縁-ミガキ 内面 口縁-ミガキ	黒褐 良	長石石英 赤色スコ リア微	口縁片	

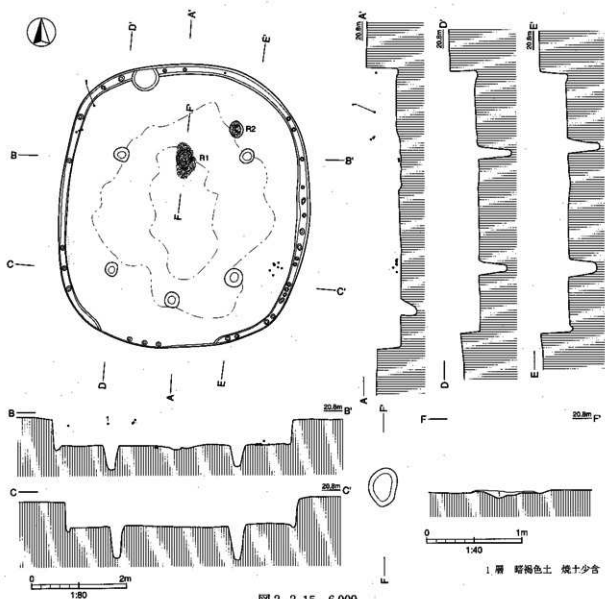


図 2-2-15 6-009

表 2-2-8 6-009遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	-X-X- 外面 頸部下端-S字状結節文2段で区画 以下胴部は附加条縄文 内面 ミガキ	褐 良		胴部片	
2	弥生 甕	-X-X- 複合口縁 外面 口唇-附加条縄文 内面 ミガキ	⑤黒褐 ⑥暗褐 良		口縁片	
3	弥生 甕	-X-X- 外面 頸部-獅描横走文 獅首の条間に微細な刺突 胴上半-RL縄文 内面 ミガキ	⑤黒褐 ⑥褐 良		胴部片	
4	弥生 甕	-X-X- 外面 附加条縄文 内面 ミガキ	⑤暗赤褐 ⑥黒褐 良		頸部~ 胴部片	
5	石器 砥石	長さ155×幅50×厚み37 重量430g				

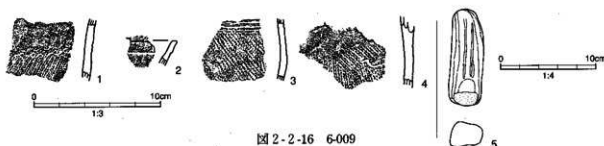


図 2-2-16 6-009

#### 6-008

**検出地区** C5-14G。台地平坦部に立地する。周辺の弥生・古墳時代遺構として、6-009、7-004、7-008等がある。

**遺構** 隅丸長方形の中型の住居跡である。床は、ロームを良く踏み固めた床で住居跡西側で硬化面を広範囲に検出している。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がっている。4本柱の竪穴住居跡である。炉は、住居跡中央やや北側に位置し、地床炉である。周溝は住居跡西側で一部検出している。

覆土は色調を基本とし、概ね6層に分層され、床面直上で焼土を検出していることなどから、人為的な埋め出しの後に、自然堆積による埋没が進んだと考えられる。

**遺物** 覆土中から、小破片が少量出土したのみである。また、図示しなかったが、打製石斧が1点出土している。

**所見** 出土遺物から弥生時代後期の竪穴住居跡と判断した。

#### 6-009

**検出地区** C5-4G。台地平坦部に立地する。周辺の弥生・古墳時代遺構として6-008、6-010等がある。

**遺構** 小判形の中型の住居跡である。床は、ロームを良く踏み固めた床で住居跡中央で硬化面がドーナツ状に広がる。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がっている。4本柱の竪穴住居跡である。炉は、住居跡中央やや北側に位置し、地床炉で2基検出された。それぞれの位置関係と火床部の観察等からR1が主体的に使用され、R2が補助的に使用されたものと判断した。周溝は、ほぼ全周していた。

覆土は色調を基本とし、概ね6層に分層され、床面直上で一部、焼土を検出していることなどから、人為的な埋め出しの後に、自然堆積による埋没が進んだと考えられる。

**遺物** 床面直上～覆土上層にかけて、小破片が少量(15点程度)出土したのみである。

**所見** 出土遺物から弥生時代後期の竪穴住居跡と判断した。炉を2基検出する住居跡の例として6-003、7-001、7-006、7-003が挙げられる。

#### 7-001

**検出地区** C5-42G。台地平坦部に立地する。周辺の弥生・古墳時代遺構として、7-009、7-002、7-008等がある。中近世以降の溝と重複し、一部切られている。

**遺構** 隅丸長方形の中型の住居跡である。床は、ロームを良く踏み固めた床で住居跡中央で硬化面を広範囲に検出した。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がっている。4本柱の竪穴住居跡である。炉は、住居跡中央やや北側に位置し、地床炉で2基検出された。それぞれの位置関係と火床部の観察等からR1が主体的に使用され、R2が補助的に使用されたものと判断した。周溝は、ほぼ全周していた。

覆土は色調を基本とし、概ね4層に分層され、概ね自然堆積による埋没が進んだと考えられる。

**遺物** 床面直上～覆土上層にかけて、小破片が少量(30点程度)出土したのみである。

**所見** 出土遺物から弥生時代後期の竪穴住居跡と判断した。炉を2基検出する住居跡の例として6-003、6-009、7-006、7-003が挙げられる。

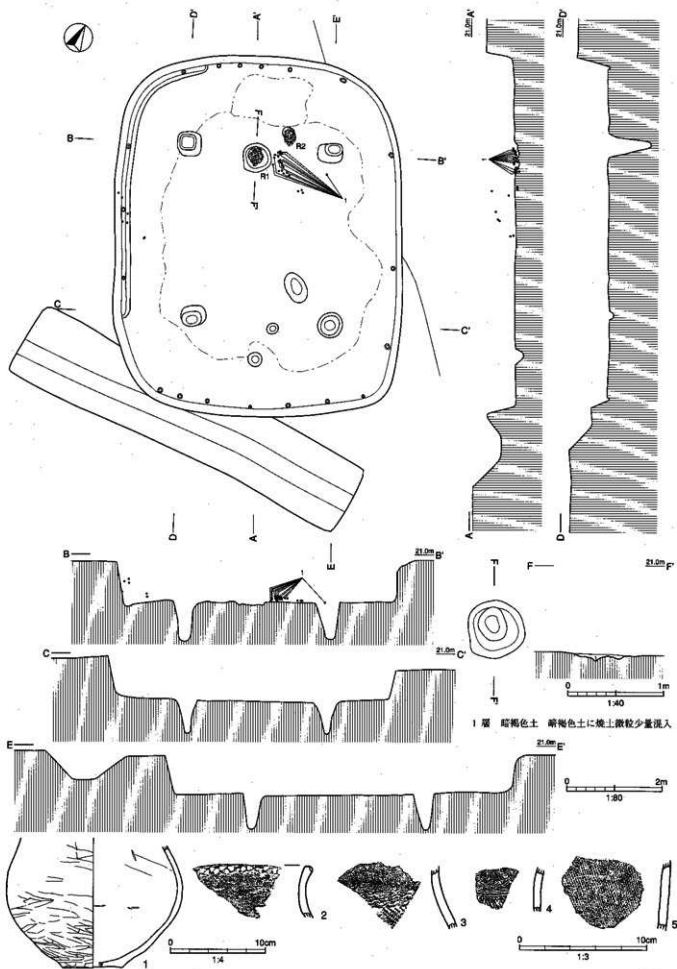


图 2-2-17 7-001



表 2-2-9 7-001遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	-×64×(138) 外面 胴上半～下端ヘラケズリ 内面 胴下半ヘラナデ	暗褐～ 茶褐 青	砂粒多	1/2	内外面スス付着
2	弥生 甕	-×-×- 口縁 緩やかに外反 口唇に棒状工具による押印を施す 以下口縁～頸部にかけては無文帯になる	①黒褐 ②暗褐 ③良	緻密	口縁片	
3	弥生 甕	-×-×- 頸部無文帯の下端をS字状結筋文2段により区画し、以下胴部には附加条縄文を施す	①暗褐 ②褐 ③良	緻密	頸部～ 胴部片	
4	弥生 甕	-×-×- 胴部に附加条縄文を施文後、胴上部、上端を4本歯による櫛描横走文によって区画 区画後頸部を櫛描波状文で充填	①褐 ②暗褐 ③良	緻密	頸部～ 胴部片	
5	弥生 甕	-×-×- 頸部は無文 以下胴部からR燃糸文を施文	①黒褐 ②暗褐 ③良	白色砂粒少	胴部片	

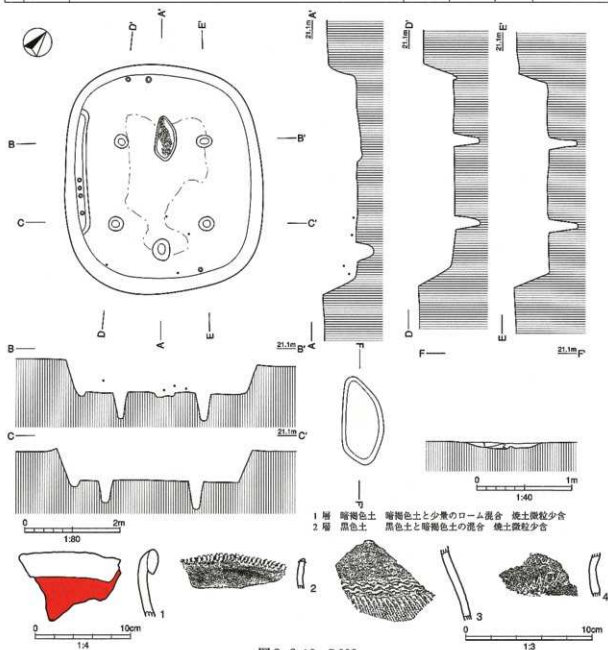


図 2-2-18 7-002

表 2-2-10 7-002遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 壺	-X-X- 折り返し口縁 外反する 外面 口縁-横位のハケ目 頸部-横位のハケ目調整後、縦位のヘラミ ガキ後赤彩 内面 ヘラミガキ後赤彩 器面剥離が激しい	赤 良	緻密	口縁片	赤彩
2	弥生 壺	-X-X- 口縁縁やかに外反 口唇原体による押圧	黒褐 良	緻密	口縁片	
3	弥生 壺	-X-X- 無文 頸部下端をS字結節文3段による区画をし以下胴部附加条縄文	砂黒褐 砂微褐 良	緻密	胴部片	
4	弥生 壺	-X-X- 4本歯による櫛歯波状文	淡褐 良	緻密	頸部片	外面にスス状の炭化物付着

## 7-002

**検出地区** C5-32G。台地平坦部に立地する。周辺の弥生・古墳時代遺構として7-001、7-004等がある。

**遺構** 隅丸長方形の小型の住居跡である。床は、ロームを良く踏み固めた床で住居跡中央で硬化面を検出した。壁は、ロームの壁で斜めに直線的に立ち上がっている。4本柱の竪穴住居跡である。炉は、住居跡中央やや北側に位置し、地床炉である。周溝は、住居跡東側で一部検出した。

覆土は色調を基本とし、概ね7層に分層され、概ね自然堆積による埋没が進んだと考えられる。

**遺物** 覆土下層～覆土上層にかけて、小破片が少量出土したのみである。

**所見** 出土遺物から弥生時代後期の竪穴住居跡と判断した。

## 7-006

**検出地区** C4-92G。台地平坦部に立地する。周辺の弥生・古墳時代遺構として、7-005、6-006、7-007等がある。

**遺構** 小判形の中型の住居跡である。床は、ロームを良く踏み固めた床で住居跡中央で硬化面を検出した。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がっている。4本柱の竪穴住居跡である。P5は、出入口施設と考えられ、その手前の浅い落ち込みは、貯蔵用の施設と判断した。炉は、住居跡中央やや北側に位置し、地床炉で、2基検出した。火床面の観察等からR1が主体的に使用され、R2が補助的に使用されたと考えられる。周溝は、検出されなかった。

覆土は色調を基本とし、概ね6層に分層され、人為的な埋め戻しの後、自然堆積による埋没が進んだと考えられる。

**遺物** 覆土下層を中心に小破片が少量出土したのみである。

**所見** 出土遺物から弥生時代後期の竪穴住居跡と判断した。輪積痕系土器を主体に出土する住居跡で、南関東系土器の影響下にある住居跡と判断した。7-007出土の遺物と接合する遺物もあり、両者に何らかの関連がある可能性がある。炉を2基検出する住居跡の例として6-003、7-001、6-009、7-003が挙げられる。また、出入口施設の手前に浅い窪みを持つ住居跡の例としては6-005が挙げられる。

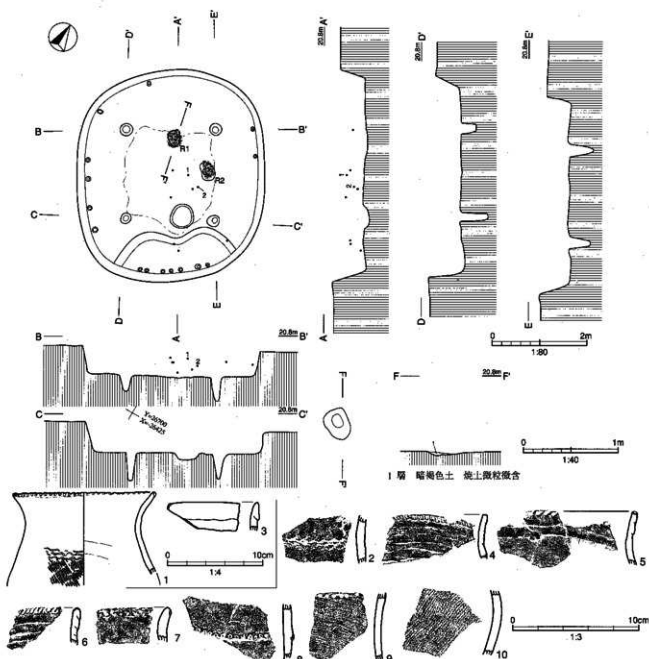


図 2-2-19 7-006

表 2-2-11 7-006遺物観察表

(単位mm)

No.	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	149×-×(98) 口縁外反 外面 口縁ハケ状工具による刻み 頸部ヘラナデ 胴上半・結筋3 段→附加条縄文 内面 ヘラナデ	暗褐色	砂粒 白色粒	口縁ハケ 胴部片	7-007出土遺物 と接合
2	弥生 甕	-×-×- 外面 ハケ目調整後、S字状結筋文2段による区画	褐色	緻密	頸部片	
3	弥生 甕	-×-×- 折り返し口縁	①黒褐色 ②暗褐色	緻密	口縁片	
4	弥生 甕	-×-×- 口縁外反 輪積痕 外面 口唇-RL縄文	黒褐色	緻密	口縁片	

5	弥生 甕	-X-X- 口縁外反 輪積痕2段あり 外面 口唇-取体の押圧	㊦黒褐 ㊧暗褐 良	緻密	口縁片	
6	弥生 甕	-X-X- 口縁外反 輪積痕 外面 口唇-取体の押圧	㊦黒褐 ㊧暗褐 良	緻密	口縁片	
7	弥生 甕	-X-X- 口縁外反 外面 口唇部-押圧	㊦黒褐 ㊧暗褐 良	緻密	口縁片	
8	弥生 甕	-X-X- 胴部片上半に痕跡的に輪積痕1段あり 下端を竹管状 工具による連続刺突で区画 内面 ミガキ	㊦黒 ㊧暗褐 良	緻密	胴部片	胴部外面にスズ 状の炭化物付着
9	弥生 甕	-X-X- 外面 竹管状の工具による連続刺突 ハケ調整 内面 ミガキ	㊦黒褐 ㊧暗褐 良	緻密	胴部～ 胴部片	
10	弥生 甕	-X-X- R垂糸?	㊦黒褐 ㊧暗褐 良	緻密	胴部片	

#### 7-004

**検出地区** C5-13G。台地平坦部に立地する。周辺の弥生・古墳時代遺構として、6-008、7-002、7-005、7-008等がある。中近世以降の溝と重複し、一部切られている。

**遺 構** 隅丸長方形の中型の住居跡である。床は、ロームを良く踏み固めた床で住居跡中央で硬化面を検出した。壁は、ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がっている。4本柱の堅穴住居跡である。炉は、住居跡中央やや北側に位置し、地床炉である。周溝は、南西側で一部検出した。

覆土は色調を基本とし、概ね8層に分層され、人為的な埋め戻しの後、自然堆積による埋没が進んだと考えられる。

**遺 物** 覆土下層～覆土上層にかけて、小破片が少量出土したのみである。

**所 見** 出土遺物から弥生時代後期の堅穴住居跡と判断した。

#### 7-003

**検出地区** C5-11G。台地平坦部に立地する。周辺の弥生・古墳時代遺構として7-002、7-005等がある。

**遺 構** 不整形の小型の住居跡である。床は、ロームを踏み固めた床で住居跡南側で硬化面を一部検出した。壁は、ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がっている。主柱穴は、検出されなかった。炉は、住居跡中央やや北側に位置し、地床炉で2基検出された。火床面の観察等からR1が主体的に使用され、R2が補助的に使用されたものと考えられる。周溝は、住居跡東側、西側で一部検出した。

覆土は色調を基本とし、概ね7層に分層され、概ね自然堆積による埋没が進んだと考えられる。

**遺 物** 覆土下層～覆土上層にかけて、小破片が少量出土したのみである。

**所 見** 出土遺物から弥生時代後期の堅穴住居跡と判断した。他に炉を2基検出する住居跡の例として、6-003、7-001、7-006が挙げられる。

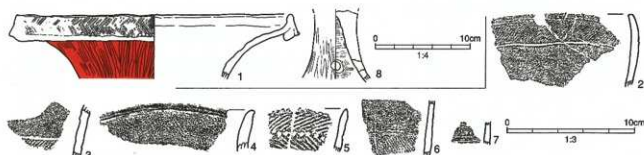


図 2-2-20 7-004

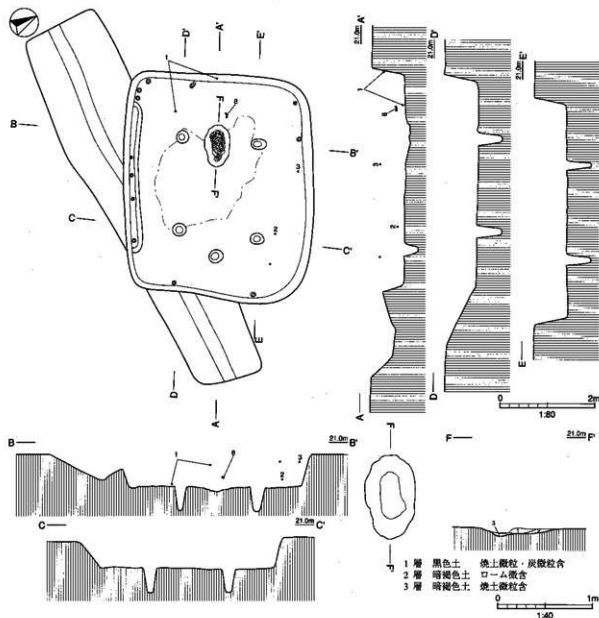


図 2-2-21 7-004

表 2-2-12 7-004遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 壺	(288)×-(68) 複合口縁 上端は内傾しつつ立ち上る 断面三角状 外面 口縁-羽状縄文 下端-押圧 内面 器面劣化著しく不明	橙褐色	砂粒 橙色粒	口縁- 胴部片	赤彩 胴部
2	弥生 無形壺 (鉢)	-X-X- 口縁外反 ほぼ直立 RL単筋縄文を施文 下端を沈線で区画	良	白色粒	口縁片	赤彩 内外面
3	弥生 壺	-X-X- 外面 ハラミガキ後胴部-RL単筋縄文を施し、沈線による区画を行う 内面 器面剥離が著しく不明	砂赤 良	砂粒少	胴部片	赤彩 外
4	弥生 壺	-X-X- 口縁外反 網目状の捺赤文を施文か?	暗赤褐 良	嚴密	口縁片	
5	弥生 壺	-X-X- 口縁わずかに外反 内削ぎ 外面 LR,RL縄文による羽状縄文施文後、羽状の接合部を剝突 内面 ミガキ	灰白 良	砂粒少	口縁片	

6	弥生 壺	-X-X- 無文 S字状結節文2段による区画を行い、以下胴部RL単節斜縄文	暗褐色 良	緻密	胴部片	
7	弥生 壺	-X-X- 外面 櫛箱波状文 櫛箱横走文	灰白 良	緻密	頸部片	
8	弥生 高坏	-X-X(76) 透し孔3個 外面 脚部へワミガキ 内面 ハケまたはハケ状工具でのナデ	明褐色 普通	砂粒 赤色粒多 雲母	脚部片	外面スス付着

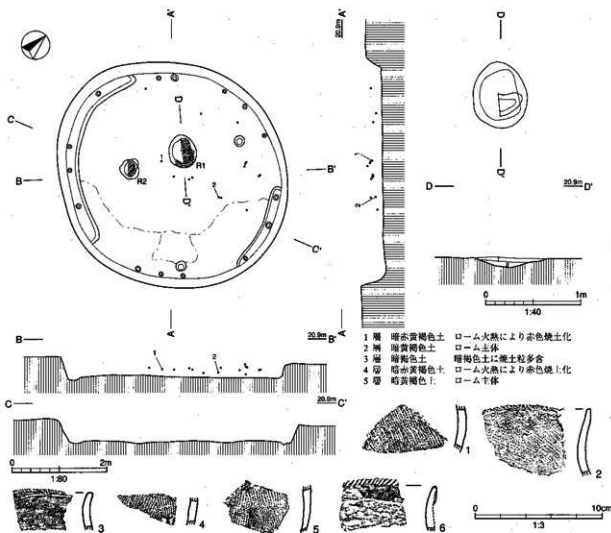


図 2-2-22 7-003

表 2-2-13 7-003遺物観察表

(単位mm)

No.	種別形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 壺	-X-X- 外面 胴部へ附加条縄文	①黒褐色 ②暗褐色	緻密	胴部片	
2	弥生 壺	-X-X- 口縁外反 外面 口縁-口唇に原体の押圧 口縁-頸部-無文 斜位のハケ目調整	①暗褐色 ②暗褐色 良	緻密	口縁片	
3	弥生 壺	-X-X- 口縁外反 外面 口唇-原体による押圧 以下無文	黒褐色 良	緻密	口縁片	

4	弥生 甕	-X-X- 外面 胴部-RL単節斜縄文	暗褐色	緻密	胴部片	
5	弥生 甕	-X-X- 外面 胴部-RL単節斜縄文を帯状施文	黒褐色	緻密	胴部片	
6	弥生 甕	-X-X- 折り返し口縁 わずかに外反 口縁、口唇は原体による押圧を施す 外面の調整等は剥離激しく不明	黒褐色	緻密	口縁片	

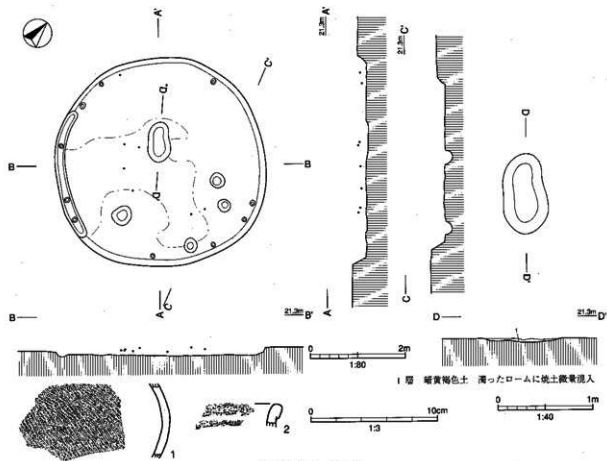


図 2-2-23 7-005

表 2-2-14 07-005遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	-X-X-				胴部片
2	弥生 甕	-X-X- 折り返し口縁 外面 ミガキ 内面 器面剥離の為不明	良			口縁片
3	軽石 ?	長径50×短径35×厚さ22 重量7.1g 全面に割痕あり 砥石としての使用が考えられる				

## 7-005

**検出地区** C5-2G。台地平坦部に立地する。周辺の弥生・古墳時代遺構として、7-006、7-004、7-003等がある。

**遺構** 不整形形の小型の住居跡である。床は、ロームを良く踏み固めた床で住居跡中央で硬化面を検出した。壁は、ロームの壁で斜めに直線的に立ち上がっている。床面に小穴4基を検出しているが、支柱穴等は不明である。炉は、住居跡中央やや北側に位置し地床炉である。明瞭な火床は認められなかったが、床面の劣化状況、土層観察等から炉と判断した。周溝は、住居跡南西側で一部検出した。

覆土は色調を基本とし、概ね7層に分層され、概ね自然堆積による埋没が進んだと考えられる。

**遺物** 覆土下層～覆土上層にかけて小破片を中心に出土した。床面直上付近で全面に擦痕のある軽石の出土があり、砥石の可能性もある。のみである。また、縄文土器の混入が目立った。

**所見** 出土遺物及び出土状況等から弥生時代後期の竪穴住居跡と判断した

## 6-006

**検出地区** C4-93G。台地平坦部に立地する。周辺の弥生・古墳時代遺構として、6-005、7-006等がある。

**遺構** 不整形形の小型の住居跡である。床は、ソフトロームの軟弱な床である。壁は、ロームの壁で、ほぼ垂直に立ち上がっているが、掘込みの浅い住居跡である。床面に小穴を1基確認したが、炉、周溝は、検出されなかった。

覆土は色調を基本とし、1層に分層され、自然堆積による埋没が進んだと考えられる。

**遺物** 覆土中から、小破片が少量出土したのみである。

**所見** 炉は、検出されていないが、出土遺物及び遺構の形態・規模、覆土の観察等から弥生時代後期の竪穴住居跡と判断した。

## 6-010

**検出地区** C5-15G。台地平坦部に立地する。周辺の弥生・古墳時代遺構として6-008、6-009等がある。

**遺構** 不整形形の小型の住居跡である。床は、ソフトロームの軟弱な床。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がるが、掘込みの浅い住居跡である。柱穴は検出されなかった。炉は、住居跡中央やや北側に位置し、地床炉である。周溝は、住居跡東側で一部検出した。

覆土は色調を基本とし、概ね3層に分層され、炉の直上で焼土を検出しているものの、概ね自然堆積による埋没が進んだと考えられる。

**遺物** 覆土中から、小破片が少量出土したのみである。

**所見** 出土遺物から弥生時代後期の竪穴住居跡と判断した。

## 7-008

**検出地区** C5-52G。台地平坦部に立地する。周辺の弥生・古墳時代遺構として、7-009、6-008、7-001、7-002、7-004、6-010等がある。

**遺構** 隅丸長方形の中型の住居跡である。床は、ソフトロームと暗褐色土の混合土による床で、住居跡中央踏み固められ、周囲は、やや軟弱であった。壁は、ソフトロームの壁で斜めに立ち上がっている。炉は、住居跡中央やや北側に位置し、地床炉である。支柱穴、周溝は検出されなかった。

覆土は色調を基本とし、概ね3層に分層され、概ね自然堆積による埋没が進んだと考えられる。

**遺物** 覆土中から小破片を中心に少量(20点程度)出土した。

**所見** 出土遺物から弥生時代後期の竪穴住居跡と判断した。南関東系土器が主体となる住居跡である。



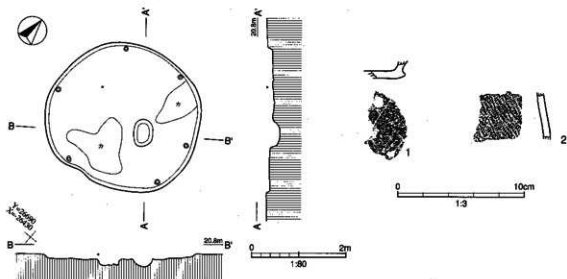


図 2-2-24 6-006

表 2-2-15 6-006遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	-X-X- 外面 底部-木炭痕	赤暗褐 黒褐 良		底部片	
2	弥生 甕	-X-X- 外面 胴上半-附加条縄文 内面 ミガキ	赤暗褐 黒褐 良		胴部片	

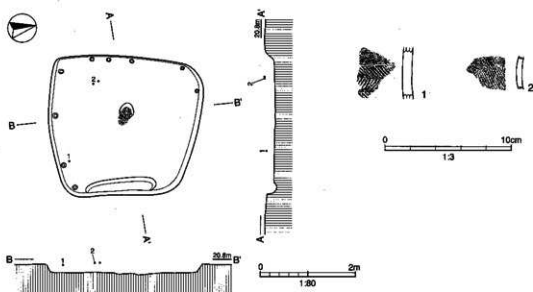


図 2-2-25 6-010

表 2-2-16 6-010遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	-X-X- 外面 R.L.R.L.R.L縄文で羽状縄文を構成 沈線による区画	橙褐 良		胴部片	
2	弥生 甕	-X-X- 外面 L燃糸文	赤黒褐 黒褐 良		胴部片	

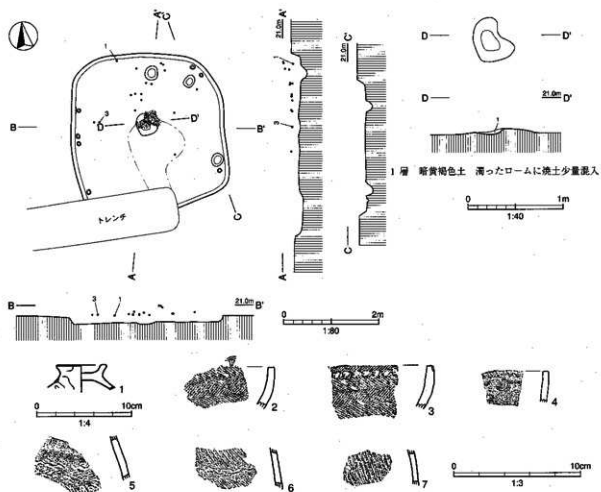


図 2-2-26 7-008

表 2-2-17 7-008遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 壺	-X-X-	⑤黒褐 ⑥暗褐 良	緻密		
2	弥生 無頸壺 (鉢)	外面 口唇-LR縄文を施した後、外面に刺突 口縁-LR縄文、RL縄文 LR縄文による羽状縄文を構成 内面 丁寧なミガキ後赤彩	⑤淡褐 ⑥赤褐 良	緻密	胴部片	赤彩 内面 NO.3と同一個体
3	弥生 無頸壺 (鉢)	-X-X- 外面 口唇-LR縄文を施した後、外面に刺突 口縁-LR縄文、RL縄文 LR縄文による羽状縄文を構成 内面 丁寧なミガキ後赤彩	⑤淡褐 ⑥赤褐 良	緻密	口縁片	赤彩 内面
4	弥生 壺	-X-X- 外面 口唇-附加条縄文	黒縄 良	緻密	口縁片	
5	弥生 壺	-X-X- 外面 S字状結節文2段で区画、以下RL縄文	⑤黒褐 ⑥褐 良	緻密	胴部~ 胴部片	
6	弥生 壺	-X-X- 外面 附加条縄文+結節文+附加条縄文	⑤暗褐 ⑥黒褐 良	緻密	胴部片	
7	弥生 壺	-X-X- 外面 附加条縄文	黒褐 良	緻密	胴部片	

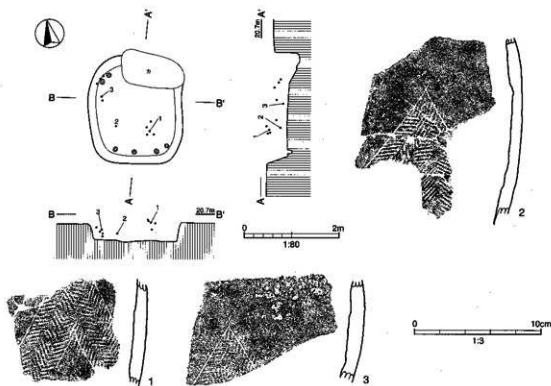


図 2-2-27 7-007

表 2-2-18 7-007遺物観察表

(単位mm)

No	種器別形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生壺	-X-X- 外面 RL縄文、LR縄文の羽状縄文で山形文を構成し波線で区画 内面 器面剥離の為不明		褐 青	砂粒少	胴部片	赤彩 胴部外面
2	弥生壺	-X-X- 外面 RL縄文、LR縄文の羽状縄文で山形文を構成し波線で区画 内面 器面剥離の為不明		褐 青	砂粒少	胴部片	
3	弥生壺	-X-X- 外面 RL縄文、LR縄文の羽状縄文で山形文を構成し波線で区画 内面 器面剥離の為不明		橙褐 青	砂粒少	胴部片	

### 7-007

**検出地区** C4-92G。台地平坦部に立地する。周辺の弥生・古墳時代遺構として、7-006等がある。一部攪乱を受けていた。

**遺構** 隅丸長方形の小型の住居跡である。床は、ロームの床でほぼ平坦である。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がっている。主柱穴、炉、周溝は検出されなかった。

覆土は色調を基本とし、概ね5層に分層され、概ね人自然堆積による埋没が進んだと考えられる。

**遺物** 床面直上～覆土上層を中心に少量出土した。図示はしなかったが、覆土中から縄文土器(後期)片も少量出土した。

**所見** 炉は検出されなかったが、出土遺物から弥生時代後期の竪穴住居跡と判断した。南関東系土器が主体となる住居跡である。7-006出土の遺物と接合する遺物もあり、両者に何らかの関連がある可能性がある。

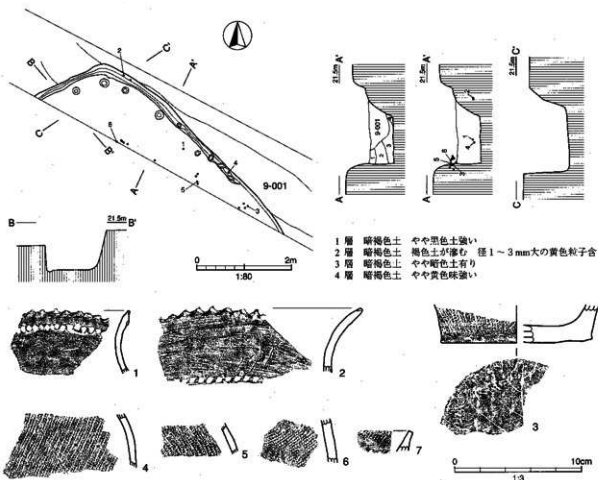


図 2-2-28 9-006

表 2-2-19 9-006遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 甕	-X-X- 口縁外反 複合口縁 口唇部に押圧を行い小波状を呈する 口縁下端に連続刺突 刺突具は縄文原体か？ 外面 口縁ハケ後ミガキ 内面 口縁ハケ調整	◎暗褐色 ◎褐良		胴部片	
2	弥生 甕	-X-X- 口縁外反 口唇部に押圧を行い小波状を呈する 頸部下端を連続刺突で胴部と区画 刺突具は縄文原体か？ 内外面とも口縁～頸部ハケ調整	◎黒褐色 ◎暗褐色 ◎良	緻密	口縁～ 頸部片	
3	弥生 甕	-X(120)X(30) 外面 体部下端一附加糸縄文 底部一木葉痕	◎黒褐色 ◎暗褐色 ◎良	砂粒少	底部片	
4	弥生 甕	-X-X- 外面 附加糸縄文	◎暗褐色 ◎暗褐色 ◎良	長石 石英少	胴部片	
5	弥生 甕	-X-X- 外面 附加糸縄文	淡褐色 ◎良		胴部片	体部外面にスズ状の炭化物付着
6	弥生 甕	-X-X- 外面 RL縄文	◎暗褐色 ◎暗褐色 ◎良		胴部片	
7	弥生 甕	-X-X- 折り返し口縁 外面 口唇～口縁上端一LR縄文 以下をR捻糸 口縁下端一LR縄文を施し刺突を加える 内面 ミガキ	淡褐色 ◎良	緻密	口縁片	

## 9-006

**検出地区** C5-96G。台地平坦部に立地する。他の弥生・古墳時代遺構と離れ立地している。但し、周囲は未調査区域の為、実態として孤立していたかは不明である。中近世以降の溝と重複し一部切られている。

**遺構** 住居跡の大部分が調査区域外に及んでいるが、形態は、隅丸長方形の中型の住居跡と思われる。床は、ローム砥暗褐色の混合土による貼床で、ほぼ平坦。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がっている。主柱穴、炉は、検出されなかった。周溝は住居跡北側で一部検出した。

覆土は色調を基本とし、3層に分層され、人自然堆積による埋没が想定される。

**遺物** 覆土中から小破片が少量(20点程度)出土した。

**所見** 出土遺物から弥生時代後期の堅穴住居跡と判断した。

## 1-005a

**検出地区** D7-16G。台地平坦部に立地する。調査範囲南側の道路状の細い調査区に位置する。未調査区域を考慮に入れないならば、調査区北側に密集した弥生時代の遺構群とは占地をを異にし、他の弥生・古墳時代の遺構と離れ孤立して立地する。奈良・平安時代の住居跡1-005bと重複し、一部切られている。

**遺構** 不整形円形の小型の住居跡と思われる。床は、ロームを良く踏み固めた床で、炉の周辺で硬化面を一部検出。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がっている。床面で小穴を3基検出しているが、主柱穴、出入口等は不明である。炉は、地床炉で住居跡中央からやや西側で検出された。周溝は検出されなかった。

覆土は色調を基本とし、概ね7層に分層され、焼土を検出していることなどから、人為的な埋め戻しの後に自然堆積による埋没が進んだと考えられる。

**遺物** 覆土中から多量出土した。

**所見** 出土遺物から弥生時代後期の堅穴住居跡と判断した。

## 1-012b

**検出地区** D7-84G。台地平坦部に立地する。調査範囲南側の道路状の細い調査区に位置する。調査区北側に密集した弥生時代の遺構群とは占地をを異にする。奈良・平安時代の住居跡1-012aと重複し、一部切られている。周辺の遺構として、1-011、1-013等がある。

**遺構** 楕円形の小型の住居跡と思われる。床は、ロームと黒色土の混合土による貼床で、ほぼ平坦である。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がっている。炉、主柱穴、出入口等は不明である。周溝はほぼ全周すると思われる。

覆土は色調を基本とし、9層に分層され、概ね自然堆積による埋没が進んだと考えられる。

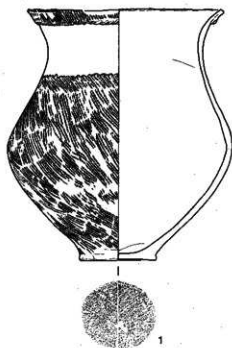
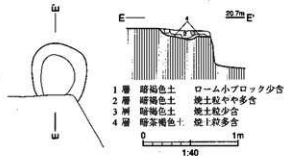
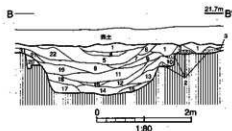
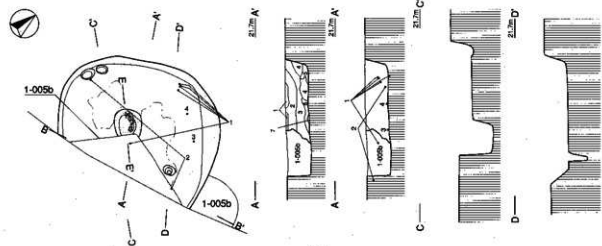
**遺物** 覆土中から少量出土した。

**所見** 炉は検出されていないが、遺構の形態、規模、出土遺物等から弥生時代後期の堅穴住居跡と判断した。

## 1-011

**検出地区** D7-74G。台地平坦部に立地する。調査範囲南側の道路状の細い調査区に位置する。調査区北側に密集した弥生時代の遺構群とは占地をを異にする。奈良・平安時代の堀立柱建物跡1-204と重複し、一部切られている。周辺の遺構として、1-012b、1-010、等がある。

**遺構** 隅丸方形の小型の住居跡と思われる。床は、ロームを主体とした貼床で住居跡中央で硬化面を検出。周囲についてはやや軟弱。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がっている。炉は、地床炉



- A-A'
- 1層 暗褐色土 ローム粒褐色土を混入する
  - 2層 黒褐色土 ローム粒、焼土粒を混入する
  - 3層 暗褐色土 黒褐色土を含、褐色土をやや多含
  - 4層 褐色土 ローム粒をやや多含
  - 5層 黒褐色土 炭化物を極めて多く混入
  - 6層 暗褐色土 焼土粒をより多含
  - 7層 暗褐色土 焼土をより多含

- B-B'
- 1層 黒褐色土 褐色土をしみ状に混入
  - 2層 暗灰褐色土 粘土を極めて多含
  - 3層 褐色土 はは均一の層
  - 4層 暗褐色土 粘土を多量に含
  - 5層 暗褐色土 暗い暗褐色土、焼土層をやや多く、炭化物を少なく混入する
  - 6層 褐色土 にはロームをしみ状に混入する
  - 7層 暗褐色土 焼土粒を最少含
  - 8層 暗褐色土 ローム粒をやや多く混入 やや暗い暗褐色土
  - 9層 暗褐色土 にばいロームをやや多含やや明るい暗褐色土
  - 10層 褐色土 にばいロームを多 粘土少含
  - 11層 暗褐色土 ロームの小ブロックを少含
  - 12層 褐色土 ローム粒を多含 ロームの小ブロックを少含
  - 13層 褐色土 はは均一の層
  - 14層 褐色土 ローム粒を多含 ややしまりのある層
  - 15層 暗褐色土 粘土粒、粘土の小ブロックを多含
  - 16層 暗褐色土 粘土粒を少含
  - 17層 暗褐色土 ローム粒下を含 はは均一の層
  - 18層 暗褐色土 ロームの小ブロックを多含
  - 19層 暗褐色土 焼土粒を少含
  - 20層 暗褐色土
  - 21層 暗褐色土
  - 22層 暗褐色土

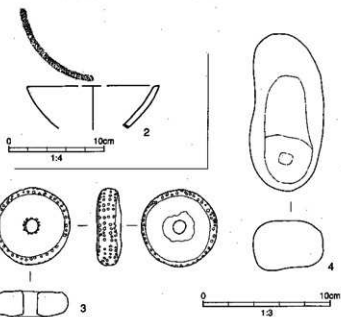


図 2-2-29 1-005a

表 2-2-20 1-005a遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成 形・調 整 等 の 特 徴	色 調 焼 成	胎 土	遺 存	備 考
1	弥生 甕	205×81×267 最大径(胴中位) 238 外反する折り返し口縁 外面 口縁、口唇-附加条縄文 口縁下端-押圧 頸部-ナデ 胴上半 -結節1段の下に附加条縄文1段 以下下端まで撫糸文 黒斑有り底部 -木葉痕 内面 ナデ及びヘラナデ	褐色 良	砂粒	略完形	
2	弥生 鉢	(138)×-×(45) 外面 口縁-口唇-附加条縄文 体部-ヘラミガキ	黒褐色 良	緻密	口縁- 体部	
3	土製品 紡錘車	上径60×62 下径56×56 厚さ21 軸孔径11 重量79.9g			完形	
4	石器					

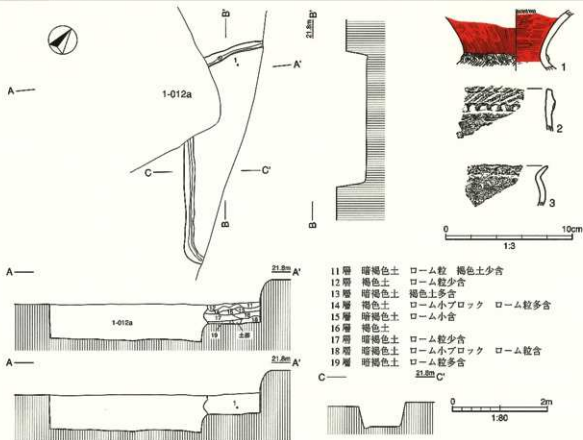


図 2-2-30 1-012b

表 2-2-21 1-012b遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成 形・調 整 等 の 特 徴	色 調 焼 成	胎 土	遺 存	備 考
1	弥生 甕	-×-×(65) 外面 頸部-一段位のヘラミガキ 胴部-RL+LR羽状縄文 施文後頸部 との境に円形浮文11個 内面 頸部-RL縄文 胴部-一段位のヘラミガキ	褐色 普	砂粒	頸部片	頸部内外面赤彩 内外面スス付着
2	弥生 甕	-×-×- 折り返し口縁 緩やかに外反 外面 口唇、口縁とも附加条縄文を施文後、口縁下端に下からの刺突を 行う 頸部は無文帯を形成	暗褐色 良	緻密	口縁片	
3	弥生 小型甕	-×-×- 口縁 わずかに折り返し「く」の字状に屈曲 外面 口縁下端-竹管による連続刺突 頸部以下-無文 縦位のヘラケ ズリ 内面 ミガキ	褐色 良	緻密	口縁片	

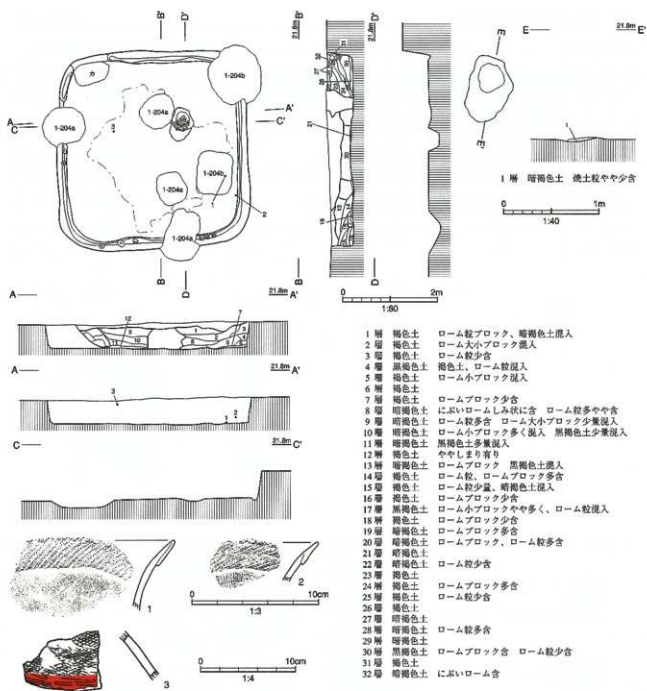


図 2-2-31 1-011

表 2-2-22 1-011遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 或 形・調整等の特長	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	弥生 壺	-X-X- 折り返し口縁 外面 口縁、口唇とも附加糸縄文 内面 口縁へラナデ	茶褐色 青	砂粒	口縁片	
2	弥生 壺	-X-X- 折り返し口縁 外面 口縁、口唇とも附加糸縄文 頸部一縦位の6本歯の櫛挿文 内面 へラナデ	①暗褐色 ②茶褐色 青	砂粒	口縁片	外面コゲ状 付着物
3	弥生 壺	-X-X- 外面 胴部一調目状燃承文 へらミガキ 内面 胴部へラナデ後線らにへらミガキ	橙褐色 良	砂粒	胴部片	赤彩



で住居跡中央から北西側に寄る。主柱穴、出入口等は不明である。周溝は、ほぼ全周する。

覆土は色調を基本とし、32層に分層され、概ね自然堆積による埋没が進んだと考えられる。

遺物 覆土中から多量に出土しているが本住居に伴う遺物は少ない。

所見 出土遺物等から弥生時代後期の竪穴住居跡と判断した。

#### 1-013

検出地区 D7-85G。台地平坦部に立地する。調査範囲南側の道路状の細い調査区に位置する。調査区北側に密集した弥生時代の遺構群とは占地をを異にする。奈良・平安時代の掘立柱建物跡B〇〇と重複し、一部切られている。周辺の遺構として、1-012b、1-011、1-028等がある。

遺構 楕円形の小型の住居跡と思われる。床は、ロームを主体とした貼床で3ヶ所で硬化面を検出。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がっている。炉は、地床炉で住居跡中央から西側に寄る。主柱穴、出入口等は不明である。周溝は、ほぼ全周する。

覆土は色調を基本とし、18層に分層され、人為的な埋め戻しが想定される。

遺物 床面直上～覆土上層にかけて多量に出土している。

所見 出土遺物等から弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居跡と判断した。また、覆土中出土遺物が隣接する土坑1-028出土の遺物と接合した。双方に有機的な関連を感じさせる。

#### 1-028

検出地区 D7-85G。台地平坦部に立地する。調査範囲南側の道路状の細い調査区に位置する。調査区北側に密集した弥生時代の遺構群とは占地をを異にする。隣接する遺構として、1-013等がある。

遺構 不整形円形の小型の土坑だが、しっかりとした掘込みを持つ。坑底は、凹凸があり、斜めに立ち上がる。坑底に小穴1基を検出した。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がっている。炉は、地床炉で住居跡中央から西側に寄る。主柱穴、出入口等は不明である。周溝は、ほぼ全周する。

覆土は色調を基本とし、7層に分層され、人為的な埋め戻しが想定される。

遺物 覆土中から少量出土した。

所見 出土遺物等から弥生時代後期～古墳時代初頭の土坑と判断した。また、覆土中出土遺物(1)は、隣接する竪穴住居跡1-013の出土の遺物と接合した。双方とも人為的に埋め戻された遺構戸と考えられ、両者に有機的な関連を感じさせる。

#### 1-010

検出地区 D7-64G。台地平坦部に立地する。調査範囲南側の道路状の細い調査区に位置する。一部調査区外に遺構が延びている。周辺の遺構として、1-011、1-009等がある。

遺構 隅丸方形の小型の住居跡と思われる。床は、ロームを主体とした貼床で硬化面を広範囲に検出。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がっている。炉は、地床炉で住居跡中央から西側に寄る。主柱穴、出入口等は不明である。周溝は、ほぼ全周する。

覆土は色調を基本とし、28層に分層された。床面から焼土、炭化材等を検出したことから、人為的な埋め戻しの後、自然堆積による埋没が想定される。また、土層断面から別の土坑が重複していたことが判明した(26～28)。時期等は不明。

遺物 覆土中から多量(320点程度)に出土している。

所見 小形丸底罎、器台等の出土遺物から古墳時代初頭の竪穴住居跡と判断した。

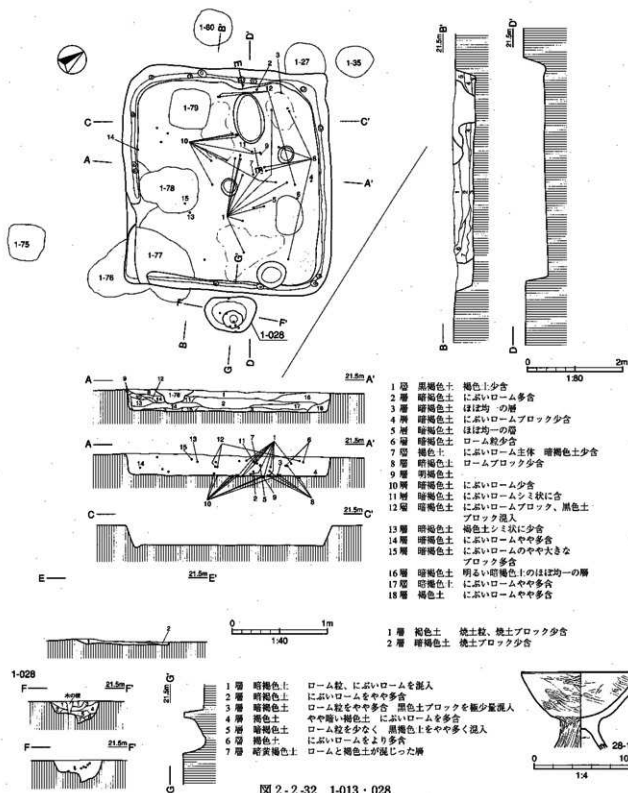


図 2-2-32 1-013・028

表 2-2-23 1-028遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 高坏	124×-×(82) 坏部下端に稜を持つ 外面 口縁-横ナゲ後ヘラミガキ 坏部-脚部-ヘラミガキ 内面 口縁-坏部-ヘラミガキ 脚部-ヘラケズリ	褐 色	砂粒 多	1/2	赤彩?

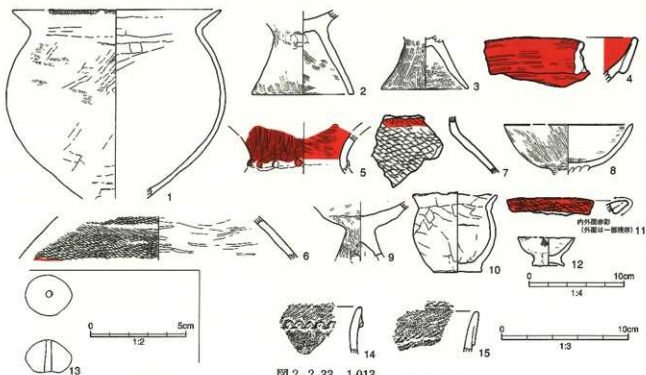


図 2-2-33 1-013

表 2-2-24 1-013遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 或 形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 台付甕	(216)×200×230 口縁部外反、胴や上位に膨らみを持つ 外面 口縁横一ナデ、口唇キザミ 頸部一ナデ 胴上半～下半一ハ ケ後ナデ及び一部ヘラミガキ 胴下端一ハケズリ 内面 口縁～頸部一横ナデ 胴部一ヘラナデ	暗褐色 青	砂粒	1/3	外面ス付着 ケール状付着物
2	土師器 台付甕	一×107×(89) 「ハ」の字状の脚部 外面 脚部一ナデ調整のようなハケ 胴部底面一コゲ状付着物 内面 裾部一ハケ 接合部一ヘラナデ及びナデ	暗赤褐色 青	砂粒多	脚部片	
3	土師器 台付甕	一×92×(56) 脚部「ハ」の字状 外面 脚部一縦位のハケ 内面 裾部一横位のハケ 接合部一ナデ	暗褐色 良	砂粒 赤色粒	脚部片	
4	土師器 壺	一×一×一 ヘラミガキ 複合口縁	橙褐色 黒	砂粒	口縁片	赤彩 内外面
5	土師器 壺	一×一×(54) 外面 頸部一縦位のヘラミガキ 胴部との境に赤彩された円形浮文 (残存5個) 内面 頸部一横位のヘラミガキ 胴上半一ヘラナデ	橙褐色 青	砂粒 白色粒	頸部片	赤彩 頸部内外面
6	土師器 壺	一×一×(46) 外面 胴上半一網目状赤糸文 胴下半一ヘラミガキ 内面 胴上半一ヘラナデ後縁らにヘラミガキ	暗褐色 青	砂粒 白色粒	胴部片	赤彩
7	土師器 壺	一×一×一 外面 頸部一ヘラミガキ 胴上半一網目状赤糸文 内面 頸部一ヘラミガキ 胴上半一ヘラナデ	橙褐色 青	砂粒	頸部片	赤彩 頸部内外面
8	土師器 高坏	(134)×一×(54) 体部下端に緩やかな稜を持つ 外面 口縁一横ナデ後ヘラミガキ 体部一ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 口縁一横ナデ後ヘラミガキ	暗褐色 青	砂粒 白色粒	坏一 脚部片	
9	弥生 高坏	一×一×(61) 体部下端に稜を持つ 遺し孔3ヶ所 外面 体部一ハケ後ナデ及びヘラミガキ 脚部一縦位のヘラミガキ 内面 ミガキ 接合部一指頭による押さえ及びナデ?	暗褐色 青	砂粒 褐色粒	坏一 脚部片	
10	弥生 小型鉢	(88)×50×85 やや外反する広口の口縁 輪縁み稜を残す 胴中位が やや膨らむ 外面 口縁一横ナデ 頸部一胴下半一ヘラナデ 下端一 ヘラケズリ 内面 口縁一横ナデ 頸部一脚部一ヘラナデ	明褐色 黒	砂粒少	略完形	

11	弥生 壺	—X—X— 外反する複合口縁 外面 口縁、口唇とも網目状熟糸文 内面 口縁—ヘラミガキ	暗褐色	砂粒 白色粒	略定形	赤彩 外面は一部残存
12	弥生 ミニチュア 高坏	(58)×23~32×31 手捏ぬ 楕円形を呈するミニチュアの高坏 指頸による調整 一部に縄文原体を押し当てたような痕跡も残る	暗褐色	砂粒 白色粒	3/4	
13	土製品 土玉	最大径37×高さ26 重量26.5g				
14	弥生 壺	—X—X— 折り返し口縁 わずかに外反 外面 口唇、口縁は附加糸縄文 口縁下端—下から刺突 を形成 内面 ミガキ	◎黒褐色 ◎褐色	緻密	口縁片	
15	弥生 壺	—X—X— 折り返し口縁緩やかに外反 口唇、口縁、頸部に発達した痕跡有り			口縁片	

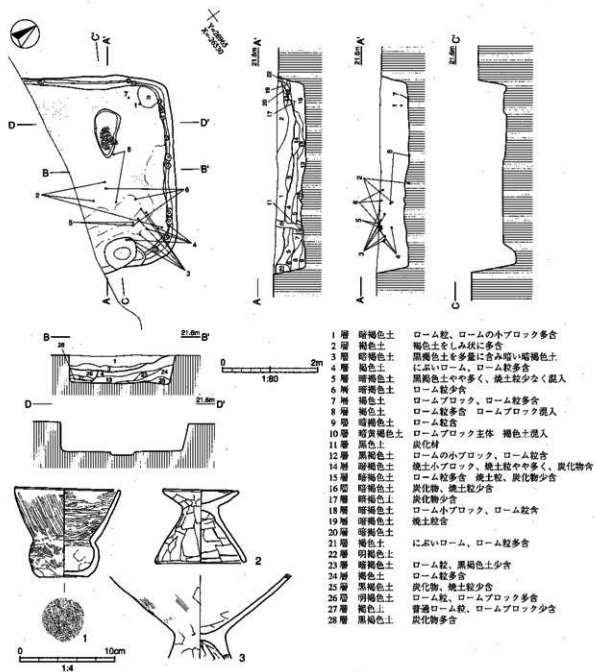


図 2-2-34 1-010



図 2-2-35 1-010

表 2-2-25 1-010遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 埴	110×52×95 口縁内湾気味に小さく開く 胴部小さく断面楕円状 外面 口縁-横ナデ後縦位のヘラミガキ 胴上半-下半-ハケ後踵らに ヘラミガキ 下端-ヘラケズリ 底部-木葉痕 内面 口縁-横位のヘラミガキ 胴下半-ヘラナデ	褐色 良	砂粒 石英	略完形	
2	土師器 小型器台	78×94×79 器受部は浅く胴部「ハ」の字状 外面 口縁-横ナデ 脚部-ヘラナデ 内面 口縁-横ナデ 脚部-ヘラケズリ	褐色 良	砂粒	略完形	器受部内面ター ル状付着物
3	土師器 台付甕	—×—×(90) 外面 胴下端-ハケ後ナデ 脚部-ヘラケズリ 内面 胴下端-ヘラナデ 脚部-ヘラケズリ	暗褐色 茶褐色	砂粒少	胴- 脚部片	外面タール状付 着物 内面スス付着
4	土師器 甕	(219)×—×(56) 口縁立ち上がり上端でやや外反 外面 口縁-押圧 頸部-ヘラナデ 内面 口縁-横ナデ後ヘラミガキ	暗褐色 褐色	砂粒少	口縁片	外面スス付着
5	土師器 壺	(218)×—×(41) 複合口縁 外面 口縁、口唇とも網目状捺糸文 下端刻み 頸部-ヘラミガキ 内面 口縁-ヘラミガキ	橙褐色 青	砂粒	口縁片	赤彩
6	土師器 壺	—×—×(58) 外面 頸部-ヘラミガキ 胴上半-網目状捺糸文施文後、頸部の境に円 形浮文(焼存5カ所) 内面 頸部-ヘラミガキ 胴部 ナデ	橙褐色 青	砂粒	口縁片	赤彩 外面及び 内面頸部 内面器面剥離多
7	土師器 壺	—×—×— 折り返し口縁 外面 口縁-横ナデ 頸部-ヘラナデ 内面 口縁-横ナデ後ヘラミガキ	橙褐色 青	砂粒	口縁片	赤彩?
8	土師器 高坏	—×—×(64) 接合部は狭く、裾部より広がる 外面 脚部-ヘラナデ?後ヘラミガキ 内面 裾部-ヘラナデ 接合部-ヘラケズリ 一部指頭による圧痕	橙褐色 悪	砂粒多	脚部片	内外面スス付着
9	土師器 高坏	—×105×(84) 透し孔3カ所 裾部の広がり小さい 外面 脚部-縦位のヘラミガキ 内面 裾部-ナデに近いハケ 接合部-ヘラケズリ	暗褐色 青		脚部片	

1-009

検出地区 D7-53G。台地平坦部に立地する。調査範囲南側の道路状の細い調査区に位置する。一部調査区外に遺構が延びている。周辺の遺構として、1-010等がある。

遺構 隅丸方形の小型の住居跡と思われる。床は、ロームと暗褐色土との混合土による貼床で一部に硬化面を検出。壁は、ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がっている。炉は、調査範囲内では検出されなかった。主柱穴、出入口等は不明である。周溝は一部で検出した。P1は重複する他の土坑である。

覆土は色調を基本とし、17層に分層された。土層断面から2, 3, 9, 11層はP1に関わる覆土で、更に新しい遺構(1層)も重複していることが判明した。住居跡そのものに関わる覆土は11層である。床面から焼土、炭化材等を検出したことから、人為的な埋め戻しが想定される。

遺物 覆土中から少量(30点程度)に出土している。

所見 出土遺物から古墳時代初頭の堅穴住居跡と判断した。

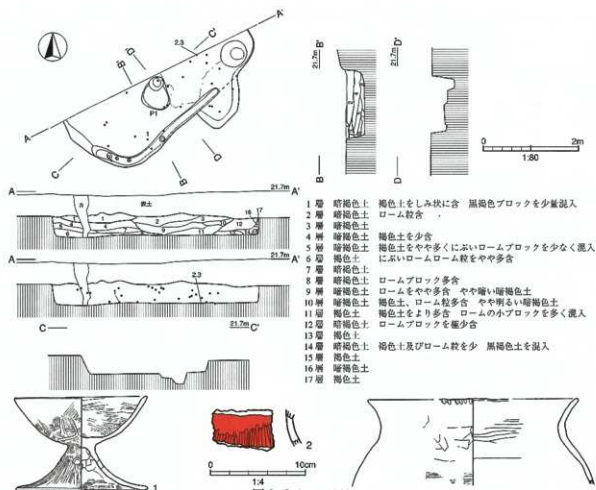


表 2-2-26 1-009遺物観察表

図 2-2-35 1-009

(単位mm)

No.	種別 器形	法量 成 形・調 整 等 の 特 徴	口徑×底徑×器高	色 調 焼 成	胎 土	遺 存	備 考
1	土師器 坏	縦やかに広がる 外面 坏部-横ナデ後ハケ 一部ハケ後ナデ 脚部-ハケ後ヘラミガキ 裾部-ハケ 接合部-ヘラズリ 内面 口縁-頸部-ヘラナデ後ヘラミガキ	138×139×99	暗褐色 普	細砂粒	略完形	
2	土師器 壺	外面 縦位のヘラミガキ 内面 横位のヘラミガキ	—×—×—	暗褐色 良	砂粒	頸部片	外面に赤彩有り
3	土師器 壺	外面 口縁-錐状工具による押圧 頸部-ハケ後ヘラナデか? 内面 ヘラナデ	(218)×—×(92)	褐色 普	砂粒	口縁片	

### 5-003

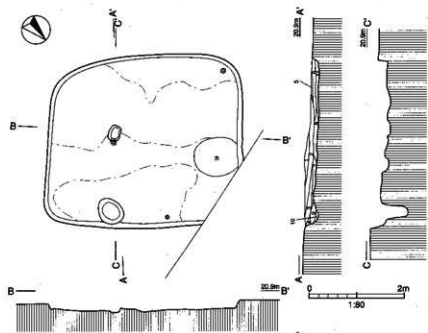
**検出地区** D6-6G。台地縁辺部の緩斜面地に立地する。一部中近世以降の溝と重複し、切られている。周辺の遺構として、5-004等がある。

**遺 構** 隅丸方形の小型の住居跡と思われる。床は、ロームを良く踏み固めた床で硬化面を広範囲に検出。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がっている。炉は、地床炉で、住居跡中央からやや南に寄る。主柱穴、出入口等は不明である。周溝は検出されなかった。

覆土は色調を基本とし、11層に分層された。床面から焼土、炭化材等を検出したことから、人為的な埋め戻しが想定される。

**遺 物** 床面直上～覆土上層にかけて多量(280点程度)に出土している。

**所 見** 出土遺物から古墳時代初頭の堅穴住居跡と判断した。



- 1 層 黒色土 暗褐色土が混むように混合
- 2 層 黒褐色土 黒色土と少量の暗褐色土が混合
- 3 層 暗褐色土 黒色土少量含ったロームも部分的に混合
- 4 層 暗褐色土 少量の褐色土が混むように混入
- 5 層 暗黄褐色土 暗褐色土と褐色土が混合
- 6 層 暗褐色土 暗褐色土と濁ったローム混合
- 7 層 暗褐色土 暗褐色土と濁ったローム混合  
ローム粒少量
- 8 層 暗赤褐色土 暗褐色土に灰土が混合  
火を降すための消化層と考えられる
- 9 層 暗褐色土 黒色土と少量の暗褐色土が  
ほぼ均一に混合
- 10 層 暗褐色土 暗褐色土と極少量の濁った  
ロームが混合
- 11 層 暗黄褐色土 濁ったローム主体 暗褐色土少量

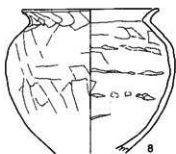
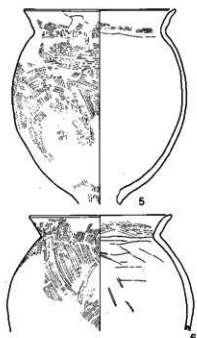
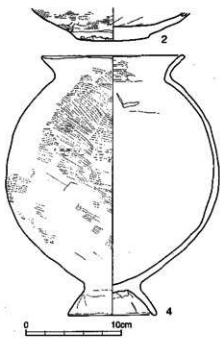
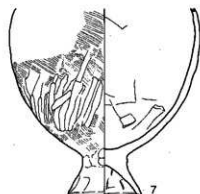
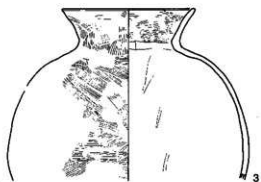
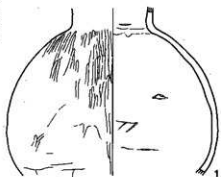
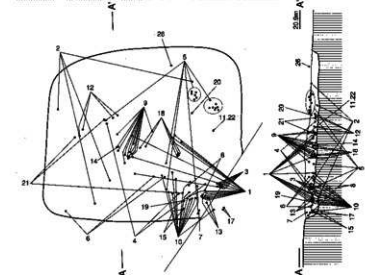


図 2-2-37 5-003

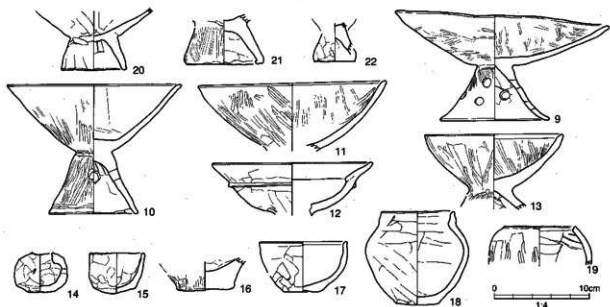


図 2-2-38 5-003

表 2-2-27 5-003遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 盃	球駒状を呈する 器面の劣化が著しく残存状態は良くない 外面 ヘラミガキ 内面 ヘラナデ	—×—(179)	橙褐色	白色粒 橙色粒	1/3	
2	土師器 盃	外面 胴下半—ハケ 胴下端—ヘラケズリ 底部—本葉痕? 内面 ヘラナデ	—×76×(35)	橙褐色	砂粒	底部片	内面スス付着
3	土師器 盃	口縁外反 頸部「く」の字状 外面 口縁—横ナデ 頸部—胴下半—ハケ 内面 口縁—ハケ 胴部—ヘラナデ	(138)×—×(182)	暗褐色	白色粒 橙色粒多	1/4	
4	土師器 台付盃	口縁強く外反 頸部「く」の字状 胴部球駒状 脚部は短い「ハ」の字状 外面 口縁—横ナデ 頸部—胴下半—ハケ 脚部—ヘラナデ 内面 口縁—ハケ 頸部—胴下半—ヘラナデ	(149)×91×275	橙褐色	白色粒 橙色粒多	1/3	全体に器面の 摩耗が著しく 調整は不鮮明
5	土師器 台付盃	口縁外反 頸部「く」の字状 外面 口縁—横ナデ 頸部—胴下半—ハケ 内面 口縁—ハケ 頸部—胴下半—ヘラナデ	(158)×—×(207)	橙褐色	砂粒 白色粒 橙色粒	1/3	全体に器面の 摩耗が著しい
6	土師器 盃	口縁外反 頸部「く」の字状 外面 口縁—横ナデ 頸部—胴上半—ハケ 内面 口縁—ハケ 頸部—胴上半—ヘラナデ	(149)×—×(123)	橙褐色 昔	砂粒 橙色粒	口縁— 胴部片	外面スス付着
7	土師器 台付盃	脚部短い「ハ」の字状 外面 胴上半—ハケ 下半—下端—ハケの後縁らにヘラケズリ 脚部—ヘラナデ 内面 胴部—ヘラナデ 脚部—ヘラケズリ	—×77×(198)	橙褐色 昔	砂粒 白色粒	1/3	
8	土師器 盃	口縁外反 胴上部が張る 外面 口縁—横ナデ 頸部—胴下半—ヘラナデ 内面 口縁—横ナデ 頸部—胴下半—ヘラナデ 輪積痕	(147)×—×(153)	橙褐色 昔	白色粒		
9	土師器 高坏	通し孔上下2個と1個の孔を交互に計9個配置 外面 口縁—横ナデ 体部—脚部—ヘラミガキ 裾部下端—横ナデ 内面 口縁—横ナデ後ヘラミガキ 脚部接合部—ヘラケズリ 裾部—ヘラナデ	224×115×118	橙褐色	砂粒 白色粒	略定形	赤彩? (全体に 器面の劣化が著 しく不確か)
10	土師器 高坏	通し孔残存3個 坏部は直線的に開き、深い 外面 口縁—横ナデ後ヘラミガキ 体部—脚部—ヘラミガキ 下端—横ナデ後ヘラミガキ 内面 口縁—横ナデ後ヘラミガキ 脚部接合部—ヘラケズリ 裾部—ヘラナデ	182×94×137	暗橙褐色 昔	砂粒 白色粒	2/3	
11	土師器 高坏	体部やや内湾気味に開く 口縁内削ぎ状 外面 口縁—横ナデ後ヘラミガキ 体部—ヘラミガキ 下端—ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 口縁—横ナデ後ヘラミガキ 体部—ヘラミガキ	190×—×(75)	暗橙褐色 昔	赤色粒	坏部片	



12	土師器 高坏	168×-×(55) 複合口縁で体部との境に突帯を貼付 内面は段を有する 全体に器面の劣化が著しく調整不鮮明 外面はハケあるいはヘラナデ後ヘラミガキか? 内面もナデ後ヘラミガキと思われる	橙褐色	砂粒 赤色粒 白色粒	坏部片	
13	土師器 高坏	144×-×80 口縁内削ぎ状 体部やや内湾気味に開き、口縁立ち上がる 比較的厚手の作り 外面 口縁-横ナデ後ヘラミガキ 体部-脚部-ヘラミガキ 内面 坏部-ヘラミガキ 接合部-ヘラケズリ	橙褐色	砂粒 白色粒	1/3	
14	土師器 ミニチュア ア登	23×32×42 断面楕円状を呈し、口縁部は狭い 口唇はややつまみ上げられたような形状 ヘラ及び指頭によるナデ調整 胴部中央にヘラ状工具により長さ5mm、幅1mm程の孔が外面から穿たれる	橙褐色	砂粒	4/5	手握ね
15	土師器 ミニチュア	(57)×44×43 砂がんだ円筒状を呈する 指頭によるナデ調整	橙褐色	砂粒		手握ね
16	土師器 甕	-×60×(33) 平底 外面 胴下端-ハケ 内面 胴下端-ヘラナデ	④暗茶褐色 ⑤暗褐色	砂粒 白色粒	底部片	
17	土師器 小形鉢	(91)×38×53 体部丸みを持ち口縁部立ち上がる 外面 口縁-横ナデ 体部-ヘラケズリ 内面 口縁-横ナデ 頸部-ヘラナデ	暗褐色 橙褐色	砂粒 白色粒	3/4	
18	土師器 小型甕	(77)×45×100 口縁やや内傾 胴上半に膨らみを持つ 外面 口縁-横ナデ 頸部-胴下半-ヘラケズリ 内面 口縁-横ナデ ヘラナデ	橙褐色	砂粒 白色粒	3/4	黒斑あり
19	土師器 小形甕	76×-×(40) 口縁内湾し上端やや立ち上がる 外面 口縁-横ナデ 頸部-ヘラケズリ後縦位のヘラミガキ 内面 口縁-横ナデ 頸部-ヘラナデ	橙褐色	砂粒 白色粒		
20	土師器 台付甕	-×69×(65) 脚部内湾 外面 胴下端-ヘラケズリ 脚部-ヘラケズリ? 内面 胴下端-ヘラケズリ 接合部-ヘラケズリ 裾部-ヘラナデ	橙褐色	砂粒 白色粒	脚部~ 脚部片	
21	土師器 台付甕	-×80×(52) 脚部「ハ」の字状 外面 脚部-ハケ 脚部底面の粘土が粗く内側に折り込まれる 内面 脚部-ヘラケズリ	④暗茶褐色 ⑤橙褐色	砂粒 白色粒	脚部片	
22	土師器 ミニチュア 台付甕	-×(43)×(41) 脚部内湾 内外面 脚部-ヘラケズリ	暗褐色	砂粒	脚部片	

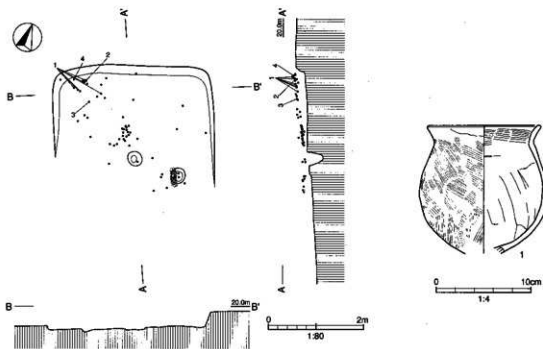


図 2-2-39 5-004

表 2-2-28 5-004遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法 量 口径×底径×器高 成 形・調 整 等 の 特 徴	色 調 焼 成	胎 土	遺 存	備 考
1	土師器 甕	(118)×—×(136) 口縁よりやや立ち上がり気味に小さく外反 胴部 縁やかに「く」の字状 胴部球胴状 外面 口縁—横ナデ 頸部—別 部—ハケ 内面 口縁—横ナデ 胴部—ヘラナデ	⑤褐褐色 ⑤赤褐色 やや赤	砂粒	口縁～ 胴部片	
2	土師器 壺	—×(68)×(39) 外面 胴部下端—ヘラケズリ後ヘラミガキ	⑤灰褐色 ⑤褐色 普		底部片	
3	土師器 壺	—×50×(70) 外面 胴下半—斜位のヘラケズリ	褐 良	緻密	胴部～ 底部	
4	土師器 甕	—×—×— 内面 ナデ ミガキ	褐 普		口縁片	

## 5-004

検出地区 D9-7G。台地縁辺部の緩斜面地に立地する。周辺の遺構として、5-003等がある。

遺 構 隅丸方形の小型の住居跡と思われる。床は、ロームを踏み固めた床で若干、凹凸がある。壁は、ロームの壁で斜めに立ち上がっている。炉は、地床炉で、住居跡中央からやや東に寄る。主柱穴、出入口等は不明である。周溝は検出されなかった。

床面から焼土、炭化材等を検出したことから、人為的な埋め戻しが想定される。

遺 物 覆土下層～覆土上層にかけて少量(40点程度)に出土している。

所 見 出土遺物から古墳時代初頭の竪穴住居跡と判断した。

## 4-005

検出地区 D5-7G。台地縁辺部の緩斜面地に立地する。周辺の遺構として、8-005等がある。

遺 構 隅丸長方形の中型の住居跡である。床は、ロームと暗褐色土との混合土による粘床で、やや軟弱である。炉の周囲はやや低い。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がっている。炉は、地床炉で、住居跡中央からやや南に寄る。主柱穴、出入口等は不明である。周溝は検出されなかった。

覆土は、色調を基本に9層に分層され、床面から焼土、炭化材等を検出したことから、人為的な埋め戻しの後、自然堆積による埋没が想定される。

遺 物 覆土中から少量(70点程度)に出土している。

所 見 出土遺物から弥生時代後期～古墳時代初頭の竪穴住居跡と判断した。

## 8-002

検出地区 D5-83G。台地平坦面に立地する。周辺の遺構として、8-005等がある。

遺 構 隅丸長方形の中型の住居跡である。床は、ロームと少量の黒色土との混合土による粘床で、速度に踏み固められた床である。炉の周囲で硬化面を検出。壁は、ロームの壁で斜めに立ち上がっている。炉は、地床炉で、住居跡中央からやや東に寄る。P1は、貯蔵穴と考えられる。主柱穴、出入口等は不明である。周溝は検出されなかった。

覆土は、色調を基本に7層に分層され、自然堆積による埋没が想定される。

遺 物 覆土中から少量(20点程度)に出土している。貯蔵穴内から台付甕(1)が横転した状態で出土した。住居跡廃絶時に貯蔵穴内に転倒したものと考えられる。

所 見 出土遺物から古墳時代初頭の竪穴住居跡と判断した。

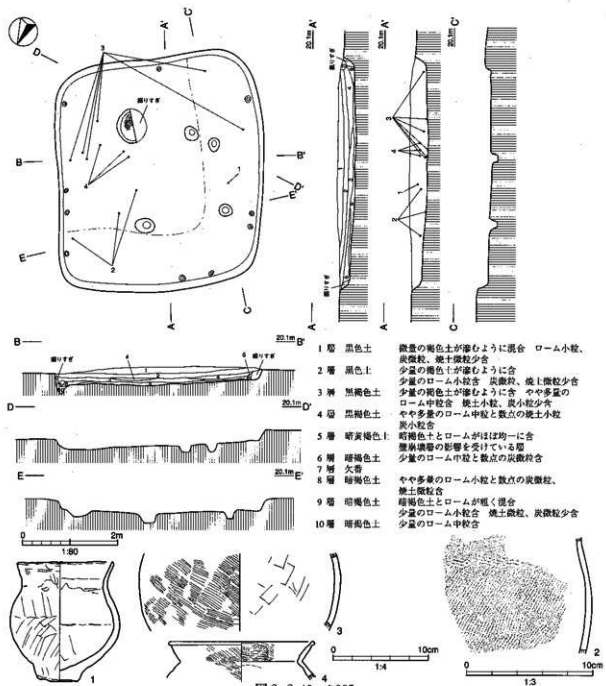


図 2-2-40 4-005

表 2-2-29 4-005遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 成形・調整等の特徴	口径×底径×器高	色調 或	胎土	遺存	備考
1	弥生 小型甕	99×40×126 口縁外反上端でやや内湾 球胴状 底部ですぼまり台 状をなす 外面 口縁-横ナア後ヘラナア 胴上半-ヘラナア 下半 一筋のヘラケズリ 底部-ヘラケズリ 内面 口縁-横ナア 胴上半-ヘラナア 下半-一部輪轆直		暗褐色 良	砂粒	略完形	底部 粘土付着 粒数僅あり
2	弥生 甕	-X-X- 外面 頸部-横ナア 胴上半-結節2段 内面 頸部-ヘラナア		砂暗褐 或茶褐 昏	砂粒	胴部片	
3	弥生 甕	-X-X-(82) 外面 胴下半-ハケ 内面 胴下半-ヘラナア		暗茶褐 昏	砂粒 白色粒	胴部片	
4	弥生 甕	(151)X-X(41) 口縁外反上端外面にやや屈曲 外面 口縁-横ナア ハケ 頸部-ハケ 内面 口縁-ハケ 頸部-ナア		暗褐色 昏	砂粒 白色粒	口縁片	

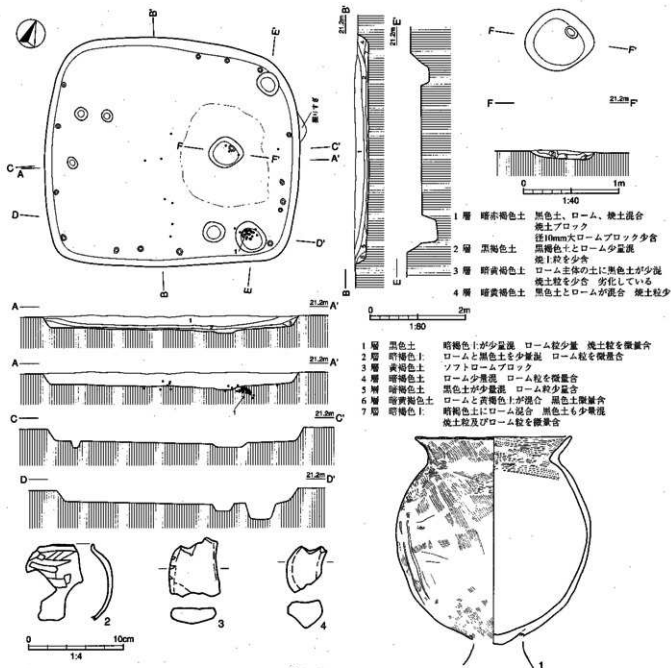


図 2-2-41 8-002

表 2-2-29 4-005遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 台付壺	162×-×(221) 頭部「く」の字状 球形状 外面 口径一ハケ状工具により斜めに刻み 頭部一胴部一ハケ 内面 口径一ハケ 頭部一胴部一ヘラナデ	青	砂粒 赤色粒	2/3	外面コゲ状及び スス付着 内面スス付着
2	土師器 小形甕	-×-×- 内外面ともナデ調整	淡褐 良	赤色スコ リア少	口縁一 胴部片	
3	土製品 不明	高さ(26)×幅24×厚さ8			破片	NO.4と接合
4	土製品 不明	高さ(17)×幅18×厚さ14			破片	NO.3と接合

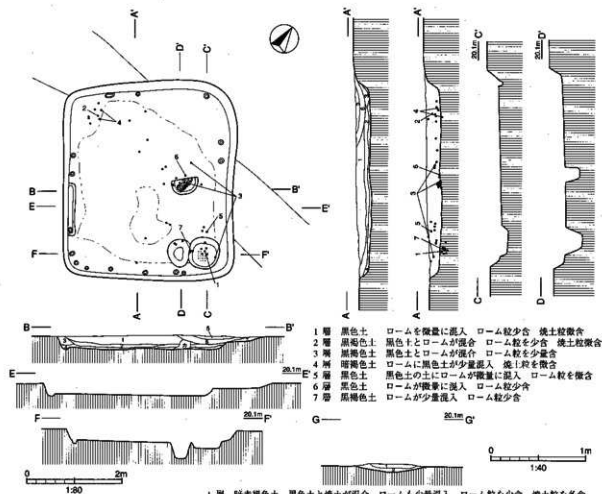


図 2-2-42 8-005

8-005

検出地区 D5-46G。台地縁辺部の緩斜面地に立地する。周辺の遺構として、8-006等がある。

遺 構 隅丸長方形の小型の住居跡である。床は、ロームと暗褐色土との混合土による貼床で、やや軟弱である。炉の周囲はやや低い。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がっている。炉は、地床炉で、住居跡中央からやや東に寄る。P1は、貯蔵穴と考えられる。支柱穴、出入口等は不明である。周溝は住居跡西壁側で一部検出された。

覆土は、色調を基本に4層に分層され、自然堆積による埋没が想定される。

遺 物 覆土中から少量(40点程度)に出土している。貯蔵穴内から白色粘土塊を検出している。

所 見 出土遺物から古墳時代初頭の堅穴住居跡と判断した。

8-006

検出地区 D5-35G。台地縁辺部に立地する。周辺の遺構として、8-005等がある。住居跡の一部は調査区外に延びている。

遺 構 隅丸方形の小型の住居跡と思われる。床はロームと少量の暗褐色土との混合土による貼床である。壁は、ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がっている。炉、支柱穴、出入口等は検出されなかった。

覆土は、色調を基本に4層に分層され、焼土等が検出されていることから、人為的な埋め戻しの後に、自然堆積による埋没が想定される。

遺 物 覆土中から少量(20点程度)に出土している。

所 見 炉は検出されていないが、出土遺物等から古墳時代初頭の堅穴住居跡と判断した。

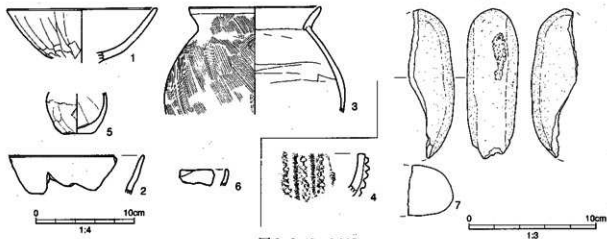


図 2-2-43 8-005

表 2-2-31 8-005遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1	土師器 高坏	156×-×(58) 柄状を呈する深めの坏 内外面とも器面の摩耗が見られる 外面 ヘラケズリ後ヘラミガキ 内面 ヘラナデ後ヘラミガキと思われるが不鮮明	投縄 音	砂粒 赤色粒 白色粒	1/2	
2	古式 土師器 高坏	-×-×- 外面 口唇-横ナデ 口縁-縦位のヘラミガキ 内面 丁寧なヘラミガキ	砂暗黒 砂暗赤褐 良	緻密	口縁片	
3	土師器 甕	(138)×-×(113) 口縁外反 頸部「く」の字状 胴部丸み帯びる 外面 口縁-横ナデ 頸部-胴上半-ハケ 内面 口縁-横ナデ 頸部-胴上半-ヘラナデ	投縄 音	砂粒 赤色粒 白色粒	口縁- 胴部	
4	土師器 壺	-×-×- 複合口縁 棒状浮文貼付更に浮文に縄文原体の押圧 内面 丁寧なミガキ後赤彩	砂淡褐 砂赤		口縁片	赤彩 内面
5	土師器 ミニチュ ア	159×30×45 外面 指頭及びヘラによる調整 内面 ヘラナデ	投縄 音	砂粒 白色粒		黒斑あり
6	土師器 ミニチュ ア?	-×-×- 手捏ねのミニチュア土器と思われるが用途不明	縄 音		口縁片	
7	石器 磨石	長軸119×短軸36×厚さ40 重量218.2g 半分ほど欠くが長楕円形を呈するものと思われる 残存部のほぼ全面に 研磨痕が見られる 側縁の一部に弱い敲打痕もあり			1/2	

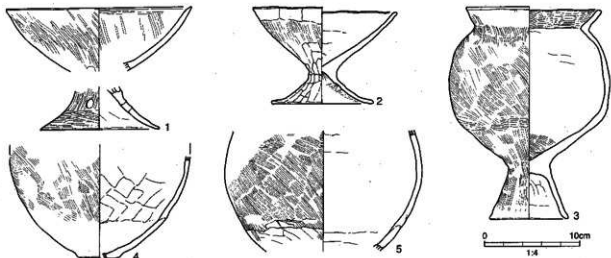


図 2-2-44 8-006

表 2-2-32 8-006遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法量 □径×底径×器高 或 形・調整等の特徴	色調 焼成	胎土	遺存	備考
1-1	土師器 高坏	(193)×—×(68) □径内削ぎ状 外面 □縁-横ナデ 頸部-ヘラケズリの後ヘラミガキ 内面 □縁-横ナデの後ヘラミガキ 頸部-ヘラミガキ	暗褐色 青	砂粒 白色粒	坏部片	赤彩?
1-2	土師器 高坏	—×124×(45) 裾部広がる 透かし孔3個 外面 脚部-縦位のヘラミガキ 裾部-横位のヘラミガキ 内面 ヘラナデ	砂明赤褐 砂暗褐色 青	砂粒 白色粒	胴部片	
2	土師器 高坏	150×104×103 坏部ラッパ状に開き歪む 脚部低く急傾斜で開く 外面 □縁-横ナデ 体部-ハケ 接合部-ヘラケズリ 内面 □縁-横ナデ 体部-ヘラナデ 裾部-ハケ	暗褐～ 茶褐 青	砂粒 白色粒	略完形	外面コゲ及び スス付着
3	土師器 台付壺	138×80×226 胴部「く」の字状 胴中がんだ球状 脚部「ハ」の 字状 外面 □縁-ハケ後横ナデ 頸部～胴下端-ハケ 脚部-ハケ 裾部-横ナデ 内面 □縁-ハケ 頸部～胴下半-ヘラナデー部輪積 痕 下端-ハケ 接合部-ヘラケズリ 裾部-ヘラナデ	暗褐 青	砂粒 白色粒	略完形	
4	土師器 壺	—×(42)×(120) 胴部丸みを持つ 底部は平底で小さい 外面 胴下半-ハケ 胴下端-ヘラナデ 内面 胴下半-ヘラナデ 胴下端-一部輪積痕	暗褐 青	砂粒 白色粒	胴部～ 底部	
5	土師器 壺	—×—×(128) 球胴状を呈する 外面 胴下半-ハケ 輪積痕 胴下端-ヘラケズリ 内面 胴下半-ヘラナデ 胴下端-輪積痕	燈褐～ 暗褐 青	砂粒	胴部片	外面コゲ及び スス付着

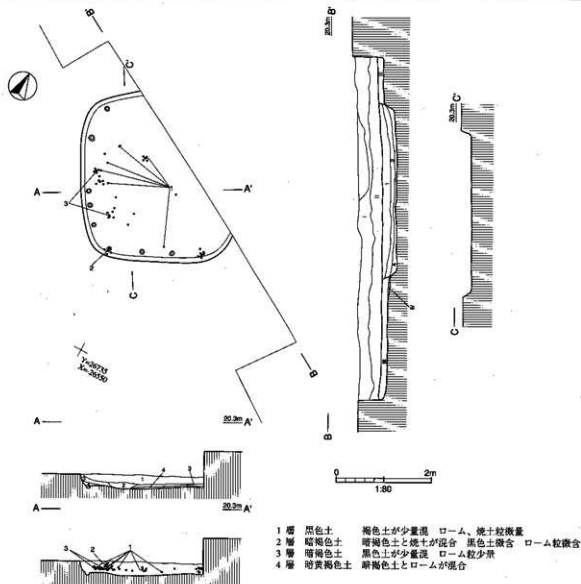


図 2-2-45 8-006

表 2-2-33 弥生時代整穴住居跡一覧表

(単位m)

遺構番号	検出調査区	平面形 規模：長軸×短軸×壁高 遺物の状況	住居跡の状況 覆土の状況	築造施設・位置 周溝・備考
6-001	C4-69	不整形 3.35×2.47×0.38 主軸 N-132°-E	床 ロームを踏み固めた床で、住居跡中央で硬化面を検出。 壁 ロームの壁で斜めに立ち上がる	地床が 住居跡中央から北に寄る 周溝 検出されず 主柱穴 検出されず
		床面直上～覆土下層にかけて少量出土	色調を基本に5層に分層。人為的な埋め戻しの後、自然堆積が考えられる	
7-009	C5-43	隅丸長方形 5.72×4.13×0.62 主軸 N-43°-W	床 ロームをよく踏み固めた床。住居跡中央で硬化面が広範囲に広がる 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる	地床が 住居跡中央からやや北に寄る 周溝 一部検出 周溝幅 15cm 主柱穴 1本検出
		床面直上から覆土層にかけて多量に出土	色調を基本に6層に分層。人為的な埋め戻しの後、自然堆積が考えられる	
6-005	E4-84	隅丸長方形 5.24×3.76×0.68 主軸 N-56°-W	床 ロームをよく踏み固めた床。住居中央で硬化面を広く範囲に検出。中央部が若干凹む 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる	地床が 住居跡中央からやや北に寄る 周溝 一部検出 周溝幅 18cm 主柱穴 4本柱
		覆土中から比較的少量に出土	色調を基本に概ね8層に分層。人為的な埋め戻しの後、概ね自然堆積が考えられる。	
6-002	C5-08	小判形 4.88×4.09×0.84 主軸 N-46°-W	床 ロームをよく踏み固めた床。住居中央で硬化面を検出 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる	地床が 住居跡中央からやや北に寄る 周溝 一部検出 周溝幅 11cm 主柱穴 2本柱
		覆土中から小破片が少量出土	色調を基本に概ね4層に分層。自然堆積による埋没が想定される。	
6-003	C5-17	小判形 5.68×4.50×0.86 主軸 N-36°-W	床 ロームを踏み固めた床。住居中央で硬化面を検出 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる	地床が 住居跡中央からやや北側に2基検出 周溝 一部検出 周溝幅 11cm 主柱穴 2本柱
		覆土中から小破片を中心に少量出土	色調を基本に概ね7層に分層。自然堆積による埋没が想定される。	
6-004	C5-06	小判形 5.89×4.86×0.93 主軸 N-51°-W	床 ロームをよく踏み固めた床。住居跡中央で硬化面を広く範囲に検出 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる	地床が 住居跡中央からやや北に寄る 周溝 一部検出 周溝幅 6cm 主柱穴 4本柱
		覆土中に小破片が少量出土 覆土中に墨書土器が出土	色調を基本に概ね4層に分層。人為的な埋め戻しの後、自然堆積が考えられる	
6-008	C5-14	長丸長方形 5.24×4.68×0.76 主軸 N-52°-W	床 ロームをよく踏み固めた床。住居跡西側で硬化面を検出 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる	地床が 住居跡中央からやや北に寄る 周溝 一部検出 周溝幅 12cm 主柱穴 4本柱
		覆土中から少量出土	色調を基本に概ね6層に分層。人為的な埋め戻しの後、自然堆積が考えられる	
6-009	C5-04	小判形 6.00×5.32×0.57 主軸 N-36°-W	床 ロームを踏み固めた床でドーナツ状に硬化面が広がる 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる	地床が 住居跡中央からやや北に寄る。2基検出 周溝 ほぼ全周する 周溝幅 12cm 主柱穴 4本柱
		覆土中から少量出土	色調を基本に概ね6層に分層。人為的な埋め戻しの後、自然堆積が考えられる	
7-001	C5-42	隅丸長方形 7.68×6.06×0.58 主軸 N-28°-W	床 ロームをよく踏み固めた床。硬範囲を住居跡中央部に硬範囲に検出 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる	地床が 住居跡中央からやや北に寄り2基検出 周溝 一部検出 周溝幅 16cm 主柱穴 4本柱
		床面直上～覆土にかけて少量出土	色調を基本に概ね4層に分層。概ね自然堆積による埋没が想定される	
7-002	C5-32	隅丸長方形 4.86×4.14×0.66 主軸 N-39°-W	床 ロームをよく踏み固めた床。住居中央で硬化面を検出。 壁 ロームの壁で斜めに直線的に立ち上がっている	地床が 住居跡中央からやや北に寄る 周溝 一部検出 周溝幅 18cm 主柱穴 4本柱
		覆土下層～上層にかけて少量出土	色調を基本に概ね7層に分層。自然堆積による埋没が想定される	



7-006	C4-99	小判形 4.50×3.95×0.55 主軸 N-32°-W	尖に硬化面を検出 壁 ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる	地床伊 住居跡中央から やや北に寄る。2基検出 周溝 検出されず 主柱穴 4本柱
		覆土下層を中心に少量出土	色調を基本に概ね6層に分層。人為的な埋め戻しの後、自然堆積が考えられる。	
7-004	C5-13	隅丸長方形 4.76×4.02×0.68 主軸 N-62°-W	床 ロームをよく踏み固めた床。中央部に 硬化面を検出 壁 ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる	地床伊 住居跡中央から 西側による 周溝 一部検出 周溝幅 14cm 主柱穴 4本柱
		覆土下層～上層にかけて少量出土	色調を基本に概ね5層に分層。人為的な埋め戻しの後、自然堆積	
7-003	C5-11	不整形円形 4.80×4.84×0.43 主軸 N-46°-W	床 ロームを踏み固めた床。住居跡南側に 硬化面を一部検出 壁 ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる	地床伊 住居跡中央から やや北に寄る。2基検出 周溝 一部検出 周溝幅 24cm 主柱穴 検出されず
		覆土下層～上層にかけて少量出土	色調を基本に概ね7層に分層。自然堆積による埋没が想定される	
7-005	C5-02	不整形円形 4.42×4.46×0.28 主軸 N-42°-W	床 ロームを踏み固めた床。住居跡中央から 南側にかけて硬化面を検出 壁 ロームの壁で斜めに立ち上がる	地床伊 住居跡中央から やや北西に寄る 周溝 一部検出 周溝幅 16cm 主柱穴 検出されず
		覆土下層～上層にかけて少量出土	色調を基本に概ね4層に分層。自然堆積による埋没が想定される。	
6-006	C4-93	不整形円形 3.10×3.28×0.12 主軸 N-40°-W	床 ソフトロームの軟弱な床 壁 斜めに立ち上がる。掘込みの浅い住居	伊 検出されず 周溝 検出されず 主柱穴 検出されず
		覆土中から小破片が少量出土	色調を基本に概ね1層に分層。自然堆積による埋め戻しが想定される	
6-010	C5-15	不整形方形 2.94×3.18×0.22 主軸 N-79°-W	床 ソフトロームの軟弱な床 壁 ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上る 掘込みの浅い住居跡	地床伊 住居跡ほぼ中央 周溝 住居西側で一部検出。 周溝幅 14cm 主柱穴 検出されず
		覆土中から少量出土	色調を基本に概ね3層に分層。概ね自然堆積による埋没が考えられる。	
7-008	C5-52	隅丸方形 一×3.24×0.14 主軸 N-8°-E	床 ソフトロームと暗褐色土の混合土による床。住居跡中央部は踏み固められ、周囲は やや軟弱 壁 ソフトロームの壁。斜めに立ち上がる	地床伊 住居跡中央から やや北に寄る 周溝 検出されず 主柱穴 検出されず
		覆土中から小破片を中心に少量出土	色調を基本に概ね3層に分層。自然堆積による埋没が想定される。	
7-007	C4-92	隅丸長方形 2.32×2.00×0.40 主軸 N-12°-E	床 ロームの平坦な床 壁 ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる	伊 検出されず 周溝 検出されず 主柱穴 検出されず
		床面直上～覆土上層にかけて少量出土	色調を基本に概ね5層に分層。自然堆積による埋没が想定される。	
9-006	C5-96	一形 一×一×0.51	床 ロームと暗褐色土が混じった粘土で平坦 壁 ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる	伊 検出されず 周溝 一部検出 周溝幅 12cm 主柱穴 検出されず
		覆土中から小破片が少量出土	色調を基本に4層に分層 自然堆積による埋没が想定される	
1-005a	D7-16	一形 2.48×3.4×0.4 主軸 N-51°-W	床 ロームをよく踏み固めた床で、伊の周 辺で硬化面を一部検出 壁 ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる	地床伊 住居跡中央から やや北西に寄る 周溝 検出されず 主柱穴 検出されず
		覆土中から多量に出土	色調を基本に概ね7層に分層 人為的な埋め戻しの後、自然堆積	
1-012b	D7-84	一形 一×一×0.42 主軸 N-37°-W	床 ロームと黒色土が混じった土で、貼り 床とする 壁 ロームの壁ではほぼ垂直に立ち上がる	伊 検出されず 周溝 ほぼ無検出する 周溝幅 16cm 主柱穴 検出されず
		覆土中から少量出土	色調を基本に9層に分層	

1-011	D7-74	隅丸方形 4.20×4.02×0.53 主軸 N-41°-W 覆土中から多量に出土しているが、本住居に伴う遺物は少ない	床 ロームを主体とした貼り床で、住居中央に硬化面を検出。周囲についてはやや軟弱 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる 色調を基本に3～2層に分層 概ね自然堆積と考えられる	地床炉 住居中央からやや北に寄る 周溝 ほぼ全周する 周溝幅 12cm 主柱穴 検出されず
1-013	D7-85	隅丸方形 4.72×4.32×0.4 主軸 N-50°-W 床面直上～覆土上層にかけて多量に出土	床 ロームを主体とした貼り床で、3カ所で硬化面を検出 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる 色調を基本に18層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	地床炉 住居中央から西側に寄る 周溝 ほぼ全周する 周溝幅 12cm 主柱穴 検出されず
1-010	D7-64	隅丸方形 4.08×××0.42 主軸 N-58°-E 覆土中から多量に出土	床 ロームを主体とした貼り床で、硬化面が全体的に広がる 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる 色調を基本に28層に分層 人為的な埋め戻しの後自然堆積による埋没	地床炉 住居中央から西側に寄る 周溝 ほぼ全周する 周溝幅 12cm 主柱穴 検出されず
1-009	D7-53	隅丸方形 ×××0.28 覆土中から少量出土	床 ロームと暗褐色土の混合土による貼り床で、一部に硬化面を検出 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる 色調を基本に17層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	炉 検出されず 周溝 一部で検出 周溝幅 15cm 主柱穴 検出されず
5-003	D6-06	隅丸方形 3.62×4.06×0.16 主軸 N-134°-W 床面直上～覆土中にかけて多量に出土	床 ロームをよく踏み固めた床で、硬化面が概範囲に広がる。炉の周辺が若干低い 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる 色調を基本に11層に分層 人為的な埋め戻しが想定される	地床炉 住居中央からやや西に寄る 周溝 検出されず 主柱穴 検出されず
5-004	D6-07	隅丸方形 ××3.38×0.28 主軸 N-20°-W 覆土下層から上層にかけて少量出土	床 ロームを踏み固めた床。若干凹みがある 壁 ロームの壁で斜めに立ち上がる 人為的な埋め戻しが想定される	地床炉 住居中央からやや東に寄る 周溝 検出されず 主柱穴 検出されず
4-005	D5-67	隅丸長方形 4.90×4.38×0.22 主軸 N-155°-E 覆土中から少量出土	床 ロームと暗褐色土の混合土による貼り床。やや軟弱で炉の周辺はやや低い 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる 色調を基本に9層に分層。人為的な埋め戻しの後自然堆積したものと思われる	地床炉 住居中央からやや西に寄る 周溝 検出されず 主柱穴 検出されず
8-002	D5-83	隅丸長方形 5.38×4.86×0.23 主軸 N-72°-E 床面直上～覆土上層にかけて少量出土 貯蔵穴内に暗褐色の燧石	床 ロームと少量の黒色土の混合土による貼り床で、適度に踏み固めた床炉の周囲で硬化面を検出 壁 ロームの壁で斜めに立ち上がる 色調を基本に7層に分層 自然堆積による埋没が想定される	地床炉 住居中央からやや東による 周溝 検出されず 主柱穴 検出されず
8-005	D5-46	隅丸長方形 4.20×3.56×0.22 主軸 N-56°-E 覆土中から少量出土 貯蔵穴から白色粘土塊検出	床 ロームを踏み固めた床。住居中央でやや凹んでいる 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる 色調を基本に4層に分層 自然堆積による埋没が想定される	地床炉 住居中央部からやや東による 周溝 一部で検出 周溝幅 18cm 主柱穴 検出されず
8-006	D5-35	隅丸方形 3.60××× 主軸 N-28°-W 覆土中から少量出土	床 ロームに少量の暗褐色土が混じった床 壁 ロームの壁でほぼ垂直に立ち上がる 色調を基本に4層に分層。人為的な埋め戻しの後、自然堆積が進んだと考えられる	炉 検出されず 周溝 検出されず 主柱穴 検出されず

(2) 土坑

境掘遺跡で検出された弥生・古墳時代の土坑は合計3基で、弥生時代後期の土坑が2基、古墳時代前期の土坑が1基である。弥生時代の2基の土坑については遺物の出土状況から、土坑墓と考えられる。以下、個別の報告に移る（古墳時代の土坑については1-013の項で同時に報告済）。

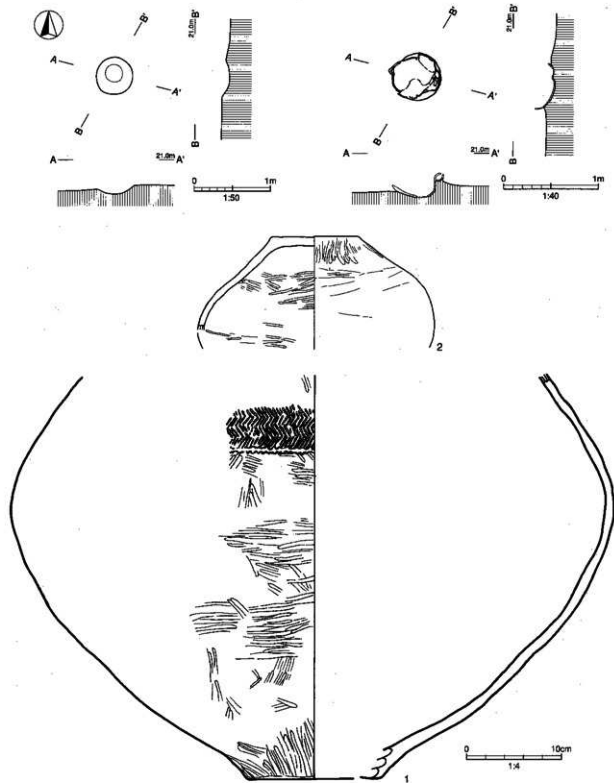


図2-2-46 6-011

表 2-2-34 6-011遺物観察表

(単位mm)

No	種別 器形	法 量 口径×底径×器高 成 形・調 整 等 の 特 徴	色 調 焼 成	胎 土	遺 存	備 考
1	弥生 甕	—×(140)×(430) 断面背盤玉状に胴中位が張る 外面 胴上半—ヘラミガキ→羽状縄文→結節2段 胴下半—下端—ヘラ ミガキ 内面 器面の剥離著しく不明 ヘラナダか	暗褐色	粗砂粒	胴部～ 底部片	赤彩 外面 縄文施文部以外 は赤彩か？
2	弥生 壺	—×(91)×(118) 胴中位楕円状に膨らみ下半傾斜をもちすぼまる 外面 ヘラナダの後ヘラミガキ 内面 ヘラナダの後線らにヘラミガキ	暗褐色		1/4	外面コゲ及び スス附着

## 6-011

**検出地区** C5-4G。台地平坦部に立地する。周辺の弥生・古墳時代の遺構として、6-008、6-009等がある。

**遺 構** 不整形円形の小型の土坑で浅い皿状の丸底の土坑である、表土除去の際に既に上部を掘取った可能性が高い。形状は出土した出土した壺形土器に合わせた状況で、西側が緩やかに、東側が急傾斜で立ち上がる。坑底に小穴等の付属施設は検出されなかった。

覆土は暗褐色土が充填されていたが、土坑の規模が壺形土器と同じ為、ほとんど検出されていない。

**遺 物** 南関東系の大形の壺、小形の壺それぞれ1点出土した。大形の壺はやや南西に傾斜した状況で出土した。

**所 見** 出土遺物及び出土状況から、弥生時代後期の土器棺墓と判断した。小形の壺形土器が、恐らく土器棺の蓋として使用されたのであろう。棺、蓋とも南関東系の土器の組み合わせとなる。

## 6-012

**検出地区** C5-24G。台地平坦部に立地する。周辺の弥生・古墳時代の遺構として、6-010、7-008等がある。

**遺 構** 不整形円形の小型の土坑で浅い皿状の丸底の土坑である、6-011同様、表土除去の際に既に上部を掘取った可能性が高い。形状は出土した出土した壺形土器に合わせた状況であった。坑底に小穴等の付属施設は検出されなかった。

覆土は暗褐色土が充填されていたが、土坑の規模が壺形土器と同じ為、ほとんど検出されていない。

**遺 物** 北関東系の附加条縄文を施した大形の壺、南関東系の小形の壺それぞれ1点出土した。大形の壺はやや南東に傾斜した状況で出土した。

**所 見** 出土遺物及び出土状況から、弥生時代中期末～後期初頭の土器棺墓と判断した(註)。小形の壺形土器が、恐らく土器棺の蓋として使用されたのであろう。棺身として使用された大形の壺が、北関東系の附加条縄文を使用しながら頸部に南関東的な羽状構成を採用している。また、そうした折衷型の土器棺の蓋として南関東系の土器が採用されている。折衷型の土器棺と南関東系の土器との組み合わせは、印旛沼南岸における特殊性を指摘出来き、また、示唆に富む例となろう。

註 土器棺墓出土の例では無いが、類例として佐倉市大崎台遺跡201号住居跡出土の壺形土器を考えている。白井市教育委員会、高花宏行氏、ご教示に依る。

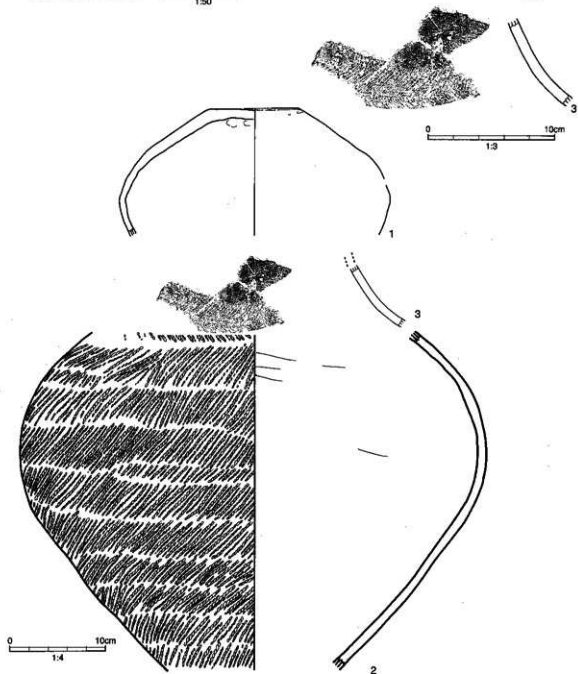
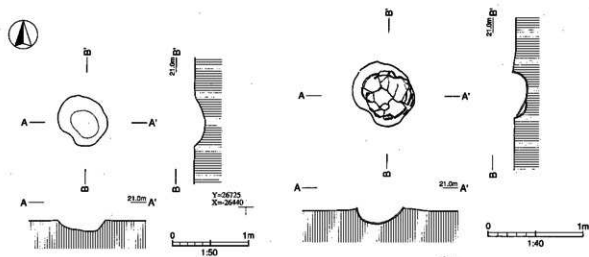


图 2-2-47 6-012

表 2-2-35 6-012遺物観察表

(単位mm)

№	種別 器形	法量 口径×底径×器高 成形・調整等の特徴	色調 焼成	粘土	遺存	備考
1	弥生 壺	一×(90)×(135) 胴部樽状に膨らむ 内外面とも器面の摩耗剥離が著しい 外面 ヘラミガキ 内面 ヘラナデか?	橙褐色	砂粒 橙色粒	1/4	
2	弥生 壺	一×一×(360) 最大径(488) 胴上半が張る 外面 胴部一附加条縄文(胴上部と胴中～下は異種原体と思われる) 内面 胴部一ヘラナデ 器面の剥離著しく残存は一部	橙褐色	粗砂粒 白色粒多	胴部片	
3	弥生 壺	一×一×一 外面 胴部 無文ヘラミガキ調整底部附加条痕縄文による羽状構成 内面 ヘラミガキ	橙褐色 青	粗砂粒 白色粒多	胴部片	NO2と同一個体

表 2-2-36 弥生・古墳時代土坑跡一覧表

(単位m)

遺構番号	検出 調査区	平面形 規模;長軸×短軸×壁高 遺構の状況	覆土の状況 遺物の状況	その他 備考
06-011	CS-04	不整円形 0.48×0.46×0.08 主軸 N-9°-W 浅い皿状の丸底の土坑	暗褐色土系の土が充填される 南関東系重系土器2点出土。坑底に転倒した状況で出土	土器棺蓋
06-012	CS-24G	不整楕円形 0.68×0.48×0.16 主軸 N-38°-W 浅い皿状の丸底の土坑	暗褐色土系の土が充填される 南関東・北関東系の整形時2点、坑底に転倒した状況で出土	土器棺蓋
01-028	D7-85	不整楕円形 1.03×0.65×0.46 主軸 N-44°-E 坑底は凹凸があり斜めに立ち上がる 坑底に小穴1基検出	色調を基本に7層に分層 人為的な埋め戻しが想定される 覆土中から少量出土	01-013の遺物と接合

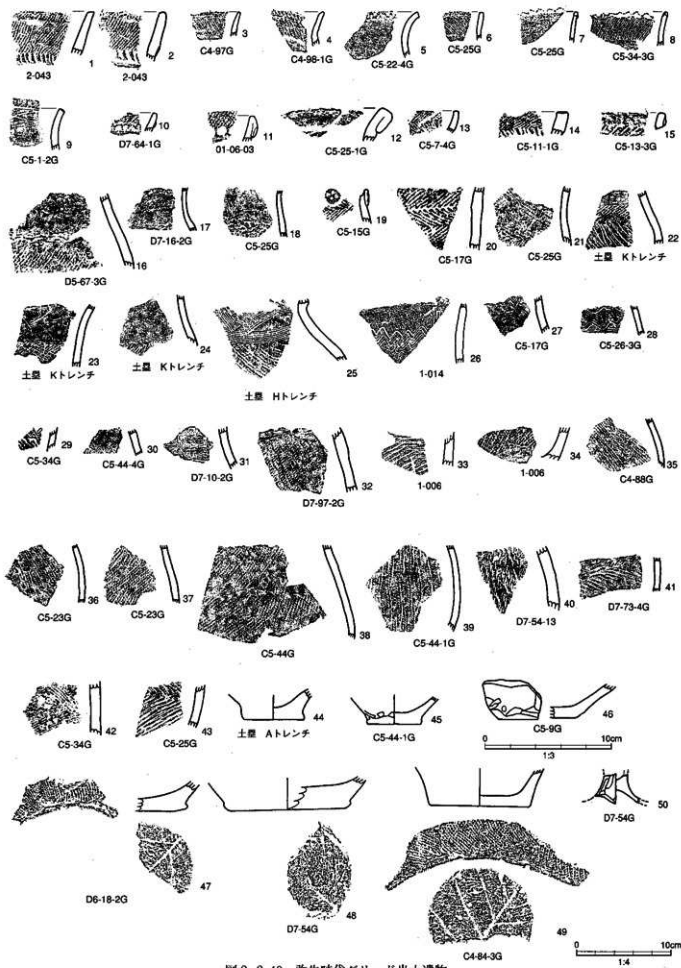


図 2-2-48 弥生時代グリッド出土遺物